**消えた未来**

https://www.pixiv.net/novel/series/9715849

**[Hoge](https://www.pixiv.net/users/8222996)**

材木座と一色がタイムリープして最悪の未来を回避する話

#やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。 #材木座義輝 #一色いろは #比企谷八幡 #雪ノ下雪乃 #由比ヶ浜結衣

共17话2022年12月10日更新45,491字1小时31分钟

# 1、プロローグ

994字2分钟

本日は材木座の誕生日ですね、おめでとうございます。  
というわけで話を考えてみました。  
  
高校卒業から十年後、由比ヶ浜は海外へと旅立つ決心をする。  
しかし不慮の事故で由比ヶ浜は亡くなってしまう、そしてそれが引き金となり皆の人生が大きく狂ってしまったのだ。そんななか材木座と一色は交通事故にあい、瀕死の重傷を負う、その時出会った謎の存在に現状を変えたいと願い過去へと戻してもらい歴史改変を行うことに・・・  
よくある？タイムリープものです。  
  
個人的に一色いろはってヒロインの一人になってますけど原作読んでもヒロインというより名わき役に近いような気がするんですよね、停滞した関係を動かしてるような、八幡に最適解を選ばせてるような、妹は家で一色が学校で八幡を後押ししてる感じがするんですよね、  
  
自分が脇役（特に材木座）が好きっていうのもあるんですけどね。  
総武高校で起きるイベントの順番が前後している所があったり久々なのでおかしいところも多々あると思いますがそこはご容赦を、書き溜めてるんで修正しつつ投稿してきます。

2022年11月23日凌晨2点02分

「んじゃみんな行ってくるねー！」

高校を卒業して十数年、比企谷八幡と雪ノ下雪乃は結婚。  
そして今日は彼らの親友の由比ヶ浜結衣が海外へと旅立つ日、彼女は勉強をして発展途上国支援団体に所属、本日現地へと派遣されることが決定されていたのだった。

空港にて  
「あっちについたら生水は飲んじゃ駄目よ？」  
「食い物も気をつけろ、なんでも食ったら腹壊すぞ」  
「んもー！ゆきのんもヒッキーも！あたしは子供じゃないって！」  
葉山をはじめ見送りに来ていたほかの面々からも激励の言葉を投げかけられる

「では！不肖この由比ヶ浜結衣！これより海外へと旅立ちます！」  
ビシッと敬礼のポーズをとる  
「戻ってくるのはいつになるかわからないし、行くところは通信があまり整備されてないところだからすぐに連絡もできないかもだけど必ずするから！」  
「由比ヶ浜さん、無事で帰ってきてね」  
そういって由比ヶ浜を抱きしめる雪ノ下  
「ヒッキーもゆきのんを悲しませちゃダメだよ！」  
「ああ、約束する」  
ひとしきり皆と別れの挨拶をした後  
「それじゃみんな！行ってきまーす！」  
皆が見送る中、元気に手をぶんぶんと振って搭乗ゲートへと向かう由比ヶ浜であった。

由比ヶ浜が日本を発ってから数週間後  
「臨時ニュースです、某国でクーデーターが発生！日本の支援団体がいる建物が反政府軍に攻撃されました！建物は崩壊、中にいる人達は絶望的と思われます！」  
テレビを見ていた比企谷達は絶望する  
「え？嘘・・・八幡？由比ヶ浜さんは？由比ヶ浜さんは無事よね・・・？」  
「・・・わからん・・・」  
その数日後由比ヶ浜家に由比ヶ浜結衣が死亡したという連絡が来る。

そして、遺体だけ戻ってきた、遺体の損傷が激しかったが奇跡的に顔だけはきれいな状態だった。

「嘘よ・・・由比ヶ浜さんが・・・そんな・・・」  
雪乃は棺桶に縋りつく  
「私が悪いんだわ・・・」  
「雪乃？」  
「私が八幡と結婚なんてしなければ、いいえ八幡を好きになんてならなければ由比ヶ浜さんは海外にいくことなんて・・・私が！私が悪いのよ！」  
泣きながら叫ぶ雪乃  
「雪乃ちゃん！・・・ごめんね比企谷くん雪乃ちゃんいっぱいみたいだからしばらく家に連れて帰るね？」  
陽乃は泣き叫ぶ雪乃をそのまま実家へと連れて帰ることとなる。  
比企谷八幡はただそれをぼーっと見ていることしかできなかった。

# 消えた未来　第１話

1,017字2分钟

戸塚が由比ヶ浜を好きだったというのはオリ設定ですが、由比ヶ浜が戸塚を奉仕部に連れてきた経緯があいまいだなぁと、最も一巻の内容は細かいその辺の設定とかまるで無かったと思いますので、成り行きはご都合主義だったと思いますが。そういうのからもアイディアの元になってます。

2022年11月24日凌晨5点00分

「材木座君、ちょっといい？」  
由比ヶ浜の葬儀の帰り、材木座は戸塚に呼び止められそのまま飲み屋へと向かうこととなった。  
「ごめんね、誰かに聞いてほしくて」  
「まあ戸塚殿は我の親友であるからしてだな？当然であろう、しかしなぜ八幡を呼ばぬのだ？やつもおるであろう？」  
「八幡には聞かれたくなくてね・・・」

そういうと席に座り注文をする、材木座はビールだったが戸塚はいきなり度が強い酒を注文  
「戸塚殿ちょっと飛ばしすぎでは？」  
という材木座に  
「あはは・・・本当はお酒苦手なんだけどね・・・」  
気の抜けた笑顔を向ける戸塚  
注文したグラスが届くと戸塚はぽつぽつとしゃべり始めた。

「誰にも言って無かったけど・・・実は僕結衣ちゃんのこと好きだったんだ」  
え？という表情をする材木座、そんな素振りは全くなかったようだがと当時を思い返す。

「高校一年生の時からいいなと思っててさ、結衣ちゃんってあの性格でしょ？声はかけたけど友達扱いで、二年生になって同じクラスになってようやくチャンスつかんだと思ったら奉仕部に連れてこられてさ、その時結衣ちゃんが八幡のことが好きって態度ですぐわかっちゃたんだ、でも僕は八幡のことも大好きだからさ、結衣ちゃんに告白なんて八幡を裏切るような気がして全然できなくてさ」  
グラスに入った酒を一気にあおると戸塚は深くうなだれる

「そんなん八幡が雪ノ下殿と付き合った時に告白すればよかったのでは？チャンスはいっぱいあったのでは？よく知らんけど」

「・・・結衣ちゃんはずっと八幡の方を向いてるんだ、八幡も雪ノ下さんも結衣ちゃんのことをすごく大事に思ってるの見ててわかるんだよ、それに電話やLINEするといつもあの二人の話ばかりで・・・とても告白なんて・・・」

暗い顔で酒を一飲みにする戸塚

「そんなんでずるずると友達みたいな関係続けてたらいつの間にかこんな年になって、結衣ちゃんが海外に行くって時も止められなくて、僕ってダメな男だよね」  
材木座はなんと言っていいかわからずただ黙って聞いている。

「僕がもっとしっかりした男でもっと早く気持ちを伝えてればこんなことにはならなかったかもしれない、僕が結衣ちゃんを殺したようなもんだよ・・・」

「戸塚殿・・・」  
材木座はようやく言葉を発したが、やはり何を言っても戸塚を傷つけてしまいそうで目の前で酒を煽りながらすすり泣く戸塚をただ黙って見ていることしかできなかった。

**消えた未来　第２話**

2,692字5分钟

悲惨な現状の中、材木座はトラックにひかれ重傷を負う、そして・・・  
暗い展開が続きますが、次から急展開です。  
尚、投稿タイミングは書き溜めてるのを修正後にしております。

2022年11月24日晚上7点53分

数日後、比企谷邸を訪れる材木座

「八幡が引きこもっていると聞いてのう、陣中見舞いだ」  
「ありがとうございます、おにいちゃんは雪乃さんがいなくなってからずっと部屋に籠っているんです、ただ引きこもってるだけならいいんですけど・・・」  
含みのある言い方をする小町、ん？と首を傾げ比企谷の部屋へと向かう

「頼もう！八幡よ調子はどうだ？久々にゲームとかどうであろう？」  
そこにはずいぶんとやせてしまい、生気の抜けた顔をした比企谷八幡がベッドに座っていた。

「ああ、材木座か、すまんな学校休んじゃってて」  
「学校？・・・これは！妹君！・・・」  
「そうなんです、おにいちゃんこの間までずっと自分が選択をしたからだ、自分が結衣さんを殺したんだってブツブツ言っていて・・・最近そんなこと言わなくなったと思ったらおかしくなっちゃって、私もどうしたらいいか・・・」

「小町、大丈夫だ、ちょっと気分悪くて休んでるだけだからな、そうだ部活は雪ノ下と由比ヶ浜がいれば大丈夫か？そこだけだ心配だ」

「部活・・・あ・・・ああ、そうであるな・・・大丈夫だ、そっちは我が適当に言っておくから」  
「お前が？大丈夫か？由比ヶ浜からキモイ！とか言われても傷つくなよ？」  
生気の抜けた顔で笑いかける比企谷

「で、では我はこれにて・・・」  
と部屋を出る材木座  
「妹君、八幡はずっとああなのか？」  
「はい・・・私もどうしたらいいかわかんないんです・・・この間は制服出して学校行こうとして・・・お兄ちゃん・・・」  
泣き出す小町、いたたまれなくなる材木座  
しばらくして小町が落ち着いたところで材木座は帰ることにした。

街中で信号待ちをしてたら呼び止められた。  
呼び止めたのは見覚えのある美人である。  
ただものすごく顔色が悪く憔悴しきっているようだ。  
ハテと首をひねっていると思い出した。  
確か葬式の日に騒いでいた雪乃を連れて帰った姉だったかと思っていると言葉を続けられる。

「君、たしか八幡くんの友達だったよね？ちょうどよかった、ちょっといいかな？」  
比企谷八幡の名前まで出して詐欺や逆ナンでもあるまいとついていくと喫茶店へと入っていった。案内された席にはまたもや見おぼえのある女性がすでに座っている。

「どうも・・・」  
そこにいたのは一色いろはだった。  
後ろから先ほどの美人に席に座るように促される。  
「材木座君だっけ、ごめんね偶然見つけたもんだから声をかけちゃった、私は雪ノ下陽乃、雪乃ちゃんの姉よ」

陽乃は話を続ける  
「実は雪乃ちゃんがおかしくなっちゃってさ、・・・ガハマちゃんが亡くなってからずっと自分がガハマちゃんを殺した、自分が悪い、自分が八幡に告白したからだって、あの世でガハマちゃんに謝ってくるなんていって自殺未遂までしちゃって」

陽乃はうつむき話を続ける  
「自殺を止めようとしたけど半狂乱になって叫んじゃって・・・目を離すと刃物で手首を切ろうとしたりして完全におかしくなっちゃったの・・・私もどうしたらいいかわからなくなって」  
潤んでる目にハンカチを当てながら話を続ける。

「ごめんなさいね、もし雪乃ちゃんから変な連絡があったり外にいるのを見つけたら私に連絡頂戴、それと虫のいいこと言ってるのはわかるんだけど、雪乃ちゃんと八幡くんを助けるのに協力してほしいの、何をしてもらうかは全く考えてないけど・・・」

「雪乃先輩は大事な先輩です、その時は協力させてください」  
「八幡は盟友であるからして、我も無論協力させていただく」  
「ありがとう・・・本当は電話でもよかったんだけど実際にあって話をしないと不安で・・・ごめんなさい・・・ここの会計は私が持つから」

高校の時見た時の迫力の面影が全くなく、ただ憔悴しきっている陽乃を後にして店を出る。  
外は雨が降っていた

「・・あんなにわたし頑張ったのに、あんなにいろいろあってようやく先輩は選んだのに・・・なんでこうなちゃったんだろ」  
傘を差し駅までの道すがら一色と材木座は一緒に歩いていた。

はて？あまりかかわりなかったがこの女は確か生徒会長だったか？  
なにやら厄介ごとをいろいろ押し付けていたような？と首をひねる材木座

「我も深くは知らないが由比ヶ浜殿は八幡達が付き合うようになってからも一緒にいたらしいが」

「確かにほかの人にはそう見えてたみたいですけど、実際は距離を置くようにしてたみたいです、でもやっぱり先輩のこと忘れらないみたいでした、雪乃さんとも遊んでましたし、よく二人の話してました」

「左様か、ならば今回海外に行くというのは？」  
「きっとこのままじゃダメだと思って先輩たちと物理的に距離を置いて本当に忘れたかったのかもしれません」

「そんな・・・そんなの八幡が悪い！はっきりと由比ヶ浜殿をフラなかったのが悪い！八幡が酔った時にだな？告白したときのセリフだの、あの二人との話いろいろ聞き出したがあやつが由比ヶ浜殿をフッた時のセリフ知っておるか？」

「いえ・・・」

「「俺を待たなくていい」とかなんとか言ってそうだ、なんだそれ？はっきりと氷の女王が好きだとお前と付き合えんとかいえばよかっただろ！そうすれば・・・」

「それが言える人たちだったらわたしは苦労しなかったですよ！」  
一色が叫ぶ

「わたしだってはっきり言ってほしかった、でもあの人たちはそういうことが言える人じゃなくて、それでもなんとか答えを出して・・・もし答えを出さなかったらそのままでぬるま湯みたいな関係を今でも続けてたと思います、そしてもっと悪いことが起きてたかもしれません・・・」

「おぬしが何をしたかはしらぬが、奴がはっきりと・・・」  
「んじゃどうすればよかったんですか！わたしがやったこと間違ってたっていうんですか！あの人たちのことあなたは何を知っているんですか！」

叫びながら涙目になる一色  
「・・・ごめんなさい」  
そのまま一色は横断歩道を走って渡ろうとする、傘をさしていた材木座はうなだれていて気が付かなかった。  
すでに信号は赤になっていたのだった。  
気が付いたときには遅かった。  
トラックの激しいブレーキ音が響く

「あ、あぶな」  
赤信号の横断歩道を走ってる一色にトラックが迫る、材木座は傘を放り出しトラックの前から一色を救おうと後ろから突き飛ばした。  
「きゃぁ！」

一色を突き飛ばすと同時に材木座はドン！という強い衝撃を感じる  
材木座は一色の代わりにトラックに跳ね飛ばされ体は宙を舞っていた。

**消えた未来　第3話**

3,215字6分钟

今更ですがこの作品、タイトルも内容も不穏でアンチ臭い感じがすると思いますが、普通に大団円で締める予定です。

2022年11月26日凌晨5点00分

気が付くと頬に固い感触がある  
「あれ？生きている？」  
うっすら目を開けると道路に倒れているようだ、眼の前には血の海が広がってる、腕や足の感覚がない、動けない、こりゃまもなく死ぬなと思う材木座。

目の前に救急車があり、救急隊員が立っている、しかしなぜか全く動かず直立不動の姿勢をとっているようだ、それに周りの様子も何かおかしい

周囲の雑音が全く聞こえない、それに目の前の救急隊員以外の人が誰もいないのだ。  
時間が止まってるように感じた。

目の前の救急隊員が姿勢を全く変えずにしゃべり始めた  
「おまえ、もし願いを一つだけ叶えてやると言ったらどうする」

こいつは何を言っているのか？ははぁさてはこれが走馬灯というやつか、と思ってると

「信じられんかもしれんが俺は今こいつの体を借りてしゃべっている、そんなことより何か願いはないのか？」

と答えを即される、体を借りてる？なんだそれ？夢か？ならどうせ夢なのだ、だったら今一番叶えたいことを言ってやろう

「八幡達が幸せな選択をとった世界が見たい、あやつらが幸せで笑顔でいてくれる未来が欲しい、でもどうせ叶えられんだろ」

目の前の救急隊員はそれを聞くとそのままの姿勢で表情を変えず笑い声を上げる

「アハハハハ、さっきの女も全く同じことを言いやがった！今までの連中は全員ありきたりなことばかりだったから聞くだけ聞いてあの世に送っていたんだが、家族でもない第三者が幸せになってほしい？お前ら正気かよ？面白い、さっきの女共々願いを叶える手助けをしてやる」

「なに？マジで？どうやって？」

「今の記憶を持ったまま過去に戻してやる、望む未来を導いてみろ、未来が決定した段階で今に戻してやる、ただ代償はいただくがな」

「なぜ今に？また死ぬのか？・・・」  
「今といっても時間だけだ、そもそも戻さなかったら人より早く寿命を消費したことになる、まあこっちの都合だ、成功すれば今とは別の現在が待っている、それを早送りみたいな感じで記憶だけは整合をとらせてやるから安心しろ」

「・・・よくわからぬが、本当に八幡達を助けることができるのか？もし失敗したら？」

「その時は今が確定する、修正不可能な段階でも戻すからな？その場合は今の状況だな、もうすぐお前は死ぬ、そういう運命だからな、過去を変えない限りは」  
救急隊員はそのままの姿勢で笑う、ものすごく不気味だ、そもそもこいつは人間なのか？

「何にせよお前らの頑張り次第だがな、それより代償がなにか聞かないのか？あの女もなにか聞かずに二つ返事だったからな！とんだ自己犠牲だ！」

そういや聞いていなかったと思う材木座だったが遅かった。  
「んじゃ次に目を覚ましたところからスタートだ、せいぜい頑張りな」

その声が終わったとたん周りの雰囲気が一変する、唐突に聞こえる雨音、雑音、野次馬の群れ、目の前の救急隊員もさっきのことなど無かったかのように突然動き出しなにか声をかけてくる

材木座は薄れゆく意識の中次に目を覚ますことがあるのだろうかと思い瞼を閉じた。

材木座は目を覚ます。冷たいリノリウムの床に倒れているようだ。  
「ここは一体・・・確か車に轢かれて？」  
起き上がり周囲を見渡す  
「え！・・・ここは総武高校！？なんで！？」  
懐からスマホを取り出して見ると表示されてる年月日が自分が高校生の時になっている。

「あのよくわからん奴は現実だったのか？」  
立ち上がると自分の恰好の確認をする  
「格好や持ち物は高校生の時のだな、死ぬ前の記憶もあるし、さっきのは現実？とりあえず八幡のところへ行ってみるか」  
時間は放課後、人影はほとんど見当たらない。

奉仕部へと向かう材木座、特別棟の部室前にくると、誰かがしゃがんでいるのが見えた。  
「ん？お主は？」  
振り向いたその女子は驚いた表情をすると  
「え？なんで？・・・とにかく中に入らないで静かにしててください」  
と怖い顔をしつつ中の様子を耳をたてて聞いているようだ。

材木座も真似して聞いてみると。  
「俺は、本物がほしい」  
比企谷の声が聞こえた。  
「私には、わからないわ」  
雪ノ下の声も聞こえガラッと戸が開きそのまま雪ノ下はこちらを見ずに渡り廊下の方へと走っていった。

中では  
「一緒に行くの！・・・今行かなきゃ！」  
由比ヶ浜の声と比企谷がなにか言ってる声が聞こえ二人が教室から出てくる。  
「あれ？」

二人と目が合う材木座  
「お前ここでなにしてんの？」  
と不思議そうな顔をしている二人に一色が叫ぶ

「先輩！今日は会合休みです！あと雪乃先輩は上にいます！早く行って下さい！」  
「お、おう・・・」  
走り出す二人、そのあとを追いかける一色、材木座は状況が全くつかめず

「え？あ？ええ？ちょっと…」

とりあえず一色のあとを追いかけた。  
空中廊下の出入口からこっそり見ると  
外では比企谷達が互いに何か言っているようだ。  
少し笑顔が見える。

なにが起きてるのかさっぱりわからない材木座、今度は後ろから声がする  
「やっぱりあの人達にはかないませんよ・・・ところでなぜあなたがここにいるんですか？前はいなかったのに」  
振り向くと一色が立っていた。

「え？いや、そのだな…ん？前はいなかった？」  
状況を整理しようと頭をフル回転してる材木座だったが  
「ちょっとこっちまで来て下さい」  
と強引に手を握られ引っ張られ一年生の教室へと連れ込まれる。  
放課後のせいか誰もいない

「ここなら誰もいません、答えて下さいなぜあなたはあそこにいたんですか？」

これが高校生の頃の材木座だったら女子から手を握られることによって興奮し、二人っきりのシチュエーションに  
「俺モテちゃってる？告白？」  
とか考え勘違いしてしまうのだが、体は高校生だが中身は独身アラサーである。

彼女はいないが仕事柄女性と話すことも普通にあり、また風俗的な店にも行ってるわけで高校の時とは比べ物にならないほど免疫はついているのである。

しかし女子高生に手を握られるのは正直ちょっとだけドキドキはしてしまった。  
「ほふぅ、JKと二人っきりとはいけない妄想をしてしまうのう・・・ん？この女子なんか見覚えのある顔・・・？」  
とすぐ冷静さを取り戻す。

「先ほど『前は』と申したな、なるほどお主も『二度目』か？」  
もしかして事故の直前一緒にいた一色いろはではないか？たしかあの変な存在も『あの女』と言っていたと思い当時の自分のキャラ的に言いそうな台詞をチョイスしてかまをかけてみた。

すると一色は深いため息のあと安堵したのか落胆しているのか複雑な表情で  
「やっぱりそうでしたか、材木さんでしたっけ？もしかしてトラックから突き飛ばしたのは？」

「本当に我と同じ境遇だったか、うむ、いかにも我である、材木ではなく材木座であるな！しかしなぜ？お主は轢かれなかったはずだが？」

一色はまたため息混じりに言う  
「突き飛ばされた後トラックの影から飛び出した別の車に撥ね飛ばされて道路に叩きつけられました、なのでお礼は言いません」

材木座的には救ったつもりだったのだが結局意味はなかったようだ  
「え、えええ…さ、左様か、申し訳ない、して一体今のはなんだ？」

「実は今の時期、海浜高校と合同でクリスマス会を開こうとしてるんですがうまくいってなくて…」  
と一色はこれまでのあらましを伝える。  
「成る程、しかしなぜ奴は今のこの場所のこの時間に戻したのだろうか？せっかくだからもっと前とか例えば八幡らに出会った頃にだな」  
と首を捻る材木座に一色は力強く言った。

「いえ、あいつはちょうどいい時間に戻してくれました、今でいいんです、先輩達が互いに本音をぶつけ合った今からが本番なんです」

**消えた未来　第4話**

2,329字5分钟

材木座と一色はタイムリープ、比企谷八幡の本物が欲しいと言った時間に現れ、そこでどうすれば悲惨な未来を回避できるか奮闘します。

2022年11月27日凌晨5点00分

「先ほどの本物が欲しいとかいう発言が本音という奴か？して今からが本番とは？」

「あの先輩の『本物』発言で先輩たちの関係性が少しだけ前に進んだんです。それに影響されてわたしも・・・ってそれはいいんです、それよりこれからどうすれば・・・」  
意気込んだのはいいものの来たばかりでノープランな一色

「先輩、明らかに雪乃先輩意識してますからね、雪乃先輩なんて先輩と話すときの表情全然違いますし、結衣先輩も先輩のことめっちゃ意識してるのもろバレですよ」

「そうなの？なら奴がさっさと告白して由比ヶ浜殿をバッチリ振ってしまえばよいと思うのだが」

それを一色はひきつった笑みで返す  
「それが出来ないから苦労してるんじゃないですか？それにそうなるとまた結衣先輩が独りぼっちになって結局同じ結末になるのわかってます？バカですか？もう一度死んでみたらどうですか？」

「う、笑顔なのにちょうこわい、何もそこまで言わんでも・・・」  
怒り心頭の一色  
「例えば逆に結衣先輩と付き合ってしまうと今度は絶対雪乃先輩は離れちゃいますよ、そうなるとまたやばいことになりますよ、どっちかと付き合っても三人一緒にいないとダメなんですよ、結局八方ふさがりじゃないですか」  
と頭を抱える一色  
「いっそのこと重婚可能な国に引っ越してもらうとか・・・そうですよ、退学してもらってそっちの国の国籍を・・・やはり裏社会とかに・・・」  
などとどんどん無茶なことをつぶやき始める

ぶつぶつ言っている一色が鬼気迫る様子だったためすっごく怖いと思う材木座だったが、咳払いをして気持ちを切り替えると

「あーあのーよろしいか？あのー戸塚彩加を知っておるか？我らの親友でテニス部の部長をやっておる」

「は？知ってますよ？戸塚先輩ってあの『王子』と呼ばれてる人ですよね？一年生の間でも人気ありますよ、戸塚先輩目当てでテニス部に入った人もいるとか、そういえば先輩とも仲良かったみたいですけどその人がなにか？」  
一色は顔をあげ材木座のほうに向くが表情がとても恐ろしい、材木座はびくびくしてしまうがどうにか言葉を続ける

「前に聞いたのだが、戸塚殿は由比ヶ浜殿に惚れてたとか」  
「・・・マジですか」  
驚く一色

「ウム、なので戸塚殿と由比ヶ浜殿をカップルにするのでおじゃる、八幡は戸塚殿を病的なまでに気に入っておる、正直我もメロメロであるしな、もし付き合った場合、由比ヶ浜殿も距離置く必要が無くなることは間違いない！寧ろ戸塚効果で常に一緒にいることになるであろう！これぞ三方一両損！」

「なんか意味不明ですし不穏なセリフが聞こえましたが・・・なるほどです、大体わかりました。その線でいきましょう」  
フムフムと頷く一式

「ただどうやって付き合わせるのかがわからん我は恋愛偏差値０であるからに・・・」  
と、今度は材木座が頭を抱える

「その辺は任せてください、クリスマス会の手伝いとして無理やり奉仕部に掛け持ち部員として入部させちゃいましょう！拒否しても生徒会権限で強引に協力させます、確かテニス部は大会でいい成績を残してません、今回手伝えば部費のアップを約束するといえば・・・」  
一色の提案に眉を潜める材木座

「おぬしも大概ワルよのう」  
「なりふり構ってはいられませんからね」

次の日  
一色は戸塚に海浜高校とのクリスマス会の準備が難航し比企谷達が困っている、このままだと圧倒的に人手が不足するので手伝って欲しいと伝える。

「部費なんていいよ！八幡の力になるなら僕手伝うよ！」  
二つ返事で了承する戸塚、一色はその足で奉仕部へ行き了解を取り付ける  
「なにぃ！戸塚が！？」  
叫ぶ比企谷、戸惑う雪ノ下の由比ヶ浜であったが比企谷の強いプッシュで難なく了承を得ることに成功した。

放課後になり海浜との会議はの待ち合わせ場所に比企谷、雪ノ下、由比ヶ浜、戸塚がやってくる。  
「せんぱーい、お待たせしました」  
「・・・なんでお前がいんの？」

コンビ二から出てきた一色の後ろを背後霊のようについてくる人影、そう材木座である。  
「いやー戸塚殿が八幡を手伝うときいてのう！八幡と言えば我！戸塚殿と言えば我！故に我参上！」  
とビシッとポーズを決める材木座

「なんかいってますけど、この人無駄に体が大きいから海浜への牽制になるかもとスカウトしたんですー」  
といつもの笑顔の一色に

「スカウトって・・・大丈夫なの？」  
と比企谷はいつものようにコンビニ袋を一色から受け取ろうとするが

「あー今後そういうのは後ろのでかいのにやらせるんでいいですー」  
というと材木座にコンビニ袋を押し付ける  
「八幡が持つといってるであろう！なんで我が」  
小声で抗議する材木座に  
「ここで先輩にやらせると雪乃先輩達が不安になるでしょう！いいから持ってください！」  
と小声で命令する一色、その様子を端から見ていた雪ノ下は

「あの、一色さん？大丈夫かしら？」  
と声をかけるが  
「大丈夫です！ほら皆さんいきますよ！先輩も雪乃先輩も！結衣先輩と戸塚先輩も遅れないでくださいねー」  
とわざと比企谷と雪ノ下の背中を押して二人ならんで歩くような形にする。  
「あ、ああ、ほむん！さてお二人とも行くでござる！」  
と材木座もどうにか戸塚と由比ヶ浜を先導するようにして一色のあとを付いていく。  
材木座の後ろでは「一色さんってあんなキャラだっけ？」  
「うーんなんか変だけどそれよりも中二がいろはちゃんと一緒にいるのがビックリ」  
と二人が会話してるのが聞こえる。  
「我もビックリでおじゃる、本当に大丈夫なの？」  
と不安げな材木座であった。

**消えた未来　第5話**

2,367字5分钟

クリスマスイベントとディスティニーランドに行く話になります。  
一色が葉山に告白することは無くなり代わりに戸塚を由比ヶ浜に告白させるように仕向けます。

2022年11月28日凌晨5点00分

海浜高校との会議は戸塚がいてもやはり転生前と同様まるで進まなかった。

「八幡ごめん、海浜の会長さん達が言ってることなにもわからなかった。力になれなくてごめん」  
「大丈夫、わかる方がおかしい、俺も全くわからん、戸塚はいてくれるだけで俺の癒しだ！」  
「ガーン！わからなくていいんだ！」  
「この男もあの連中も何とかならないかしら・・・」  
休憩中比企谷達が集まり相談してるなかで材木座は一人離れベンチに座る。  
そこに一色もやって来た。

「当時は大変でしたけど今見るとみんなガキですね、あんな横文字連発して煙に巻いて責任をごまかせると思ってんですかねー？」

「まあ高校生であるからに、責任もなにも大人に丸投げ出来る年齢だからであろう、今回問題になっても結局頭を下げるのは先生たちだしな、ってかおぬしが主導権握ればよかろう？」

「そうですねー今ならできないこともないんですけど、まあ一応同じように進んでるので次で雪乃先輩が決めてくれます、そうしないと意味ないんですよねー」

「フーム？よくはわからぬが、なるほどなるほど、して我は今後何をすれば？」

「何だかんだで最終的にやることは同じなると思います。なので前もってこっそり準備だけはしておきます。材木先輩にはその手伝いお願いします。具体的には発注や物品購入、それらの集計ですね。死ぬ前の仕事に比べたら楽勝でしょう？」

「仕事してた時は見積作成受発注なんて普通であったしな！任せられよ！」

「うわ、なんですか？頼りになる俺かっこいいだろみたいな感じですか？ごめんなさい材木先輩は完全にタイプじゃないので絶対無理ですごめんなさい」

「う・・・ひどい・・・ちょっとはほめてくれても罰は当たらんと思うのだが・・・」

「材木先輩のプライドとかはクッソどうでもいいんです、それより週末、皆でディスティニーランドに行くことになるはずです、そこでわたしは葉山先輩も誘って告白して振られる事になってはずです」

「おぬし酷すぎる、我のクラスメイトはもう少しオブラートにくるんで言ってくれるぞ・・・しかしお主も難儀であるな」

「まー全部先輩のせいなんですけどね？でも今回は葉山先輩は誘いません、戸塚先輩を連れてって結衣先輩との距離を詰めてもらいましょう」

「グッドアイディアであるな、んでは頑張ってくれ、恋愛偏差値０の我は役に立たぬからな、それよりも知識無双状態なので生前やってた株とか投資とかをだな・・・プレミアがつく予定の代物も買い漁らねばならぬし」

「何言ってんですか！アホですか！この日は先輩と雪乃先輩もぐっと距離を詰めるはずなんですよ、確か前聞きました、二人で一緒に乗り物にって・・・えーっと・・・まあいいです！とにかく死にたくなかったら材木先輩も来て下さい、分担しましょう！」

その後海浜との会議は終わりやはり生前同様平塚先生の元へ相談に行くことになる。

「君たちはクリスマスの何たるかを知らないようだな！」  
とやはりディスティニーランドのチケットを4枚出してくる。  
「ビンゴ大会で当たったのだ！これで二回行けるね！って二回も言われた！」  
とやはり涙目の平塚先生を一色は無視してチケットを奪い取ると  
「先輩達一緒にいきません？雪乃先輩は年パスもってるから不要ですよね？」  
「え？ええそうなのだけれど・・・一色さんにその話したかしら？それより私は行くとは一言も・・・」  
と断ろうとする雪ノ下に  
「しましたよー？そんなことより、先輩と戸塚先輩と結衣先輩とわたしでちょうど４人ですね？」  
一気にまくしたてる一色  
「あ、ああうん・・・なんでそんなにやる気なの？」  
と比企谷  
「一色さん？わたし行くとは一言も・・・」  
と雪ノ下  
「えー、結衣先輩、雪乃先輩と一緒に行きたいですよね？先輩も妹さんのプレゼントとかほしいですよね？」  
と一色は由比ヶ浜と比企谷を焚きつける  
「え？う、うんそうだね！ゆきのん！あたしゆきのんと一緒に行きたいな」  
「え？妹のこと話したっけ？でもあーそうだな・・・小町のプレゼントとか選んでもらうとうれしい・・・」  
「ちょっと二人とも・・・」  
困惑する雪ノ下を尻目に今度は戸塚へ向き直り耳元でささやく  
「戸塚先輩、ディスティニーランドの花火が打ち上げる時って告白にピッタリのシチュエーションで知ってました？」

「え？そうなんだ・・・」  
今まで黙っていた戸塚もそれを聞いて比企谷達に加勢することとなった。  
「雪ノ下さん、みんなでいこうよ！僕みんなのこともっと知りたいな」  
「ちょっと・・・戸塚さんまで・・・仕方ないわね・・・」

それを見てガッツポーズをする一色

「なんでお前そんなにやる気なの？なんなの？」  
といぶかしげな視線を向ける比企谷に  
「クリスマスのディスティニーランドなんてこんな機会でもないといかないじゃないですかー、あーでも５人ってちょっと割り切れないですよね、もう一人連れていくんでよろしくです！」

「割り切れないってなんだよ・・・葉山でも呼ぶのか？」  
「それは当日のお楽しみということで！」

一色はウィンクしてそのまま職員室を出ると、扉の外でしゃがんで一部始終を外から聞いていた巨体に話しかける  
「聞いてましたー？んじゃ当日遅刻しないようにお願いしますね？」  
「あのー我のチケット代は？」  
「そんなの自腹でどうにかしてください」  
と冷ややかな目で材木座を見下ろす一色  
「なにこのJK怖い、でもその怖さが癖になりそう・・・」  
と身震いする材木座に  
「うわっキモ！ほんっと生理的に無理なんでそういうのやめてくださいごめんなさい」  
と一色はまくしたてそのまま材木座を引っ張り職員室から離れ当日の打ち合わせをすることとなる。

**消えた未来　第6話**

3,606字7分钟

ディスティーランドイベントになります。  
葉山は来ず戸塚が参加、材木座と一色は大奮闘です。

2022年11月29日凌晨5点00分

当日  
「なんでまたお前がいるの？なんなのおまえ一色のスタンド？」  
またも一色の後ろに背後霊のように立っている巨体  
「ほむん、よくわかったな！それがし生徒会長殿の新手のスタンド！その名も・・・」  
とまたも口上を述べようとする材木座の口を遮り

「この人でかいじゃないですかー、人混みでも目印になりやすいですし、場所取りとかにも使えるし、荷物持ちにも使えるしでとっても役に立つんですよ？」  
「役に立つって・・・お前と一色にどんな接点があったんだ？・・・」  
いまいち納得しない比企谷だったが何やらジョジョ立ちを決めている材木座を見て考えても無駄だと思いそれ以上何も言わなかった。  
ちなみにほかの人の反応はというと  
「ざ・・・財津君だったかしら？できれば私の前に立たないでいただけるかしら？パンさんが見えなくなる可能性があるわ」  
「材木座君もきてくれて僕うれしい！」  
「中二・・・？」  
由比ヶ浜だけは何か思い当たるのか首をかしげてる状態

「さーさーみなさん行きましょう！」  
と意気揚々でディスティニーランドの中に入る一色  
ランド内でははじめの方はみなでアトラクションを楽しんだ、特に比企谷は戸塚がいるためか大喜びである。  
「なんか先輩ずっと戸塚先輩と一緒にいるんですが」  
「それはそうであろう、八幡は戸塚殿にメロメロてあるからして、戸塚殿も八幡のことを気に入っておるからゆえにだな」  
「これは不味いですね・・・全く距離が縮まらないじゃないですか、何とかしないと」

そのうち雪ノ下が若干ふらついてきた。  
「ゆきのん大丈夫？」  
「大丈夫、人混みにあてられただけだから」  
由比ヶ浜は雪ノ下に寄り添おうとするが  
「ちょっと先輩！雪乃先輩をみててください！」  
一色が比企谷の手を取りぐいぐい引き寄せる  
「なんで俺が、由比ヶ浜がいるだろ俺は戸塚と・・・」

「ダメです！いいですか？雪乃先輩と結衣先輩だけにすると絶対ナンパ目的の野郎共が寄ってきて危険です！戸塚先輩も女と間違われるから危険です！わたしなんて一番かわいいから特にそうですよね？なので先輩はナンパ避けで雪乃先輩と一緒にいてください！雪乃先輩もいいですよね？」

「何お前さりげなくかわいいアピールしてんの？」  
あきれる比企谷、雪ノ下はというと  
「わたしは別に・・・大丈夫よ・・・」  
とふらつきながらベンチに座り込む  
「どう見ても大丈夫じゃないじゃないですか！それじゃあ代わりにこっちの大きい方をおいていきましょうか？」

と一色は背後で仁王立ちをしている材木座を指差す。  
「え、それはちょっと・・・」  
と若干ひく雪ノ下  
「でしょう？では先輩お願いしますね？」  
とふらついてベンチに座り込んでいる雪ノ下に比企谷を押し付けると

「んじゃー私たちは先いってますんでー」  
「お、おい・・・」

一色は二人をおいて由比ヶ浜達のほうへと向かう

「これで先輩たちは大丈夫ですね、前と同じようになるはず、材木先輩は結衣先輩たちの方をお願いします、わたしは雪乃先輩のとこに戻るんで」

ぼそっと一色は背後霊のように後ろにくっついている材木座に話しかける  
「あいわかった」  
材木座はそう答え、一色から離れて人混みに流されたように見せ徐々に戸塚のほうへ

「ちょっと中二！前がよく見えない！」  
「そういわれてもこんなに人が多くては・・・！戸塚殿！由比ヶ浜殿！離れないようにするでおじゃる！」  
「え？そ、そういわれても・・・」

戸惑う戸塚と由比ヶ浜に  
「手をつなぐとか方法があると思うが？ウ～ム、では我と手をつなぐ？」  
と指ぬきグローブを装着した汗まみれのいかにもぬるぬるの手を由比ヶ浜に差し出すと強烈な拒否反応が  
「えー！無理無理無理！彩ちゃんお願い！」  
「う・・・うん！結衣ちゃん離れないでね！」  
ぎゅっと手をつなぐ二人を見て  
「わかってはおったがなんだろうこの胸の痛み、猛烈に痛い・・・」  
涙目になる材木座であった。  
そしてそのまま戸塚達を少しづつ一色から離していくことに成功したのである。

一方一色はというと比企谷、雪ノ下のもとへ  
「せんぱーい！なんかはぐれちゃいました！」  
「ほらやっぱり」  
「由比ヶ浜さんたちは今どこかしら？」  
と携帯をだす雪ノ下を思いっきり制して

「結衣先輩たちあっちのほうへ行きましたよ！さあ行きましょう！わたしが連絡とりますので先輩は雪乃先輩をお願いしますね？絶対はぐれないようにしてくださいね？この意味わかりますよね？」  
と例のウォータースライダーのほうへと誘導する。  
そして列の最後尾まできたのだが当然のごとく由比ヶ浜も戸塚もいない  
「いないみたいだな、まあ先に行ったんだろ多分」  
「そうみたいですね、ちょっと連絡とってみますね？」

携帯を出して材木座へと連絡する

「そっちはどうですか？」  
「二人とも手をつないでなんかものすごく楽しそうなのだが、我だけ楽しくないのだが」  
「材木先輩が楽しいかどうかはどうでもいいんです」  
「いろはす酷すぎ、それより八幡は？」  
一色が後ろを振り返ると比企谷の後ろに頼りなく列に並んでいる雪ノ下が見える  
「まあこっちは無理にあれこれいうと逆に反発しますからねーまあ大丈夫です、それより今度いろはすと言ったらぶち殺しますね？」  
「こわ！このJkこわ！」

材木座の叫びを無視して携帯を切ると  
「なんかー結衣先輩たち先に乗っちゃったらしいんですーそれでーなんか降りたところであのでかいのがもめてるらしくて、わたし行ってきますね？先輩たちは楽しんでくださいね？」  
と一色はの列から離脱して比企谷と雪ノ下二人っきりにさせた  
「おい、大丈夫なの？」  
「一色さん、いつの間にあれの保護者になったのかしら？」  
「大丈夫ですよー先輩たちは楽しんでくださーい、あとで合流しましょうね？」  
と二人の声を後ろにそらし、その場から離れることになった。

花火があがりあちこちから歓声が湧き始める。  
「材木先輩、結衣先輩たちは？」  
「ほれ、あそこ」  
人混みの向こうに由比ヶ浜と戸塚が見える  
「八幡達は？」  
「邪魔されないように適当な方へ誘導しときました。しかしなんか思い出しますねー」  
とため息交じりの一色  
「とりあえず疲れた、もうディスティニーランドはこりごりでござる」  
「それについては同感です・・・あ・・・」  
戸塚が由比ヶ浜になにか言っているのが見えた  
それを由比ヶ浜は・・・

「どうなった・・・？」  
「あの様子は・・・ガッデム！ダメだったみたいです！んもー！」  
頭を両手でがりがりとかく一色  
「やはり八幡がきっちり振った後じゃないと・・・ん・・・？」  
なぜかそのまま二人は寄り添ってパレードを見ているようだった。  
「戸塚殿は振られたのでは？」  
「後で事情聴取ですね・・・戸塚先輩の方は材木先輩お願いします」

その後全員が落ち合い帰路に就く  
一色は雪ノ下にそっと耳打ちをする  
「雪乃先輩？きれいに写真撮れました？」  
「な、何のことかしら？」  
顔を赤らめ挙動不審になる雪ノ下、どうやら転生前と同様スライダーの時の写真はちゃんと購入していたようだった。

「んじゃ俺たちここで降りるから」  
ディスティニーランドの帰り戸塚と材木座を残し全員が電車を降りる

「材木座君ってこっちのほうだっけ？」  
二人っきりの列車の中戸塚が不思議そうに聞いてくる  
「・・・戸塚殿、我は恋愛には大変疎いのであるが、親友がゆえにお伺いしたい、由比ヶ浜殿とはどうなったのであるか？」

「あれ？見てた？」  
ちょっと照れくさそうにする戸塚  
「振られたのではないのか？」  
「ちょっと材木座君！盗み聞きなんてちょっとずるいよ！・・・まあ断られたのは事実なんだけど・・・振られてはいないかな？」

とぽつりぽつりと戸塚は話し始める  
「告白したらとてもうれしいって言われたんだ、でも由比ヶ浜さんやっぱり八幡の方が好きなんだって、でも雪ノ下さんも八幡のことが好きなのはわかるってさ、あの二人には絶対にかなわない、でもあの二人両方のこと大好きだから二人を差し置いて自分だけ付き合うのは違う気がするって、自分も好きになった以上けじめはつけるって、八幡がはっきり答えを出して決着ついてから返答するってさ、だからもう少しまってっていわれてさ」

「保留ということか？」  
「まーそういうことになるかな？八幡もはっきりすればいいのに、僕も雪ノ下さんと八幡お似合いだと思うんだけどな」

「なるほど、振られたわけではないのか、でもまだ未来は確定せずだな」  
「ん？なんのこと？」

「いいやこちらの話である、それより明日からまた会議であるぞ」  
「そうだね、憂鬱だね」  
そういう戸塚は前よりも少しだけうれしそうな表情であった

**消えた未来　第７話**

4,387字9分钟

マラソン後の保健室の回はアニメ見てる人なら「八幡！雪ノ下どっちでもいいからやれ！」と誰もが思ったはず。そこでやらないのが八幡と雪乃ですけどね

2022年11月30日凌晨5点00分

その後海浜高校との会議は前回同様雪ノ下の一括で終了することとなり、クリスマスイベントは滞りなく終了する。  
一色にとっては二度目である、裏で材木座に手を回させていたのでむしろスムーズに事は運んでいた。  
だが問題は戸塚と由比ヶ浜であった。

「さりげなく八幡と雪ノ下殿を二人っきりにして色々やらせてはいたが結局中々進展しないまま終わってしまった」  
「戸塚先輩と結衣先輩はどうです？」  
「普通であるな、聞いた通り八幡達が付き合わないとこっちも進展はないであろうな」

「やっぱり先輩が結衣先輩を振ってくれないと進展しませんよねぇ・・・どうにか出来ないですかねー」

「どうにかって・・・ウーム例えば八幡がはっきり告白出来ないならなにかそういう状況を見せるとか、ラブコメアニメでも主人公とモブがただ話してるだけなのにそれ見たヒロインが勝手に落ち込むとかそういうのあるしのう・・・見てて辛い」

「うわぁ・・・転生前の年齢でもアニメ見てたんですか・・・キモッ！大体、先輩と雪乃先輩が付き合ってるように見せるなんて無理でしょう、いっつもあの二人漫才やってて結衣先輩も慣れてるじゃないですか、もっとこう抱き合ってる所とかキスしてるところとか・・・」

「そうだ！通販で薬を買って先輩と雪乃先輩に飲ませましょう！それです！部室に二人きり！目と目が合った二人はお互いのリビドーを抑えきれず！それを結衣先輩に目撃させればきっと！」

と暴走気味になる一色、スマホを取り出しなにやら怪しげなサイトを開こうとする

「マテマテマテ、正気か？先生やらに見つかったら大事になるワイ、それよりもっとこう学生らしくキスとか・・・」

「たとえいい雰囲気になってもあの二人がキスとかすると思います？先輩何気にヘタレですから絶対無理！この時代はまだネットの法整備が遅れてますからね！興奮剤も入手は容易です！」

「物騒すぎるぞおぬし・・・」  
流石の材木座も呆れ顔  
「は？合コンでいい感じのイケメンにさりげなく飲ませて既成事実つくらせるんですよ、効果はバッチリですが、もう少しってところで何故かばれるんですよね」

「肉食系女子怖い・・・ん？そう言えば？」  
と材木座、やはり生前に比企谷と飲みに行ったときの話を思い出す。

「確か・・・あれはそう！マラソン大会の時の話らしいが、八幡が保健室で氷の女王に怪我の手当してもらったとき、かなりいい雰囲気になったとか、偶然顔がものすごく近くに来たらしく、あの時キスとか絶対できた、目がずっと合っていた、あの時既に雪乃は俺にメロメロだったとかまくし立てておったわ、でもあの時多分由比ヶ浜が外で見ていたっぽい、なにかしてしまったら、由比ヶ浜は離れていったかもしれなかったしとかなんとか」

それを聞いてハッとなる一色  
「それです！そこで実際にキスしてるとこ見せつけるんですよ！そして落ち込んでるところに戸塚先輩です！」

「しかしなんとする？あの二人をその気にさせるなんて至難の業であるぞ？」  
ふむと顎に手をやり考え込む一色  
「経験上目がずっと合っていたということは何か一押しあればそのままなし崩しになること間違いありません」

「経験上って・・・」  
またも呆れ顔の材木座  
「は？合コンでイケメンをゲットする術ですよ？実際今回先輩になんど試そうとしたか」  
「おぬし？」  
といぶかし気な視線を向ける材木座  
「じょーだんですよやるわけないじゃないですか、第一それやって未来で雪乃先輩と結衣先輩が亡くなってたらどうすんですか？それよりわたしは雪乃先輩にはっぱかけときますんで、先輩の方はどうしましょうか？」

「ほんとに冗談？」  
と疑いの目で見る材木座だったがこの際信用するしかないなと思い作戦を考える  
「うーむ、八幡も大概ひねくれておるから雪ノ下殿が迫っても恐らく駄目だろうな」

「そうなんですよねー」

「確かに奴は案外ヘタレな所があるのでな、我は盟友だからわかる、だがヘタレにヘタレと言っても直らん、第三者視点で情けなさを見せつけて『こいつは駄目だ』と思ってもらわないといかん」

「どうするんです？」  
「そこでアニメよ、たしか今の時期にそんなヘタレが主役のアニメのDVDBOXが出たのがある、それを買ったから一緒に見ようと奴に見せて『うわっ俺だったらこんなことしねぇ』と思ってもらう、具体的にどうするのが正解みたいなのは見てれば普通にわかる、ただし・・・」

「ただしなんです？」  
「見ること自体拒否されたらどうにもできん」

「それなら簡単です、お米ちゃんを使えば問題ありません、先輩は妹のいうことならほぼ何でも聞きますからね、こんなこともあろうかと、クリスマスのイベントの時に既に連絡先交換済みです」

ということで作戦は決行された。  
あらかじめ一色は小町に『兄に彼女が出来ないのはヘタレが原因だからそれを再教育するアニメを見せる』旨の連絡をいれ休日材木座はDVDBOX片手に比企谷邸へ

「たのもう！」  
「相変わらずうるせぇやつだな、なんでお前と一緒にアニメ見なきゃならんのだ」  
「よいではないか八幡よ！せっかく買ったのだぞ！？盟友と見たいと思うのは当然であろう？」  
「俺は嫌なんだが、なんかタイトル聞いた小町が自分も見たいだの原作大好きだのと・・・初耳なんだが」  
「まーよいではないか！妹君も一緒に見ようぞ！」  
「小町に手を出したらぶっ殺すからな？」  
と、渋々材木座を家に上げることになる。

そして上映開始  
「なあ、なんでこの主人公いきなり女子と二人っきりになってんの？おかしくない？」  
「なあ、どうみてもこの女子、主人公に好意ありまくりだろ、なんで付き合わないの？」  
「なあ、今のシーンどう見ても幸せなキスをして終了って流れじゃね？なにこいつヘタレすぎじゃね？」

と比企谷は場面ごとに大変不満をもらす、主人公は美少女ととある部活で一緒に活動するという話だが二人とも大変にヘタレで思いをなかなか伝えられないのである

「おにいちゃんだって人のこと言えないでしょ！んじゃあ今のシーン、おにいちゃんだったらどうすんの？試しに小町とやってみてよ」  
「なんでお前と・・・まあいいか見てろよ？真の男はだな・・・」  
等といい小町と向き合い目を合わせる

「・・・・」  
「・・・・」  
「・・・好きだ・・・」  
「・・・おにいちゃん・・・私も・・・」

と二人の顔は徐々に近づき・・・

「ちょっと待たれよ！！！なんで兄妹でいい雰囲気になってんの？禁断の愛とか勘弁してほしいなり！」  
危ういところで材木座が割って入る  
「うるせぇ、おれは小町との愛に生きることに今決めた」  
「んもーおにいちゃん、そのセリフ小町的にはポイントストップ高だけど倫理的にアウトだよ」

小町は体をくねくねして大変嬉しそうだが、材木座的には大変困る状況  
「んもー八幡！妹君は駄目だな、この猫を相手にするがよい、我と妹君で採点してやるからに」  
そういうと足元でうろついていた比企谷家の猫、カマクラを突き出す  
「猫相手とかアホか？でも猫か・・・猫・・・」  
ふにゃふにゃ言ってるカマクラを抱き上げるとジッと見つめ始め、そのまま硬直してしまった

「フーム・・・どうやら思い出してるようだのう・・・グフフ、うまくいきそうだわい」  
「もしかしておにいちゃんと同じ部活にいる・・・」  
「しっ！それを言ってはいかん！」

やがて比企谷は徐々にカマクラに近づき・・・カマクラはするりと逃げてしまった

「あーあ、かーくん逃げちゃった！0点だよ、ポイント低いよ」  
「八幡よ、逃がしてしまうとは失格であるな、逃がさないようにせぬといかん、ちゃんとがっちり掴んでおかぬと、逃がしてしまってから後悔しても遅い」  
「そうだよ！逃がしちゃ駄目だよ！チャンスはちゃんと掴まないと駄目だよ？」

「カマクラ相手に一体何をしろと・・・」

「良いからとにかくしっかり掴むこと！良いな！」  
「そうだよ！中二さんのいう通り！その時はちゃんとがっちり抱きしめてあげてね？あ！今のセリフ小町的にポイント高い！」

「一体何の話をしてるんだ？」  
戸惑う比企谷に  
「それでは続きを見ようかのう！妹君！飲み物を！」  
「了解！」  
「なに？なんでお前ら仲良くなってるの？」  
と結局最後までそのヘタレ主人公が出てくるアニメを見ることとなる、見てる間ずっと比企谷は不満げな感想ばかりであった。

数日後、一色は葉山に由比ヶ浜を放課後適当な理由で遊びに誘い出してもらうようお願いをする、まあいいけどと葉山は多少疑問な顔をしていたが深くは聞かず由比ヶ浜を放課後遊びに誘ってくれ、比企谷の方は材木座が戸塚を使って遊びに誘い出したため、現在奉仕部には雪ノ下一人である。

「どうもー」  
「あらいらっしゃい一色さん、何か用かしら？」  
と何時ものように出迎える雪ノ下、一色は雪ノ下の近くに座った椅子を寄せて言った。

「雪乃先輩、わたし好きな人がいるんですよ」  
その言葉に雪ノ下はピクッと反応する

「今度その人に告白しようかなって考えてるんです」

じっと雪ノ下の目をみる一色

「雪乃先輩にはそういう人はいないんですか？」  
雪ノ下はふっと視線を下に向ける  
「仮にそういう人がいてもきっとうまくいかないわ」

「何故です？」

「だって知ってるから、その人を好きな人がわたし以外にもいるの、わたしと違って明るくて、元気があってみんなを照らしてくれる太陽みたいなそんな人、その人に比べたらわたしなんて・・・」

「いいんですか？そんな嘘でまがい物な気持ちを本当に望んでいるんですか？本物が欲しいんじゃないんですか？」

本物という言葉にピクッとなる雪ノ下  
「雪乃先輩、私本気で好きな人取りに行きますよ？その人は今は私の方を向いていないことはわかってます、けど時間かけて必ず振り向かせます。どんな手段を使ってもです」

雪ノ下は下を向いたまま何も言わない

「いいですか？チャンスは絶対に逃しちゃいけないんです！欲しいと思ったらあれこれ考えずにガッチリ捕まえとくんですよ！そうしないとなにもかも失ってしまうんです、みんな不幸になっちゃうんです・・・」

「そんなこと言われてもわからないわ・・・」  
吐き出すように雪ノ下は言う

「簡単です！相手の目をじっと見て本音を伝えてそれでも目をそらさなかったら正解なんです！相手を掴んで離さないようにして、行動で示すんです！」  
一色は立ち上がると部室の扉に手をかけ  
「選択間違えたらダメですよ、間違えたらその時は・・・」  
そういうと一色は部室を出ていった。

# 消えた未来　第８話

3,712字7分钟

由比ヶ浜が告白、そして振られます。一色が葉山相手にけじめつけたのと同様ですね。  
原作もきっちり告白して八幡が振らんといかんと思ったんですが、最もそれができる連中ではないから話が面白くなるわけで、だからこそ好きとは一言もない告白シーンもあるわけで、続編も由比ヶ浜も一色も結構なあなあで行ってる感じだそうで。

2022年12月1日凌晨5点00分

数日後奉仕部に三浦が相談に来る。  
やはり生前と同じように葉山の進路を知りたがる。  
そして同じようにマラソン大会が行われ、結果も全く同じく比企谷はビリ、葉山が優勝した。

違うのはそこに一色がいなかったということぐらいである。  
どこにいたかというと・・・・

「今先輩が保健室に入りました」  
「こちらアルファ、ターゲット1,2を確認ナリ」

保健室の扉を廊下の角から監視する一色が、外では双眼鏡片手に木陰から材木座がトランシーバー片手に窓から保健室内を見張っていた。

現在保健室に雪ノ下がいるところに比企谷が入ってきたところである。  
「こちらアルファターゲット1,2が現場にて接触」  
「了解です、あ、今結衣先輩がきました。扉の隙間から覗いてますね」

雪ノ下が比企谷の手当をしてるその時、由比ヶ浜が保健室の扉の前に到着しそっと中の様子を伺っている。

「あのーそろそろそのアルファとかターゲットとか面倒なのでやめませんか？」  
「何を言うか！こういうのがかっこいいのであろう！」  
「はー、付き合う方の身にもなってくださいよ・・・それより中の様子は？」

「ほむん、情報通りターゲット1,2がお互いを見つめ合ったまま硬直」  
「結衣先輩も完全に動きを止めました」

保健室の中では雪ノ下と比企谷がお互いを見つめ合っている。  
じっと見つめ合う二人、どちらともなく両手を前に出しその手が触れ合うとそのまま手を絡み合わせる  
「・・・ひ・・・比企谷くん・・・」  
「・・・ゆきの・・・した・・・」

「ターゲット1,2両手を絡み合わせておる・・・」  
「教育の成果は出ているみたいですね」

前の時間軸とは違い、材木座と一色の教育の成果により、相手を掴んで離してはいけないという考えに支配され二人とも両手を相手にさし出そうとしてぶつかってしまったのだ、そしてそのまま両手を絡み合わせ徐々に引き寄せる、結果としてお互いの顔が徐々に近づいていき・・・

夕日の差し込む保健室に映る二人の影は完全に重なる

それをずっと保健室の扉の隙間から見ていた由比ヶ浜は一歩後ろに下がると  
「・・・・！！」  
下を向きそのままゆっくりその場から立ち去っていった

「結衣先輩が離れていきますどうします？」  
「了解、ターゲット3を尾行せよ、ターゲット4を召喚する」  
一色は由比ヶ浜の後をこっそり付けていく、丁度自動販売機のところで座り込んでいるようだった。  
「結衣先輩は自動販売機の近くで座り込みました。周りには誰もいません」

連絡を受けた材木座はすぐさま戸塚に連絡  
「あーもしもし？我よ我だよ、スマヌがジュースを買ってきてくれぬか？金は後で払うがゆえに、奉仕部の部室には今誰もいない故教室に持ってきてお願いナリよ」  
電話に出た戸塚は  
「え？・・・うんいいけど？」  
「ゆっくりでいいのでな、ゆっくりで」  
材木座はそういうと再度双眼鏡で保健室内を観察  
「・・・あれ？だいぶキスが激しくなっているようなのだが・・・これ以上はちょっとヤバくなりそうだから止めて！今すぐ！」  
「んもー世話が焼けますね・・・」  
と一色はわざと保健室の戸を大きくノックすると

「しつれーしまーす、あれ？先輩たちここで何やってんですかー？表彰式終わっちゃいましたよ？」  
と白々しく入り、これ以上雪ノ下と比企谷の好意がエスカレートする前に阻止することに成功したのだった。

由比ヶ浜の方はというと、材木座の連絡でジュースを買いに来た戸塚は当然のように由比ヶ浜を発見する。

「あれ？結衣ちゃん？そんなとこでどうしたの・・・！！どうしたの結衣ちゃん！泣いてるじゃない！」  
「彩ちゃん・・・ゴメン何でもないの・・・」  
「とにかく場所を変えよう！」  
と戸塚は携帯を取り出し  
「ゴメン材木座君、ジュースはまた今度でいいかな？手が離せなくなっちゃって」  
そういうと戸塚は  
「結衣ちゃん、行こう、部室は今誰もいないって材木座君言ってたから・・・」  
と奉仕部の部室へ連れて行った。

その様子を廊下の角から隠れて見ていた一色は  
「ふーこれで状況終了ですね？」  
そう材木座へと伝える。

「これでけじめ付けてくれるといいのだが・・・明日以降か」  
不安げになる材木座であった。

次の日の奉仕部

「由比ヶ浜さんは？」  
「まだ来てねぇな、なんか戸塚とどっかに行った」

「とうとう嫌われたのかしら？」  
「いや・・・そもそも何にもしてないのだが・・・昨日は普通だった・・・」  
昨日という単語を発した比企谷は昨日の保健室のことを思い出しびくっとなる。  
雪ノ下も体を硬直させ比企谷を見つめる

そうして二人が固まっていると  
「頼もう八幡よ！」  
「こんにちわー雪乃さんお茶しに来ましたー」  
と材木座と一色が入ってくる

「毎度思うがお前らどういうつながり？」  
「まーいーじゃないですか！それより結衣さんは？」  
「まだきてねぇよ、戸塚とどっかに行った」  
とワイワイ話し合っているとガラッと部室の扉があく

「ヒッキー、話があるんだけど、ちょっとこっち来て」  
由比ヶ浜がツカツカとテーブルの雪ノ下側に近づくと真剣な目で語りかける、戸塚も真剣な目で後をついてきた。

「お、おう・・・」  
比企谷はそのまま雪ノ下方へもそもそと移動

ちなみに一色と材木座はすすーっと部室の隅に移動し成り行きを見守る

「ヒッキー、あたしヒッキーのことが好き、付き合ってください」

「「え！？」」  
突然の告白に驚く雪ノ下と比企谷

「ゆ・・由比ヶ浜さん？」  
雪ノ下はこわごわと由比ヶ浜の方を見る  
「な、何言ってんだよ・・・」  
目が泳ぐ比企谷  
「ヒッキー、あたしは真剣だよ」  
まっすぐに比企谷の方を見る由比ヶ浜

「とうとう始まったようであるな」  
「そうですね、ここまできてうやむやにするつもりだったらわたし先輩の事ひっぱたきます」  
「・・・我も同意見だな・・・」  
部室の隅でボソボソと会話をする一色と材木座

「お、おまえなんか変だぞ・・・？ちょっと落ち着こう・・・」  
うろたえる比企谷に  
「比企谷くん？・・・」  
雪ノ下が比企谷を睨みつける

「・・・」  
しばらく黙って目が泳いでいた比企谷だったが  
「・・・スマン・・・お前とは付き合えない・・・」  
搾りだすような声を出す

「なんで？理由をはっきり教えてよヒッキー」  
「俺は・・・雪ノ下の事が・・・好きだ・・・告白も・・・した・・・だから・・・おまえとは・・・スマン・・・」

目を見開く由比ヶ浜、今度は雪ノ下に聞く  
「ゆきのん本当？」  
「・・・ごめんなさい・・・由比ヶ浜さん・・・本当に・・・ごめんなさい・・・」  
雪ノ下も下を向いて目を合わせない

「よかった！！！」

声を張り上げる由比ヶ浜  
それをえ？という顔で二人は見上げる

「なんで二人とも謝るの？二人ともお互いの気持ち伝え合ったんだよね？良かった！二人とも素直になってくれて！本当にあたし嬉しい！」

そして二人に飛び掛かり両腕二人を抱きしめる  
「ゆきのんもヒッキーも大好きだし！・・・でも・・・今日はもう・・・帰るね・・・」  
由比ヶ浜の声は徐々に小さくなる  
「お、おい、大丈夫か？」

「だ、大丈夫・・・帰るね・・・ヒッキー、ありがとう」  
由比ヶ浜は二人から離れるとふらふらと部室から出ていく  
「結衣ちゃんけじめ付けるって息巻いてたんだ、八幡、男らしかったよ」  
ずっと後ろで無言で見守っていた戸塚はそういうと由比ヶ浜のあとをついていき部室から出て行った。

「はー分かっていましたが・・・やっぱそうですよね」  
溜息をつきがっくり来る一色  
「は？どうされた？」

「いいんですよ、わたしも失恋したってことです、それより結衣さん明日きますかねー？」  
「は？どういうこと？・・・それより八幡達は？」

見ると雪ノ下と比企谷二人とも無言である。

「まーあとは若い二人に任せて帰るとしますか」  
「そうであるな、余計なことは言わない方がよかろうて」

そういうと材木座と一色はこっそりと部室から出て行った。

次の日様子を見に行く材木座と一色、部室の扉を開けると  
「あ、いろはちゃんと中二やっはろー！」  
「やっはろーです結衣先輩」  
「なに？なんでお前後ろに材木座従えてんの？熊の調教師？」  
といつもの比企谷、どうやらわだかまりは完全に払しょくされたようだ・  
戸塚もアハハと笑っている

「とりあえず一安心ということかのう？」  
「まーこれから戸塚先輩のターンですけど大丈夫でしょう」  
と楽し気に話す4人を見て安堵する二人だった

数日後、戸塚と由比ヶ浜が付き合い始めたという噂が流れてる、戸塚は女子からの人気が高く、男子からもある意味コアな人気があり、一部からは嫉妬の声もあったが、由比ヶ浜はトップカーストの一員であるし、交友関係も広く、悪い噂は二人とも無かったということもあり、お似合いのカップルということで文句を付ける人は誰もいなかった。

# 消えた未来　第９話

2,179字4分钟

今の知識を持ったまま過去に戻れたらなんて誰もが考えることですよね。  
例えばビットコインは出た当初1ビット1円で秋葉原でただで配ってたりしました。  
あの時10000円分でも買っておけば今頃はなんてよく考えます。  
他にもいろいろ考えてしまいます、皆さんはどうですか？

2022年12月2日凌晨5点00分

ある日の放課後、材木座は一色を校舎裏に呼び出す。  
「何故こんな人気のないところに・・・は！まさか！とうとうこのかわいいいろはちゃんを力ずくでものにしようと・・・止めてください大声だしますよ？告白とかも本当に無理なんで、材木先輩は存在がもう無理なんでごめんなさい！」

と全身で拒否のオーラを放つ一色に  
「なんで貴殿はそういちいち辛辣なの？・・・それより我らの目的忘れてない？」  
怖々と話しかける材木座  
「は？忘れてませんよ？だって上手くいきましたよね？このままいけば大丈夫じゃないんですか？わたし花の女子高生を満喫したいのでこれで失礼しますね？」  
とさっさと切り上げて帰ろうとする一色に  
「いや待たれよ、やつの言葉忘れたのか？未来が確定したら戻すと、なら何故我らはまだこの時代にいるのだ？」

「多分、そのうち戻るんじゃないですか？」  
とまたも立ち去ろうとする一色の腕をつかむと  
「待たれよといっておるであろう！やつは修正不能になっても戻すといっておったろ！まだ未来が決まってないのではないか？また八幡たちが破滅して我らが死ぬ同じ未来に繋がっているのではないのか？」

「痛いですよ！」  
「あ、ごめんなさい」  
手を離す材木座

「まったく、誰かに見られてたらどうするんですか？明日から学校にこれなくなりますよ、材木先輩が」

「こわっ！」

「まーほっとけばそのうち未来に戻れるかもと思ったのは事実ですけどね・・・」

「我もそう思ったのだが、タイムリープ物のアニメみてて気がついた、アニメだと何度もやり直してるけど我らにはそのチャンスはない、ちょっと不味いのではないか？」

「そう言われるとそうかもしれません、先輩は付き合うのすっ飛ばしてキスから始めさせちゃいましたしねー男女の交際とか二人ともわからないのかも」

「我が言うのも何だがあの二人効率重視だから暇だから遊びに誘うとか絶対にせぬぞ？」

「あーそうですねーそういうので苦労した覚えが・・・戸塚先輩もなんか遠慮してる感じがするんですよね、このままなんにもない状態で卒業してしまうと自然消滅なんてあるかもです・・・不味いですね」

「そうであろう？八幡達をもっと自然に振る舞わせ親密になるようにどうにか出来ぬものか」

「それにはなるべく先輩たちの距離を近づける感じですね、具体的に言うと一緒に遊んだりとか、葉山先輩たちがやってるような感じですかね？」

「ぐっ！リア充の行いを我や八幡にしろと？」  
「リア充って・・・」  
一色は額に手をやりため息をつく  
「とにかく一緒に何かしてるのが当たり前の雰囲気に持っていけばぎこちなさもなくなると思うんですよね、あと材木先輩は関係ないですからね？」

と具体的なプランについて話し合うことに  
「まずですね、距離を詰めるにはやっぱりデートだと思うんですよ」  
「ほうほう」  
「学校の帰りに一緒にお茶したり？ゲーセンにいったりとか？」  
「なるほど」  
「んでそこで問題になるのは・・・」  
と一色は親指と人差し指で丸を作る  
「お金です」

「あー八幡たちはそんなに持ってないであろう？雪ノ下殿であれば家がお金持ちであるからに・・・」

と材木座が言うと  
「アホですか！なんで女の子にお金ださせるんですか！」  
「いやだってみんなお金なんて持っておらぬだろ、高校生だしバイトもやっておらぬぞ？」  
と言う材木座に  
「は？材木先輩がいるじゃないですか？」  
と一色は材木座を指差す

「知ってますよ？材木先輩、競馬で有名な大穴があるとか言って年齢隠して馬券につぎ込んだの・・・何でしたっけ？死ぬ前にウマ娘？とか流行ってましたよね？私の会社にもそれにはまって過去の競馬の大勝負がどうとか言ってる人いましたよ？」

「うっぐっ！し、しかしそれはもう親にバレて全部取り上げられてな？手元には・・・」  
「それも嘘ですよね？ビットコインとか？株とか？親名義で色々やってるのを教室で自慢げに話していたの知ってますよ、みんな意味わかってなかったのが幸いでしたね？わかってたらむしりとられてましたよ？」

「だって我は死ぬ前はひどい扱いだったのだぞ！友達も八幡しかいないし、自慢したいじゃん！」

「材木先輩の情けない過去はどうでもいいとして、口止め料として先輩たちのデート代払ってください、ネットの懸賞でカラオケやらカフェのただ券が当たったと言うことにして出掛ける口実も同時に作っちゃうんですよ」

「ぐぬぅ、理解はしたがしかしこんなところで搾取されるとは・・・」  
「先輩たちは金遣いは全然荒くないですし今の材木先輩からするとデート代なんてはした金じゃないですか、んじゃ六人分お願いしますね？」  
「は？何故？八幡たちなら四人では？」  
「おかしなことにならないように監視しないといけないじゃないですか！材木先輩はいざというときの財布です」  
「結局むしりとられてるではないか・・・これからの相場だって同じになるとは限らんのに」

がっくり来る材木座だったが、その日以降学校帰りや休みの日など六人で遊びに行くことが多くなった。  
一番の問題は八幡であったが既に小町を抱きこんでいた為何だかんだと理由をつけて連れ出すことに成功していたのだった。

# 消えた未来　第１０話

1,640字3分钟

戸塚はやればできる子、体育会系なのでこのぐらいは余裕のはず

2022年12月3日凌晨5点00分

「デートの手伝いしまくってるけど一向に未来に送られないのだが、どういうこであろうか？」  
ある日の放課後、奉仕部部室にて材木座がぼそっと愚痴る

比企谷達とは言うと4人で楽しそうにおしゃべりしているようだった。  
材木座は微妙に4人から離れて座っており、一色も会話に混ざれるギリギリのポジションに座っている  
「そうですねー確かそろそろバレンタインです、一通りイベントこなさないといけないのかもですねー」

「あーバレンタインであるか・・・確か川崎殿の妹が来ておったなかわいらしかった・・・」  
「は？ロリコンも大概にしてください、あんな小さい子に欲情とか犯罪通し越して死刑ですよ、マジ気持ち悪いんでごめんなさい」

「だれもそんなこと言っておらぬだろ・・・イベントってアレもか、プロムってのもか？ダルイのだが」  
「なんか早送りするとか言ってたんでどの道やるんですよ」  
「まー会社で働くよりは楽だけどダルイでござるなー」

等と話していると、奉仕部に三浦がやってくる

「手作りチョコ・・・作ってみたいんだけど・・・」  
「優美子手作り重いって言って無かったっけ？」  
「え？いや・・・そうなんだけど・・・」

と言い合ってるところにやはり同じように川崎も登場、しかしやはり三浦と川崎は相性が悪く  
「は？あたしが先に話してたんだけど？」  
「あ？あんたお茶飲んでるだけじゃん！」  
「ってかあんたも誰かにチョコあげんの？ウケるー」  
「あのさぁ！あんたなんかと一緒にしてほしくないんだけど！」  
「は？」  
「あ？」  
と三浦と川崎がにらみ合いながら立ち上がるがその行いを強い声がさえぎる

「二人とも！喧嘩するなら出て行ってもらえるかな！」  
声を発したのは戸塚であった

「ちょっと戸塚・・・あんたそんなキャラだっけ？」  
驚く三浦に  
「二人とも、チョコの作りかた教えてほしいんじゃないの？喧嘩するんだったら手伝わないよ？」  
強い口調で追い打ちをかける戸塚  
「そうだね、今のは挑発した優美子が悪いよ」  
由比ヶ浜も毅然とした口調で三浦をたしなめる  
「う、結衣まで・・・」  
一気にしぼむ三浦と川崎

「ごめん・・・」  
「あたしも・・・ゴメン」  
「二人とも喧嘩は駄目だよ？んじゃあ話を聞こうか、いいよね結衣ちゃん？」  
「うん、優美子も川崎さんも仲良くやった方が楽しいよ！」

と改めて相談が開始される。

「戸塚先輩ってあんなこと言う人でしたっけ？」  
机の端の少し離れた所から見ている一色と材木座、材木座は戸塚の顔をジッと見ると  
「・・・もしやこれは神ってるという奴では？！」  
「神？なんですかそれ？」

「見ろあの信頼しきってる表情の二人、あれは互いに試練を乗り越えた百戦錬磨の戦士の顔、つまり二人は大人の階段を登ったというという証！つまりアレだ、セがつくアレでナニ」  
「セ？・・・ってマジですか！」  
と一色は戸塚と由比ヶ浜の方を見てあることに気が付く

「・・・普通に長机の下で手握りあってますね、めっちゃぎっちり繋いでますよ、それだけでまぁ分かりますね」  
「我らより先に大人になるとは、面目丸つぶれであるな」

そしてバレンタインのイベントが開始されることとなる。  
前回と違うのは雪ノ下がきちんと比企谷にチョコを渡したこと、陽乃からは何もなかったこと、そして  
「はい！これがみんなに対するあたしの気持ちだよ！」  
と由比ヶ浜が巨大なチョコの塊を作ったことである。

「なにこれマンホールの蓋？」  
「どうやって作ったのかしら・・・」  
「結衣ちゃんちょっと大きすぎるかな？・・・食べられるかなぁ・・・」  
「大丈夫！余ったら中二が食べてくれるって！」  
ニコニコ顔の由比ヶ浜である。  
どうやって食べようかと思案している比企谷の後ろで

「マジか血糖値とか大丈夫であろうな？」  
「材木先輩、今の年齢って何食べても大丈夫ですしなかなか太らないからサイコーですよ？」  
と話し合う材木座と一色であった。

# 消えた未来　第１１話

3,023字6分钟

水族園イベント、ここ水族館ではなく園なんですね。葛西臨海水族園という名前でした。  
材木座と一色の作戦は成功し、謎の存在に再度出会い未来へと早送りされますが・・・

2022年12月4日凌晨5点00分

本日は総武高校受験日の為休日、遅くまで起きていた材木座は惰眠をむさぼっていると携帯に着信がある  
「はい・・・○○商事の材木座です・・・本日はお休みを頂いて・・・」  
等と寝ぼけながら電話に出ると  
「材木先輩大変です！急いで駅に向かってください！」  
一色から緊急連絡だ

「んぁ？我さっきまで某掲示板でレスバトルをしていて大変眠いのでおじゃる・・・厨房共後で見ておれよ・・・モビルスーツの性能の差が・・・」  
「は？何やってるんですか？バカですか？ちょっとおきてくださーい！」  
「ホント騒々しいのう・・・一体何事か・・・」

ベッドからむくりと起き上がる材木座、時計を確認する  
「まだ午前中ではないか・・・」  
と二度寝しようとすると  
「忘れてたんですよ！先輩たちが今日！お互いに依頼を出し合うって！雪乃先輩と結衣先輩から死ぬ前に聞いてたんです！雪乃先輩が家の事で決意を固める日なんですよ！超大事な日なんです！早く来てください！」  
またも一色からかなり焦った声

「ななななんと！それを早く言わぬか！」  
がばっと飛び起きる材木座  
「寝ていたいが、悲しいけどこれ戦争なのよね」  
と某ガンダムの名言をつぶやき着替えることに、無論ロングコートは忘れない。  
バシッと着替えると

「義輝いっきまーす！」  
雪の降る道をダッシュで走る材木座であった。  
でもすぐ疲れて歩きに戻る、それが材木座クオリティ

駅にて  
「なんでお前がまたいんの？」  
待ち合わせ場所には比企谷、雪ノ下、由比ヶ浜、戸塚が集まっている。  
そこに若干遅れてきた一色と勿論その背後には  
「俺、参上！」  
と某ライダーのセリフと決めポーズを取っている材木座がいる  
「すみませーん、走っていたらーなんかこれついてきちゃって？みたいな？」

相変わらずのニコニコ顔の一色だったが

「みたいな？じゃねぇよストーカーだぞ一色気をつけろ」  
「呼んだのは一色さんだけのはずだったのだけれど・・・」  
疑惑の目を向ける二人に  
「ま、まーまー八幡？材木座君も一緒でいいじゃない、多い方が楽しいって！」  
と戸塚がフォローに入る為渋々顔の比企谷である。

そのまま皆で移動するのだが、列の後ろでの会話  
「ほんとに我来てよかったの？」  
「おかしなことになりそうだったらフォローしないといけないじゃないですか！私一人に押し付ける気ですか？」  
「行先は・・・臨海水族園？でも行く前からアレであるのだが、我ら行く必要あった？何も問題なくね？」  
材木座が指さす先は

「ねぇ？彩ちゃんはどんな魚が好き？」  
「僕はサメが好きかな？強そうだもん！」  
「俺はサーモンが好きだ」  
「比企谷くんそれはお寿司じゃなくて？」

等と会話してる四人がいる  
「・・・そうですね・・・まあ皆さんの仲良しの様子が知れたってことで良かったじゃないですかー」  
「・・・我帰っていい？」  
「駄目です、今帰ったら怪しさMAXじゃないですか！それに入園料がいりますね？材木先輩？先輩しか頼れないんですぅー」  
と上目使いの一色、これが学生の時の材木座ならそれこそわが世の春が来たと財布ごと渡す勢いになるのだが、残念ながら中身はオッサンである。

「やれやれ、いい性格しておるなお主は・・・ほれ小遣いだ、受け取るがよい」  
とやや冷静に呆れ顔の材木座であった。

水族園内ではやはり大はしゃぎの4人、ペンギンのいるところでは解説をじっくり見つめている  
「奴ら何で固まってるんだ？」  
「説明書き見てますね・・・フンボルトペンギンはパートナーが死ぬまで二人で付き添うとか書いてますね・・・」

「あー成程、それで奴らの行動が理解できたワイ、見よあれ、なんかもういたたまれなくなってきた」  
一色が顔を上げると雪ノ下が比企谷に体を預けて幸せそうにしているわ由比ヶ浜も戸塚と両手を握り合っているわでラブラブオーラが半端ない

「わたしも帰りたくなってきました・・・」

外に出ると由比ヶ浜が  
「観覧車乗ろうよ！」  
と皆を引っ張っていく、それにのろのろとついていく材木座と一色  
「なあ、これ以上奴らと一緒にいるのはもはや拷問では？もう若者の恋愛成分が三十路の精神をえぐっていくのだが・・・」  
そう材木座が言うと  
「そうですね・・・もうアレが別れるとか悪い方向に行くとかもうありえませんよね・・・」

そういうと一色は携帯を耳に当てると  
「あーもしもし？え！！マジ！？あーんもーそれチョー欲しかったやつー」  
と大声で話始めた後  
「すみませーん！ちょっとー欲しいと思ってた服今タイムセールやってるって友達が教えてくれたんで買いに行きますねー？あとは皆さんでよろしくやってくださーい」  
と離脱してしまった。  
「ちょっと！」  
と小声で叫ぶ材木座、どうしたらいいかわからなかったので真似をするのことに

「えー我々、なにぃ！メンツが足らんとな！？なら我に任せよ！」  
と電話をしたふり  
「我もゲーセン仲間に呼ばれた、我は戦いの地に赴か分ければならぬ！止めるな八幡よ！我はこれより修羅となり・・・」  
と熱の入った説明をしようとしたが  
「じゃあな材木座」  
「材木座君またね？」  
と比企谷と戸塚からあっさり別れを告げられる

「なんかこう・・・心がいたい！」  
若干涙目になり逃げるようにその場を後にする材木座であった。  
駅に向かう途中着信がある  
「材木先輩？なんか奢ってください、疲れました」  
と一色、比企谷から離れた後、結局合流して二人で歩いていた。

「正直我も精神的に疲れた、なんかあったかくしてほしい、我を芯から温めてほしい」  
「言い方がキモいですが、ここの喫茶店にしますか」  
と二人で喫茶店に入ることになる。

丁度その頃比企谷達は観覧車を降りてお互いの依頼を伝え合っていた。

「あたしのお願いは・・・全部ほしい！さいちゃんも、ヒッキーも、ゆきのんも！」  
皆で頷き合う  
「絶対大丈夫！この四人ならどんなことでも！ずっと一緒にいようね！」  
そして雪ノ下は最後の依頼ををする  
「有り難う、私のお願いは・・・」

喫茶店内はそこそこ人が入っている状態。  
「くたびれましたねー」  
「そうであるな」  
二人ともぐでーっとテーブルに突っ伏すとお互いに愚痴り合う。  
しばらくそうしてると頭に声が響いてきた

『絶対大丈夫！この四人ならどんなことでも！ずっと一緒にいようね！』

「なんか言ったかお主？」  
「いえ・・・なんか結衣さんの声が聞こえたような？」  
二人は顔を見合わせる、と同時に

「ゴトン」

何か大きなスイッチが切り替わったような音、同時に喫茶店内に人の気配がなくなりさっきまでカウンターの中にいたはずのマスターが無表情ですぐそばに立っていた  
「ま、まさか！貴様は！」  
驚く材木座  
「おめでとう、お前らが望んだ方向に未来が変わった、では代償をいただく・・・」  
すっと体から何かが抜けていく感じがする  
「・・・そう言えば代償が何か聞いてなかったが？」  
するとマスターは人を馬鹿にしたような表情をする  
「今更聞いてどうする？それにいずれわかることだ、では未来へと戻るぞ、時間を早送りする、丁度お前らに出会ったあの時間までな、安心しろ死ぬ未来は消えた」

声が終わったとたん、足元が崩れて奈落へと落ちていく感触がし、そのまま二人は気を失った。

# 消えた未来　第１2話

3,603字7分钟

過去の改変に成功した材木座と一色、謎の存在に元の年齢まで早送りしてもらうはずがトラブルが起きてしまった。  
次はR18です。

2022年12月5日凌晨5点00分

材木座は目を覚ます。  
「見知らぬ天井だ」  
お約束の台詞を吐くと自分が病院にいることに気がつく  
「戻ったのか、八幡たちはどうなったんだ？」  
と、傍らに身をやると看護師が直立不動でたっている、周りの雰囲気もおかしい。  
「もしかして！」  
「ああ、そうだ俺だよ、お前らを過去に送った奴だ」  
やはり表情を全く変えず口だけ動いている

「困ったことに整合性が取れなくなってしまった、お前らの望んだ未来に進行中だが問題が起きた」

「代償のことか」

「違う、それはもうもらってる、それとは別に願いが叶ってるかお前ら自身で確認する必要があるからバラバラにならんようにちょっとだけ繋がりを強くしたのだ、そしたら未来への整合が全く取れなくなって数年しか進められなかった」

「なんと余計なことを・・・」  
「それはそうだろ自分で見ないことには願いがかなってるかどうかわからんからな、バラバラになって結末がわかりませんでしたじゃ願いをかなえたことにならん、しかし計算外だ、現在までの時間の間お前とあの女の人生は大幅に変わってしまった。まさかこんなに変わるとは」

「あの女？一色殿のこと？一体何が？」

「すまん、お詫びに生活には困らんようにしてやったからそれでチャラにしてくれ、おまえ確か投資とかやってたよな？」

「いやまぁ確かに、いろいろやってはいたが・・・それよりもなにが起きたのか教えてもらえぬか？」

「うまく稼げるようにしてやったから安心してくれ、ではあのときから今までの記憶の整合をとる。強制的に記憶を上書きする、ただすぐには変わらん、徐々に思い出す感じで変わるから混乱は少ないはずだ」

すうっと頭に何かが入ってくる感触がする  
「本当になにが起きたのだ？いや、それよりも高圧的な物言いといい記憶とか時間とか本当にお主は何者なのだ？」

「説明は難しいがお前ら人から神とか悪魔とか言われてるもんだ、感謝したけりゃ寺とか神社とかにお参りでもしとけ、なにが起きたかはすぐわかる、一般的な男性にとっては損はしてないはず・・・だ、あとはがんばれ」

そう言うと直立不動の姿勢をたもったまま看護師は滑るように病室を出ていった。

直後喧騒と周囲の人の気配が戻り、比企谷と戸塚が自分の両親と病室に入ってきた。  
「お見舞いに来てくださるなんて本当に有難うございます」  
「いえ、義輝君は親友ですんで、あとこの病院にもう一人友人がいるんでついでです」

事故のせいで記憶が混濁しているということにしていろいろ話を聞くと、どうやら自分は以前と同じように道路に飛び出した一色を助けようとしてはやり車にひかれたらしい、ただ今回は状況が異なり車のブレーキが間に合ってそれほどなかった模様、一色も検査入院程度のようだ。

比企谷達と話をしていると病室の入口に一色が現れた  
「ちょっと材木先輩借りていきますよ！」

「おい一色、おまえ大丈夫なのか？そっちには雪乃と結衣がいったはず・・・」  
と比企谷がいうのを無視して一色は材木座を引っ張るように病室を出て同じ階にある患者専用の談話室に引っ張りこむ

「あのですね？あのへんなのが来てごちゃごちゃ言った後記憶を上書きするーとか言って目が覚めたんですよ」  
「我の方にも来たな」

「それで目を覚ましたらわたしのところに雪乃さんと結衣さんが来たんですよ」  
「そ、そのようだな、さっき八幡が・・・」  
という材木座の言葉を遮り  
「それでですね？雪乃さんがお見舞いに花を持ってきてくれて、「お花を変えるわ」と花瓶を持って出て行ったんで結衣さんと二人っきりになったんですよ」

「は、はぁ」  
「二人っきりになった時結衣さんになんて言われたと思います？」  
「は？」  
「『いろはちゃん中二と付き合ってるんだよね？』だって！」  
「へ？」  
「『事情はわからないけど内緒で付き合ってるんでしょ？大丈夫誰にも言わないから、あたし応援するよ？高校の時からよく一緒にいるから分かってたし！困ったことあったら相談してね？』そういわれたとき今までの記憶がグワァーっとよみがえって来たんですよ！！！」  
一色は頭を抱えて壁にどんどんと頭突きを始めた。

「なんですかこの記憶、本当なんですか？ちょっと材木先輩も思い出してくださいよ！」  
「と言われてもなぁ・・・記憶は徐々に思い出すような感じでとアレも言ってたし」

「んじゃ思い出させてあげましょうか！春休み！旅行！旅館！のぞき見！」  
それを聞いた途端材木座の頭に当時の記憶がフラッシュバックし始めた。  
「え？うわっこれマジ？マジ話？？？」  
材木座も頭を抱える、当時彼らは一体何をやらかしたのか

「プロムも無事終わったしもう受験だからその前に旅行にいかない？一泊二日ぐらいで」  
春休み直前奉仕部部室、戸塚がそう提案する  
プロムは結局執り行われた模様

「あ、それいいかも！ゆきのんとヒッキーはどうかな？」  
と由比ヶ浜  
「旅行は卒業旅行でいいだろ」  
とめんどくさがる比企谷だったが  
「あら？私は行きたいわ？比企谷くんとぜひ行ってみたいのだけど？」  
という雪乃の言葉に  
「よし行こう、場所はどこにする？」  
と俄然やる気を出す

「一色さんと材木座君はどうする？」  
一色は雪乃と結衣とおしゃべりのため、材木座は単にハブられたくなかったのでそこにいたのだ。  
結局6人で行くことになる、遠出をして観光、夕方には温泉宿に泊まる一泊二日の旅行だ。

観光中は比企谷達は大盛り上がり、逆に一色と材木座はそれを見ながら  
「他人のいちゃつきをみないといけないとは、新手の拷問か？」  
「文句言わないでくださいよ、これでいいはずなんですから」  
と二人ともテンション駄々下がりであった。

夕方、宿にチェックインしたのだがここで問題が発覚、食事の準備が抜けてたとのこと  
「申し訳ありません、これからすぐ準備させます」  
平謝りする女将  
そして温泉に入った後、遅めの夕食となったのだがまたもや問題が発覚、旅館側が慌てていたためかアルコール入りの飲み物を持ってきてしまったのだ。  
比企谷達は飲みなれてないため全く気が付かず

「おいしー！これ飲んだことない味だ！」  
「そうね、変わった味だけど・・・」

材木座と一色が気が付いた時にはすでに飲み干した後だったのだ。

「やばいですよこれアルコール入りのカクテルですよみんな飲んじゃいましたよ」  
「ええい！ソフトドリンクやノンアルをバンバン飲ませてごまかすしかあるまい！・・・八幡！これ飲み放題だそうだからさっさと飲まないと損だぞ？」

「え？マジで？戸塚も早く飲めよ、お替りしようぜ」  
「うん！」  
と比企谷と戸塚は一気飲みである。

「よいか？こっちのメニュー表の飲み物だけを頼むのだぞ？こっちはダメだ」  
と材木座はメニュー表を渡す。  
しかし不味いことにこの旅館、飲み物はオリジナルの物が多くぱっと見どれがアルコール入りか分からないようになっていたのだ。  
そのせいで結局材木座が指示したソフトドリンクだと思っていたのもアルコール入りが混在してたのである。

本来、アルコール入りのメニューは未成年には渡さないはずだが、運が悪いことにどこかの大学のサークルも泊まりに来ており、焦っていた旅館側はごっちゃになってしまっていたようだ。

当然皆ほろ酔い気分となってしまった。  
比企谷達のボディタッチがやたらと多い  
「なんか眠くなってきたな」  
「そうね、私もちょっとつかれたみたい、速めに休もうかしら？」  
「えー夜はこれからだよ・・・あそぼうよ・・・」  
「結衣ちゃんふらふらじゃん、僕もちょっと疲れたかも・・・」

部屋は男女別に隣通し二部屋とっていたが襖で仕切っているだけである、せっかくなので修学旅行みたいに雑魚寝しようと同じ部屋に布団を全員分敷いてたのだ。  
ふすまを開け隣の部屋の布団の上にバタバタと倒れる四人。

しかし体は高校生だが中身は三十路の材木座と一色、当然多少のアルコールで満足出来るはずもなく比企谷達にはもう一回風呂に入ってくるといって部屋を出る

「大っぴらに飲めんのは辛い、我はもうちょっと飲もうかのう、ここ上の階にバーがあるようなのだ、大学生でーすとか言えば大丈夫であろう、我老け顔だし？」

「・・・まあその辺はご勝手に、わたしは温泉に入ったあと一人で飲みますんで」  
と別行動、これが不味かった。

戻ってきた材木座は布団を敷いた隣の部屋への襖がしまっているのに気が付く  
「ふむ、なんか真っ暗になっているのう、寝てるとこに入って誰か踏んだらまずいよな」  
と食事をした部屋で押し入れから毛布を引っ張り出すとそのまま比企谷達の様子をよく確認もせず寝てしまったのである。

# 消えた未来　第１3話

2,565字5分钟

今回のみR18展開です。  
みんなで旅行、そこで意図せず起きるR18展開。  
一色に挑発されて反応しない男はいませんよね。

2022年12月6日凌晨5点00分

しばらく横になっていると襖で仕切られたとなりから何かが聞こえる、真っ暗な中目を覚まし起き上がると枕元に一色がうつぶせになっていて襖の隙間から隣を覗いていた、濡れた髪とどこで飲んできたのかお酒で若干紅潮してる姿が妙になまめかしい

「何やってんの？」  
と聞く材木座に  
「静かにしてください！」  
と襖の向こうを覗き見ながら小声で注意する一色  
材木座はいったい何をみているのかと思い  
「失礼するでござる」  
と一色の上にまたがると頭の上から向こうを覗くことにした。  
一色はというと隣をのぞくのに必死なのか何も言ってこない。

そこには由比ヶ浜と戸塚が裸で絡んでいるのが見えた、しかもその隣で比企谷も雪ノ下も裸で絡み合っている。

「え、マジでこれ？」  
真っ暗な部屋の中、月明かりに照らされた由比ヶ浜結衣の胸が戸塚が突くたび大きく揺れている。  
雪ノ下も長い髪を振り見出し一心に腰を振っており、喘ぎ声と洗い呼吸音がこちらまで聞こえる。  
「うわー結衣さんも雪乃さんもものすごくエロいですね」  
しばらく見ていた4人は場所を入れ替え始めた、今度は比企谷が由比ヶ浜と戸塚が雪ノ下と絡み合っている。

「え？マジですかあれスワッピングって奴ですか？」  
「なんか『あたし振られたのにこうやってヒッキーとエッチしてるのなんか不思議だね』とかいってるぞ、なんでこうなってるのかすべてが不思議でならんぞ？酒のせいか？」

「戸塚先輩が『雪乃さん最近八幡に対してちょっと口調が厳しいよね？おしおきが必要だね？』とかいってますよ、戸塚先輩ってあんなキャラでしたっけ？」

「飲酒に不純異性行為に乱交でスリーアウトだぞ、人生終わってしまう、あの時飲酒を止めておけば・・・我らの責任だ・・・」

材木座と一色が言い合っている間に襖の向こうはさらに盛り上がりを見せる

「結衣先輩と雪乃先輩がキスし始めましたよ、なんかみんな固まって・・・めっちゃエロいですね・・・なんですかこれ、やばくないですか？」  
「・・・・」  
材木座は返答が出来なくなってしまった。  
ポジション的に一色の上にまたがって襖の隙間から覗いている状態なのだがあまりの光景に材木座の下半身も反応してしまい、動くに動けなくなってしまったのだ。  
腰をひいてはいたが、やはりどうしようもなく一色に気づかれてしまう。

「あのー材木先輩？私のお尻に硬いもの当たってるんですけど？」  
「し、しょうがなかろう、あ、あんなエロいもの見せられて落ち着いていられるか、まったくけしからんな」  
「へぇー」

一色は体をぐるっと回し仰向けになり上にまたがっている材木座と向き合う形になる  
「本当はアラサーのくせに高校生のエッチを見て興奮するとか？情けなくないんですかぁ？」  
といじわるそうに一色はいいちょっと上目遣いになると、出来るだけ材木座の耳元に口を寄せ

「義輝せんぱ～い？確かその年で素人童貞でしたっけ？恥ずかしくないんですかぁ？・・・ほんとうに雑魚ですよね～？うふふ、下のほうも雑魚なんですかぁ～？」  
とふざけて馬鹿にしたような挑発的なセリフを吐く、だがそれがまずかった。

ずっと一色の上で一緒に襖の隙間から隣をのぞいてた材木座、隣の状況に加え一色から漂う風呂上がりのいい香りを嗅いでたせいもありかなり理性が飛びそうになっていた。  
紅潮している一色の表情、若干はだけてる浴衣、水をはじくほどの若い素肌、がこれでもかと目に入ってくる、そこに今の挑発、酔いがまだ醒めない材木座の中で何かがブチンと切れると

「・・・おぬしが悪いのだからな、生意気なJKめ、わからせてやる・・・」

そのまま一色を抱き上げ襖から離れる、暴れる一色の口を塞ぐとそのまま奥の方へ押し倒し浴衣をはだけさせそのまま強引に犯し始めた  
「ちょっ！わたしが悪かったですって！ん！あ！まって！材木先輩、落ち着いて！やるならもっとやさしく・・・ん！あ！」  
無言で一色の体をむさぼる材木座、隣の部屋から聞こえる喘ぎ声と声を押し殺してあえぐ一色の姿が材木座の行為に拍車をかけた

十数分後

土下座している材木座とそれをテーブルに足を組んで座って見下ろしている一色がいた。  
「何か言い訳は？」  
小声だが物凄い殺気を放つ一色

「悪いと思っている、だが挑発したおぬしも悪い」

「はぁーまあそうですけど、なんで初めてがこんな男なんでしょうね？先輩とだったらよかったのに」  
「んじゃ今からでも隣混じってくる？ついでに我も、由比ヶ浜殿のおっぱいにむしゃぶりつきたい、JK最高」  
二人とも小声で言い合っているため隣からの喘ぎ声がよく聞こえる

「うわっ、キモッ！ほんと死にたいんですか？さっきまで私の体を好き放題してくれたのはどこの誰ですかアホですか、大体妊娠したらどう責任とってくれるんです？」

「ご存じのように前の経験生かして、株やら何やらに投資して短期間で増やしたからそこそこ金はある、金で解決できるところはする」  
「なんかよくわかんないですけど、金で解決ってのが変なところで大人ですね、その辺がちょっとむかつきますがまあいいでしょう・・・って隣はまだやってるんですかね？」

一色がまた襖の隙間から隣をのぞいて・・・そのまま固まってしまった。  
「どうされた、何か斬新なことでもやってるのか？」  
材木座ものぞいてみるとそこには

戸塚をバックでガンガンついている比企谷がいた  
「最高だ！気持ち良すぎる！彩加！妊娠しろ！」  
「あっ、は、八幡すっごく気持ちいいよ！お尻で妊娠しそう・・・僕男なのに・・・」

唖然としていた材木座と一色はハッと意識を取り戻すと  
「・・・もうわたし寝ます」  
「我も、もう奴らの喘ぎ声聞きたくない、一晩中やってそうだからな」  
と押し入れの中に入る材木座だったが  
「ちょっと！そこ私が狙ってたんですよ！外だとうるさくて寝れないですよね！」  
「うるさい！早い者勝ち！」  
「だめです！材木先輩はトイレで寝てください！」  
と結局二人で押し入れに入っていく、二人が入った押し入れはしばらく静かだったが結局もぞもぞと動き出す音と荒い息遣いが聞こえしばらくそれは続くのだった。

# 消えた未来　第１4話

2,637字5分钟

運命を変えた代償は大きかった・・・材木座と一色の運命も大きく変わってしまったが、しかし謎の存在はお詫びにとそこはどうにかできるように調整してもらった模様。材木座と一色の明日はどっちだ

2022年12月7日凌晨5点00分

回想終了

「思い出しましたか？」  
「思い出した・・・流れとは言えお主と肉体関係になっていたとは・・・奴が言っていた一般的な男性にとっては損ではないとはこのことか・・・そりゃあ初めてが一色殿のような女子ならそうかもだが・・・」

「は？当たり前じゃないですか？こんなかわいい子で初体験できちゃったんですよ？喜ぶべきですよね？」  
腕組みして怒る一色に材木座は膝をつき土下座する

「その節は済まなかった、でもわかってほしい、お主のような激カワ現役JKにあのシチュエーションで手を出さない男などこの世にはおらん、しかし言い訳にはなるがこれは恐らく奴が言ってた繋がりを強くした結果の可能性が高い」

「言い方がキモイですよ、でも確かにあいつのせいかもですね、なんであそこで挑発したのか全く分からないんですよ、実際不快感はそれほど無かったですし・・・でも問題はそこではなくてですね、その後ですよ」

「わかっておる、奴が言ってた『代償』のことであろう」

旅行後、妊娠検査キットでは陰性だったが念のためきちんとしたところで妊娠検査したところ、そもそも妊娠できない体になっていたのが発覚したのだ。  
不安になった材木座も一緒に検査してもらったところ同様に子供を作ることが出来なくなっていた。

「これがあいつの言ってた『代償』だっていうのが検査結果見た途端頭の中に響いてきました」

「我もそうだ、しかし時間をねじ曲げ人生を変えたのだ、むしろこのぐらいの代償でよかったと思わねばならんのかもな」  
「それはわかりますけど、結構つらいですよこれ・・・」  
涙目になりうつむく一色、しばらくして

「そうです！それ以外にも問題が多すぎなんですよ！高校の時はそれっきりでもう二度と会わないと思っていたのに！大学へ入学したときですよ！二度目の女子大生生活！今度こそイケメンゲットする予定だったのに！なんで隣に住んでるのがあなたなんですか！ストーカーですか？」

「先に住んでいたのにストーカーとはこれいかに、しかし確かに前の時間軸ではそんなことにはなっていなかったはず」  
ハッとした表情になる材木座

「なるほど！あの神だかなんだってやつが言ってたのはこのことか、関係性を強くした結果あのまま未来に進めていたのでこうなって、もとの時間軸との整合が取れなくなったとはこのことか」

「それで頻繁に顔を会わせてたら結局なし崩し的に付き合う羽目になって・・・不妊のこともあるからと先輩達には内緒にしてたみたいですけどね」  
溜息をつく一色

「今回の事故も一緒にいるとこ先輩たちに見つかりそうになったからダッシュで逃げた結果、車に轢かれるという間抜けな話になってますし」

「なんか本当にスマヌ、今からでも別れよ」  
と再び土下座の材木座

しかし土下座する材木座を見て一色はニヤリとする

「いえ、別れません、絶対に、絶対にです！」

「は？気が付かない間に我にそんな魅力が？世の中ぽっちゃりがブームなのか？我の時代が来たというのか！」  
と元気になる材木座に呆れ顔の一色

「アホですか、いいですか？高身長、高収入、そしてイケメン、三拍子そろった男を捕まえるのに世の中の女性がどんだけ苦労してるかわかりますか？」  
力説する一色  
「成程、確かに我は背は高い、そしてイケメンか！」

「・・・材木先輩の鏡が腐ってるのは仕方ないですが・・・いいですか？材木先輩は背が高いですし歳に合わず金持ちなんですよ！2/3もあれば一応合格です！」  
「ハテ？金持ち？我まだ学生だが？」

「前に言ってましたよね、株とかビットコイン？とか？なんか確実に上がるのに投資したって、見せてもらった記憶も思い出しました！自分のスマホ見てください」

材木座はスマホを取り出してみる、株とか仮想通貨口座のアプリがたくさん入ってた  
「・・・思い出した・・・これ確か一つ一つに・・・」  
試しに一つにログインしてみるとそこにはたくさんの桁の数字が表示されていた。しかも少しずつ増えていっている。株式口座にもものすごい量の金額が表示されてた。

「これが奴の言っていた生活に困らんようにしてやるって奴か、確かに我は死んだ日までの相場はおおよそ把握できているが、なんか上昇率が高すぎるな、このまま運用すればこの数倍、いや数10倍にはなるかも、配当だけで結構な額だ、ぶっちゃけ働かなくて良くなる、億り人とか余裕だなこれ」

「だから絶対に離しませんよ？こんなかわいいいろはちゃんをお嫁さんに出来るんですよ？泣いて土下座して感謝すべきですよね？でも暴落して一文無しになったら捨てますんでその辺よろしくです！」  
とそこに比企谷達が現れる

「おーいたいた、って何やってんのお前ら」  
土下座してる材木座とそれを見下ろしてる一色である、はたから見たら大変おかしい

「せんぱ～い、じつは～この材木先輩が土下座するからこのかわいいいろはちゃんにナースのコスプレして看病しろってうるさいんですよ～」  
「久々にあざとい、しかし材木座、そんなうらやましいシチュエーションはそういう店に行ってしろよな？現実と妄想は区別しろ」

「本当にそうですよね、それより先輩もうお昼ですしご飯食べましょう、ここの病院の食堂はまずいって評判なんですよ？一緒に食べましょう？先輩のお金で」  
と一色は比企谷の腕に自分の腕を絡める

「なんでまずいのに食べに行こうとするの？しかも俺の金で」

「ちょっと八幡？病院の食堂はカロリー控えめに作っているから味が薄いの、だからあまりおいしくないと感じるのよ？それよりうらやましいって何かしら？一色さんをそんな目で見てたのかしら？説明が欲しいわ、それと一色さん？あなた少々なれなれしいんではなくて？そもそもコスプレしてほしかったら私にそう言えば・・・」

と雪ノ下は早口でまくし立てながら比企谷をにらみ、戸塚はそれをなだめつつ部屋から出ていく、ただ由比ヶ浜だけは最後に材木座の方を振り向き親指を突き出しウィンクして  
「中二！頑張れ！」  
と一言言って出て行った。

「なんか違う意味で頭が痛くなってきたでござるよ」

その後検査が続いた後材木座と一色は退院する。  
お金のことは金額が莫大であるため親にも内緒、付き合ってることも今まで通り周りには内緒にしてそのまま大学生活をつづけたのであった。

# 消えた未来　第１５話

2,333字5分钟

材木座は金があれば何でもできる！と言った感じですね。  
あと一話で終わりです。

2022年12月9日凌晨5点00分

大学卒業後すぐに比企谷達は結婚することとなる。

比企谷、戸塚の結婚式は合同で行われた、聞けば新婚旅行先も一緒だとか

「えー比企谷家雪ノ下家戸塚家由比ヶ浜家の花婿、花嫁4人とも大変な大親友であるため、このような式が執り行われました」  
スポットライトを浴びた司会が戸惑い気味に言っている。  
友人関係というだけの二組の同時結婚式なぞ式場にとっては前代未聞である。  
家族も親戚もかなり戸惑い気味だがど真ん中に設置された友人席には材木座と一色がこれまた渋い顔で座っていた。

「わたしたちがこうして結婚できたのものこの二人の親友のおかげです！」  
と雪ノ下が材木座達の方を向いてしゃべるとスポットライトが当たる

「なんですか？これじゃわたしたち晒しものじゃないですか！」  
「いろいろ無茶苦茶でござるよ・・・前の人生の八幡の式もそこそこ派手だったがここまでではなかったと思うが・・・」  
戸惑い気味の二人、スピーチを依頼されていたので無難な言葉で祝辞を延べ式は成功のうちに幕を閉じる

帰り道  
「ふむ、引き出物は二倍、祝儀は一括で渡せたから、通常なら3万づつのところ5万で済んだ、大変お得であるな、今後はこういうのをどんどんやっていただくと財布にやさしい」  
「バーゲンじゃないんですから・・・」  
あきれ顔の一色と得をしたとコスパ最高と上機嫌な材木座

「・・・しかし一応就職しましたが、正直わたし働きたくないんですけど、義輝先輩、さっさと結婚して専業主婦にさせてください、そして財産を私に下さい」  
「またその話題か・・・その辺は前から行っておるだろう、結婚となると親から子供せがまれる、八幡達からもいろいろ言われるやもしれん、その時体のこと知られたら猛烈に気まずくなるぞ？その辺は慎重にしたほうがよかろう」

働きたくないのは完全同意の材木座、しかし投資で増やした莫大な資産や子供を作れない体のこと等、周りに知られるといろいろ面倒なことになるのは確実である、そのため相変わらず付き合っていることは伏せて普通に就職したのであった。

そして住むところも実際は家を建てて同棲していたわけだが周囲には無論内緒である。  
周りには別々に住んでいる様に見せかけるためにアパートを複数購入、その一室に住んでいるふりをしているという徹底ぶりであった。これも莫大な資産のなせる業である。

そして諸々を周囲に怪しまれない為にとりあえず就職先で働く二人であった。

ある日  
「いいアイディアをおもいついたんですよ！」  
夕食を一緒に取っていた一色が叫ぶ  
「先日うちの会社の人が脱サラしてアパレル業始めるとか言って辞めちゃったんです」  
「成程、では我も脱サラしてネオニートにでもなるか、人類の夢だが今の我には可能であるな、む、この煮物うまいな、また腕を上げたようで」  
一色の作った夕飯をつつきながらの材木座、同棲しているため夕食は毎回一色の手作りである。

「え！そうですか？そうなんですよー結構うまくできた・・・ってあほですか馬鹿ですか！そうじゃなくて！んもー真面目に聞いてください！いいですか？このままだと先輩たちの所にいかないと顔を会わせられないじゃないですか」

「よくわからん存在の奴は『自分で見ないことには願いがかなってるかどうかわからん』とか言っておっただろ、だから極力奴らのところに行って様子見しておるだろう？」

「いいですか！向こうは新婚ですよ！？そんなところに頻繁に押し掛けるとかダメですよ！絶対ダメ！大体どんぐらい続ければいいんですか！」  
「そういうものか？向こうも喜んでおるだろ？」  
「あのですね？新婚っていうとこう・・・いろいろあるんですよ！いろいろ！義輝にもいろいろやってあげてますよね！？そういう時に来客があったらどう思います？嫌ですよね！」

「うっぐっ・・・」  
答えに詰まる材木座、材木座はゲームキャラやらアニメやらの趣味満載のコスプレ衣装を山のように購入し一色に着せてはいろいろさせていたのである、それはもうあらゆる薄い本の状況再現である、金のなせる技である。  
「ですよね？なので向こうから来てもらうようにすれば問題ないんですよ」  
「どういうこと？」

「先輩たち専用みたいなお店開いてお客になってもらうんですよ！」  
「店？八幡が好きなのってマックスコーヒーと千葉であるが・・・」  
「そうですよ、あのゲロ甘コーヒーみたいなのを出す喫茶店なんかどうです？先輩たちしか来ませんよ！」

「成程・・・グッドアイディアだとは思うが我はコーヒーの知識なんてないのであるが？金は都合つくが大体店開く理由とかいろいろあるであろう？」

「なんかこうコーヒー豆を粉々にしてなんか色々するやつあるじゃないですか、そういう超高級品でも買えばいいんですよ！コーヒーの技術なんて道具が良ければ恰好つきますって！理由なんて適当でいいんじゃないですか？」  
「うわぁ・・・それ全国の喫茶店のマスターにたいする冒涜では？土下座して謝罪するレベルの発言だと思うが・・・」

というわけで比企谷達とも顔を合わせる口実のため、お金だけはあるので働きたくない二人は早々に脱サラし喫茶店を開くことにしたのだった。

周りには「小さい喫茶店を開くのが夢だった」という、ありきたりな理由をでっち上げた材木座と一色、むろん両親や比企谷達からは「聞いたことないんだけど」と言われたが一色も同志でそのために資金をためたということにして無理やり周囲を納得させていた。  
無論実際の喫茶店の立ち上げ費用は今の材木座にとっては問題ないレベルであったので開店はスムーズにできたのである。

# エピローグ

3,192字6分钟

終わりです、材木座の誕生日を祝って作品作りました。気がむいたら来年またやるやもしれません。  
最後なので陽乃も巻き込んでみました。最悪な未来を回避できた材木座と一色に乾杯

2022年12月10日凌晨5点00分

「しかし材木座が喫茶店とはな、結構雰囲気がおしゃれなのが腹が立つ」  
今日は比企谷や戸塚達が子供を連れて来店だ。  
入店直後から相変わらずの比企谷八幡

「八幡！あんまりでござるよ、そもそもその辺はいろはの奴が・・・」  
「そこだよ！なんか怪しいなと思っていたんだ！いつも一緒にいたから僕たちもちょっと気を使ってたんだよ？なんで結婚はしないの？」  
と戸塚

「いや、まぁ踏ん切りがつかなくて・・・」  
「そ、そうなんですよ、義輝は頼りなくてですね、いつでも捨てれるようにしとかないと」  
と二人は微妙な顔で笑う  
一色と材木座はやはり結婚をしていない、子供が作れないと知られると親は無論、比企谷達に気を使わせてしまうため、話し合った結果年齢のせいで作れないという言い訳が立つ年まで結婚を控えている状態だったのだ。

「こいつはラーメンが似合うと思ってたんだがな」  
と比企谷はマックスコーヒーで作られた特製ブレンドコーヒーを飲む  
「ふん、マックスコーヒーをボトルキープしてる喫茶店なんて世界中探してもここぐらいなものである、感謝しろ八幡」  
「だからしょっちゅう来てるだろ」  
材木座はあらゆるコーヒーをマックスコーヒーで割り比企谷好みのブレンドしたコーヒーを開発していたのだ。

「店内も広いし子供の遊び場まであるし、いろいろ助かるよ！中二！」  
「そうね、疲れたときとかにちょうどいいわ」  
店内にはキッズスペースまである徹底ぶり、まさに比企谷達のために作ったといっても過言ではない店である。

そしてここの常連がもう一人来店する

「ひゃっはろー！子供たちに会いに来たよー！お姉ちゃんとあそぼー」  
「あ！おばちゃんだ！」  
「はるおばちゃんこんにちわー」  
「おばちゃんじゃないよーお姉ちゃんだよー誰かなー？そんな教育をしたのはー？どこの八幡君かなー？あとでお説教しないとねー」  
そういいつつ陽乃は子供たちを抱きかかえ一緒にキッズスペースで遊び始める

子供を陽乃に任せた四人はテーブルを囲んで談笑してるが、どうにもボディタッチが多い、しかも何か艶っぽい感じが伝わってきて仲が良すぎる気もする。

材木座は四人のあまりの仲の良さに高校の春休みの旅行の時に見た光景を思い出す  
「なあ、あの子供本当にお互いのパートナーの子供か？」  
ビクッとなって一瞬固まる四人

「とと当然だろ、何言ってんだ材木座？ちゃんとDNA鑑定してるから問題ない、だな？雪乃？」  
「と、当然よ、DNA鑑定してるから問題はないわ、八幡の子よ？でも彩加さん・・・ではなく彩加さんと結衣さんの子供でも私たちの子供みたいなものよ」  
「うんそうだよ、ちゃんとDNA鑑定してて問題ないことを確認済み、問題はないよ？ね？結衣？」  
「うん、DNA鑑定してるもんね、彩ちゃんとの子供なのは間違いないよ？でもヒッキー・・・じゃなくってヒッキーとゆきのんの子供でもあたしたちの子供みたいなもんだよ！」

「普通はDNA鑑定をそこまで強調しないと思うが」  
その言葉にまたビクッとなる四人  
「ななななに言ってんだ材木座？いいかDNA鑑定というのはだな？障害を持っているかどうかの検査にもだな？」  
力説しているが完全に目が泳いでいる比企谷達  
「いちいちビクっとならんでほしいのだが、ものすごく不安になる、確か誕生日も一緒だったよなぁ・・・」

ふと子供たちを抱えてニコニコしてる陽乃を見る、一緒に遊んでいる子供たちをよく見ると二人とも子供にしてはかわいらしすぎる気がする、やたらと整った顔立ちに中性的な外見そもそも二人の子供の頭に特徴的なアホ毛のようのものが・・・

考えすぎだろうと頭を振って  
「これが望んだ未来だったのか？」  
とさらに首をひねる材木座だった。

「おまえらが望んだ未来だろ」

突然声がして店内から人の気配がなくなる。  
窓の外の景色も動きを止め目の前にはいつのまにか無表情の陽乃が立っていた。

「丁度いいからこいつの体を借りてしゃべっている、ところで今日の日を覚えているか？前の時間軸で今日のちょうど今頃の時間、お前達が道路に叩きつけられ血まみれになっていたころだな」

陽乃はうつろな目で表情を変えずしゃべり続ける  
「『八幡達が幸せな選択をとった世界が見たい、あやつらが幸せで笑顔でいてくれる未来が欲しい』お前らはそういったな？今がそれではないか？」

「なぜ我らにここまでしてくれるのだ？」  
「気まぐれだ、お前らにちょっとだけ興味がわいたんでな」  
「気まぐれってそれでここまでしてもらうなんて・・・」

「だから代償もらっただろ、どういう代償だったかは理解したはずだ。いいか？俺に感謝しろよ？金のおかげで生活には困ってないだろ、せいぜい余生をあいつらの幸せのために使うこった・・・んじゃ俺は消える、生きてる間はもう会うことも無いだろ、死んだらその時に再会しようぜ？」

言葉が終わると一瞬で店内の雰囲気が戻り、喧騒が戻ってくる

目の前の陽乃はハッとした表情になるとちょっと考えた後、そのまま材木座の前のカウンターに座り肘をつく

「へー・・・君たち雪乃ちゃん達の為に神様と取引したんだ・・・わたしにとりつくなんて神様も迂闊よねぇ？」  
その言葉に驚く一色  
「ほんとにこの人なんなんですか・・・」  
しかし次の言葉で材木座と一色は凍り付く

「君たちに協力をお願いしたのは正解だったのかな？」  
「は？」  
「一体どういう・・・？」

「私死んだのよ、今のこの時間、君たちが帰った後、お店を出てた所で私刺されたのよ、あの時は会社も大変なことになっていて、結構ヤバいこともしてたから色んな人からも恨まれてたみたいでねー」  
「刺されたって・・・」

「それで倒れちゃって、あーこれで私も終わりかーと思ったら変な人が『望みはないか』って聞いてきてね、雪乃ちゃんが幸せになってほしいって言ったら『妹か、まあ普通の願いではあるが・・・さっきの連中と被ってるな？ハハハこれはうまくいけば何とかなるかもしれんな、うまくいったらさっきの二人に礼をしろよ？』といわれた後目の前が真っ暗になって・・・」

「まさか過去に戻っていたとか？」  
と材木座が聞くが陽乃は首を振って  
「そこで終わり、今そこまで思い出したってことね、でもごめんなさい」  
いきなり頭を下げる陽乃

「『代償』のことも今理解したわ、私が原因よね・・・」

「あーそれ、何も聞かずに承諾した我々にも問題あるしのう・・・」  
「そうですね、ああして先輩たちが笑顔でいてくれるからわたし達は満足ですよ？この店もそのために作ったものですし・・・」  
気まずい表情をする材木座と一色

「そっか、後でお礼はたっぷりしてあげる、本当に一生お礼を言い続けないと行けないかも・・・それじゃいろいろ聞かせてもらおうかな？あなたたちが何をして雪乃ちゃん達を助けてくれたのかをね？」

頷く一色  
「まず車に轢かれたわたし達は・・・」  
今までの経緯を話そうとする一色、その後ろで比企谷達は皆でまた旅行に行こうかと大はしゃぎしていた。

それを聞いた材木座  
「八幡よ、旅行はいいが腹違いの兄弟とかはアニメだけで十分だからな？」  
またもやビクッとなる四人、こんなことを言った経緯まで目の前の陽乃に話さないといけないのか、確実に面倒くさいことになるなぁと思うが

「消えた未来よりは遥かにマシであるか」  
そういうと天井を仰ぐ

「しかしどう過去や未来を変えても『神は天に在り、世はすべてこともなし』ということなのかもしれぬのう、奴にとっては」  
某エヴァに出てくるセリフをつぶやく、あたりまえだと聞こえた気がするが空耳だろうと首を振りコーヒーカップを磨きにかかる材木座であった。

附：机翻

序言

====================================

今天是材木座的生日，恭喜你。

于是我试着思考了一下话题。

高中毕业十年后，由比浜决定去海外旅行。

然而，由比浜因意外事故身亡，并由此成为导火索，让大家的人生大跌眼镜。在这样的情况下，材木座和一色遭遇了交通事故，受到了濒死的重伤。那个时候遇到了谜一样的存在，希望能改变现状，回到过去进行历史改变。

经常吗?是时滞的东西。

虽然我个人认为一色色是女主角之一，但读了原作后也觉得与其说是女主角，不如说更接近于名角角色，像是在推动停滞的关系，让八幡选择最优解，妹妹在家里是一色有在学校支持八幡的感觉呢。

虽然也有自己喜欢配角(特别是材木座)的原因。

总武高中发生的活动的顺序有先后的地方，因为久违了所以觉得奇怪的地方也有很多，请原谅，一边写一边修正一边投稿。

====================================

“那我们都走了!”

高中毕业十几年后，比企谷八幡和雪之下雪乃结婚了。

今天是他们的好朋友由比浜结衣出国的日子，她在学习后加入了发展中国家支援团体，今天决定被派往当地。

在机场

“到了那边可不能喝生水啊?”

“吃东西也要注意，什么都吃会坏肚子的。”

“嗯!幸乃和希基!我不是孩子!”

叶山和其他前来送行的人都给予了鼓励。

“那么，不肖的由比浜结衣!从现在开始，我要去海外旅行了!”

摆出敬礼的姿势

“我不知道什么时候才能回来，而且我要去的地方通讯设施不太完善，可能不能马上联系，但我一定会去的!”

“由比滨，你一定要平安回来。”

她说着，在雪下抱着由比浜。

“希基也不能让幸乃伤心啊!”

“嗯，我答应你。”

和大家告别了一阵之后

“大家好!我们走了!”

在众人的目送中，由比滨精神饱满地挥着手，走向登机口。

由比滨离开日本几个星期后

“临时新闻，某国发生了政变!日本的支援团体所在的建筑物遭到了反政府军的攻击!建筑物倒塌了，里面的人们都很绝望!”

看着电视的比企谷他们绝望了

“啊?骗人的……八幡?由比滨呢?由比滨没事吧……?”

“不知道……”

几天后由比浜家接到由比浜结衣死亡的消息。

然后，只有尸体回来了，虽然尸体的损伤严重，但脸部奇迹般地完好如初。

“骗人的……由比浜先生……怎么会……”

雪乃靠在棺材上

“都是我不好……”

“雪乃?”

“如果我不和八幡结婚，不，如果我不喜欢八幡，由比浜就不会去海外……是我不好!是我不好!”

边哭边叫的雪乃

“雪乃!……对不起，比企谷君，雪乃好像很厉害，暂时带你回家吧?”

阳乃把哭喊着的雪乃直接带回了娘家。

比企谷八幡只能呆呆地看着。

====================================

消失的未来 第1话

====================================

户冢喜欢由比滨是设定，不过由比滨把户冢带到服务部的经过很暧昧，我想第一卷的内容完全没有详细这方面的设定，顺其自然吧。我想应该是吧。这也是我的灵感来源。

====================================

“材木座，可以过来一下吗?”

由比滨的葬礼结束后，材木座被户冢叫住，直接前往酒馆。

“对不起，我想找个人听听。”

“户冢大人是我的好朋友，那是当然的，可是为什么不叫八幡呢?不是也有他吗?”

“我不想让八幡听到……”

说着坐下点了单。材木座是啤酒，户冢突然点了烈酒

“户冢大人，你是不是有点跳过头了?”

的木材座上

“啊哈哈……其实我不擅长喝酒……”

户冢露出没精打采的笑容

点的杯子送来后，户冢开始断断续续地说。

“虽然没跟任何人说…其实我喜欢结衣。”

呃?的表情的材木座，回想当时好像完全没有那样的动作。

“从高中一年级的时候开始就觉得挺好的，结衣你是那种性格吧?我跟她打过招呼，但她一直把我当朋友对待，上了二年级，我和她同班，好不容易逮到一个机会，她就把我带到义工部来了，那时结衣说喜欢八幡，我一下子就明白了，但我是八幡的孩子。因为太喜欢结衣了，跟结衣告白就像背叛八幡一样，完全做不到。”

户冢把杯子里的酒一饮而尽，深深垂下了头

“这种事，八幡和雪下殿交往的时候告白不就好了吗?不是有很多机会吗?我不太清楚。”

“…结衣一直朝向八幡的方向，八幡和雪下都很重视结衣，我看了就知道，而且打电话和LINE总是说那两个人的事…非常告白特……”

阴沉着脸一饮而尽的户冢

“就这样一直像朋友一样的关系下去，不知不觉就到了这个年纪，结衣去国外的时候也阻止不了，我真是个没用的男人。”

材木座不知道该说什么，只是默默地听着。

“如果我是个更可靠的男人，早点告诉她我的心意，也许就不会变成这样了，就像我杀了结衣一样……”

“户冢大人……”

材木座终于开口了，但他觉得不管说什么都会伤害到户冢，只能默默地看着在自己面前啜泣的户冢。

消失的未来 第2话

====================================

在悲惨的现状中，材木座被卡车撞成重伤，然后…

虽然一直是黑暗的展开，但接下来是急速的发展。

另外，投稿时机是在修改后写完的。====================================

几天后，造访比企谷宅邸的材木座

“听说八幡关在家里，我就到阵中探病。”

“谢谢，雪乃不在之后，哥哥就一直闷在房间里，如果他只是闷在房间里倒还好……”

说话含蓄的小町，嗯?歪着头走向比企谷的房间

“拜托了!八幡啊，状态怎么样?好久没玩游戏了，怎么样?”

瘦得不成样子的比企谷八幡坐在床上。

“啊，木材座啊，对不起，我没去上学。”

“学校?……这是!妹妹!……”

“是啊，在哥哥之前一直都是自己做的选择，一直念叨着是自己杀了结衣……一想到最近不再说这种话就觉得很奇怪，我也该怎么办才好吗……”

“小町，没事的，只是有点不舒服，休息一下而已。对了，社团活动有雪下和由比浜就行了吗?我只担心那里。”

“社团活动···啊···啊，是这样啊···没关系，那边我随便说。”

“你?没事吧?由比浜说恶心，你可别受伤啊。”

一脸生气地笑着的比企谷

“那么，那我就在这里……”

离开房间的木材座

“妹妹，八幡一直是这样吗?”

“是···我也不知道该怎么办···前段时间还想把校服拿出来上学···哥哥···”

哭起来的小町，坐立不安的木材座

过了一会儿，小町安顿下来后，材木座决定回去。

在街上等红绿灯的时候被叫住了。

叫住她的是一个似曾相识的美人。

只是脸色非常差，看起来十分憔悴。

我歪着头想起来了。

我还以为是在葬礼那天把吵吵嚷嚷的雪乃带回家的姐姐呢。

“你好像是八幡君的朋友吧?正好，可以吗?”

我连比企谷八幡的名字都报出来，以为不会有欺诈或逆袭，就跟着进了咖啡店。被带过去的座位上，又坐着一位熟悉的女性。

“你好……”

那里有一种颜色的颜色。

刚才那个美女从后面催促我坐下。

“是材木座吧?不好意思，我是偶然发现的，所以才打了声招呼，我是雪之下阳乃，雪乃的姐姐。”

阳乃继续说

“其实雪乃变得很奇怪……嘎滨死后，她一直说自己杀了嘎滨，是自己的错，因为自己向八幡告白，她就会在另一个世界向嘎滨道歉。甚至杀人未遂。”

阳乃低着头继续说

“我想阻止他自杀，但他半狂乱地大叫……我一离开他的视线，他就想用刀割手腕，我变得完全不知道该怎么办了。”

一边用手帕擦着湿润的眼睛一边继续说。

“对不起，如果雪乃打来奇怪的电话，或者你发现你在外面的话，请跟我联系，我知道你说得很好，但我想让你帮助雪乃和八幡君，你做什么?完全没有考虑过吗···”

“雪乃学长是很重要的学长，到时候请让我帮忙。”

“八幡是我们的盟友，我当然也会协助你们。”

“谢谢···本来打电话也可以的，但如果不跟你说的话，我就不安···对不起···这里的账我来付。”

她离开了高中时看到的阳乃，完全没有了魄力，只是憔悴不堪。

外面下着雨

“……我那么努力了，经历了那么多事情，前辈终于选择了……为什么会变成这样呢?”

一色和材木座撑着伞走在通往车站的路上。

咦?虽然没什么关系，但这个女人确实是学生会会长吗?

好像把很多麻烦都推给你了?歪着头的木材座

“我也不太清楚，不过八幡他们开始交往之后，由比浜大人好像也在一起。”

“在别人看来确实是这样的，但实际上好像一直保持着距离，但他好像还是忘不了前辈，和雪乃一起玩，两个人经常聊天。”

“这样啊，那么这次要去海外呢?”

“肯定是觉得这样下去不行，所以在物理上和前辈们保持距离，真的想忘掉他们吧。”

“那……那是八幡的错!是没有明确拒绝由比浜殿的错!”八幡喝醉的时候吧?告白的时候的台词啊，我问了很多他和那两个人的故事，你知道他甩由比浜大人的台词吗?”

“不……”

“说什么‘不用等我’之类的，是吗?这是什么意思?我明明白白地说喜欢冰雪女王，不和你交往就好了吧!那样的话……”

“如果有人能说出来，我就不会那么辛苦了!”

一色叫道

“我也希望你能说清楚，但是他们不是会说这种话的人，即使这样也想办法给出答案……如果没有给出答案的话，我们的关系就会一直持续到现在。嗯，也许发生了更糟糕的事情……”

“我不知道你做了什么，但那家伙清楚地……”

“那我该怎么办呢?你是说我做错了吗?你对那些人有什么了解?”

一边呐喊一边流泪的一色

“……对不起。”

一色就这样跑过了人行横道，撑着伞的木材座低着头没有注意到。

信号灯已经变成了红色。

注意到的时候已经晚了。

卡车发出猛烈的刹车声

“啊，危险。”

一辆卡车迫近在红灯人行横道上奔跑的一色，木材座扔下伞，从卡车前面把一色救出来，从后面把他撞飞。

“哇!”

撞飞一色的同时材木座咚!感到强烈的冲击

木材座不是一色的，而是被卡车撞飞，身体在空中飞舞。

消失的未来 第3话

====================================

事到如今，我觉得这部作品的标题和内容都让人感到不稳定和反对，但我打算以普通的大团圆收尾。

====================================

回过神来，脸颊上有坚硬的触感

“咦?还活着?”

他微微睁开眼睛，发现自己好像倒在马路上，眼前是一片血海，胳膊和腿都没有感觉，动不了，木材座让他觉得自己很快就会死。

眼前是一辆救护车，有急救人员站在那里，但不知为何，他一动也不动，保持着直立不动的姿势，而且周围的情况也有些奇怪

周围完全听不到杂音，而且除了眼前的急救队员以外，没有其他人。

我感觉时间好像停止了。

我面前的急救人员开始说话，姿势完全没有改变。

“如果你让我实现你的一个愿望，你会怎么做?”

这家伙在说什么?我还以为这就是走马灯呢

“你可能不相信，我现在正在借这家伙的身体说话，难道就没有比这更大的愿望了吗?”

马上回答，借身体吗?这是什么?是梦吗?既然是梦想，那就说你最想实现的事吧

“我想看到八幡他们做出了幸福选择的世界，我想要操作员幸福地微笑着的未来，但反正是不可能实现的吧。”

眼前的急救队员听到后，保持原来的姿势，面不改色地发出笑声。

“啊哈哈哈哈，刚才那个女人也说了一模一样的话!到现在为止的那些人都是些很平常的事情，所以只是听了听就送去了另一个世界，希望不是家人的第三者得到幸福吗?你们是正常的吗?有趣，我要帮助刚才的女人实现愿望。”

“什么?真的吗?怎么做的?”

“让你带着现在的记忆回到过去，引导你想要的未来，在决定未来的阶段让你回到现在，只是要付出代价。”

“为什么现在?又死了?……”

“现在也只是时间而已，如果不退回去，就比别人早消耗了寿命，这是我的情况，如果成功的话，还有另一个现在在等着我，我会用快进的感觉整合记忆。放心吧。”

“…不太明白，真的能帮助八幡他们吗?如果失败了呢?”

“那个时候，就算现在是确定的、无法修正的阶段，也会把它恢复过来吧?那个时候，就是现在的状况，因为你马上就要死了，只要不改变过去，就是这样的命运。”

急救队员笑着保持原来的姿势，太吓人了，这家伙是人吗?

“不管怎么说，都要看你们的努力了，不过，你没问我代价是什么吗?那个女人也没问我什么，就一口答应了!简直是自我牺牲!”

这么说来，材木座应该没听说，但为时已晚。

“那就从下次醒来开始，加油吧。”

话音刚落，周围的气氛就变了，突然传来的雨声、杂音、围观的人群，眼前的急救队员也像刚才的事情完全没有发生过一样，突然行动起来，喊了几句话。

材木座闭上了眼睛，想着自己会不会在逐渐淡薄的意识中再次醒来。

材木座醒了。好像倒在冰冷的亚麻油地毡上。

“这里到底是……被车撞了?”

站起来环顾四周

“诶!这里是总武高中? !为什么? !”

从怀里掏出手机一看，显示的年月日是自己高中的时候。

“那个莫名其妙的家伙是真的吗?”

站起来确认自己的身形

“打扮和随身物品都是高中时的吧，还有死前的记忆，刚才的是现实吗?总之先去八幡那里看看吧。”

时间是放学后，几乎看不到人影。

来到前往服务部的木材座，也就是特别大楼的活动室前，看见有人蹲在那里。

“嗯?主人呢?”

她回过头来，露出惊讶的表情，

“诶?为什么?……总之不要进去，请安静。”

一边露出可怕的表情，一边竖起耳朵听着里面的情况。

试着模仿木材座。

“我想要真的。”

我听见比企谷的声音。

“我不知道。”

也听到了雪下的声音，门砰的一声开了，雪下看也不看这边，朝走廊的方向跑去。

在里面

“一起去!……现在必须去!”

教室里传来由比浜和比企谷的说话声。

“咦?”

与两人对视的木材座

“你在这里干什么?”

一色对一脸不可思议的两人叫道

“前辈!今天开会休息!还有雪乃前辈在上面!你快走吧!”

“喔、喔……”

跑出去的两个人，一色追上去，材木座完全摸不清状况

“啊?啊?啊?有点……”

总之先追上一色。

从走廊的出入口偷偷地看，

外面比企谷他们好像在互相说着什么。

露出一丝笑容。

完全不知道发生了什么事的木材座，这次从后面传来了声音

“还是赢不了那些人啊……话说回来，你为什么会在这里?之前明明不在这里。”

回头一看，清一色的人站在那里。

“呃?不，是那个……嗯?以前不在吗?”

正绞尽脑汁整理状况的木材座

“请到这边来一下。”

被强行握住手拉进一年级的教室。

也许是放学后的缘故，谁也不在

“这里没有人，请回答我，你为什么会在那里?”

如果是高中时的材木座，女生会抓住他的手，让他兴奋不已，两人独处。

“我很受欢迎吗?告白?”

虽然身体是高中生，但实际上是单身三十岁。

虽然没有女朋友，但因为工作关系，和女性说话也是常有的事，而且还去了色情场所，所以和高中时相比，已经免疫了很多。

不过，被女高中生握住手，说实话还是有点忐忑不安。

“呵呵，我妄想不能和JK两个人独处……这个女生好像很眼熟……”

立刻冷静下来。

“刚才你说‘前一次’，原来如此，你也是‘第二次’吗?”

会不会是事故发生前在一起的一色伊吕波?我想那个奇怪的存在好像也叫‘那个女人’，于是我选择了适合当时自己角色的台词。

一色深深地叹了口气，表情复杂，不知道是安心了，还是沮丧了。

“果然是这样啊，是木材先生吗?是谁把他从卡车上撞飞的?”

“你真的和我有同样的遭遇吗?嗯，确实是我，不是木材，而是木材座!可是为什么呢?主人没有被车撞死呢?”

一色又叹了口气说

“被撞飞之后，又被从卡车阴影里飞出来的另一辆车撞飞，摔在了路上，所以我就不说谢谢了。”

从木材座的角度来看是想拯救他，但结果似乎毫无意义

“嗯，嗯……是吗，不好意思，刚才到底是怎么回事?”

“其实现在这个时期，想和海滨高中联合举办圣诞晚会，但是不顺利…”

一色传达了到目前为止的大致情况。

“是啊，不过，那家伙为什么要回到现在这个地方的这个时间呢?既然机会难得，就应该在更早之前，比如遇到八幡他们的时候。”

一色对着歪着头的木材座坚定地说。

“不，那家伙让我回到了最好的时间，现在就好，前辈们互相吐露心声的现在才是真正的开始。”

消失的未来 第4话

====================================

材木座和一色在说想要比企谷八幡真品的时间出现，在那里为了怎样才能避免悲惨的未来而奋斗。

====================================

“刚才说想要真人的那句话是真心话吗?那么现在才是真正的?”

“因为那位前辈的‘真的’发言，前辈们的关系稍微向前推进了一些。我也受其影响……这样就好了，接下来该怎么办……”

令人兴奋的是，好东西来了，清一色的没有计划。

“前辈，你很明显意识到了雪乃前辈，雪乃前辈和前辈说话时的表情完全不一样，结衣前辈也很在意前辈，这一点很明显。”

“是吗?我想那家伙赶紧坦白，把由比浜大人甩了就好了。”

一色以僵硬的笑容回应

“你不是因为做不到这一点才受苦的吗?你知道那样的话，结衣前辈又会变成孤身一人，结果还是同样的结局吗?傻吗?再死一次怎么样?”

“嗯，明明是笑脸，却很可怕，什么都不用那么说……”

愤怒满脑子

“比如说反过来和结衣前辈交往的话，这次雪乃前辈肯定会分开的，那样的话就更糟糕了，和其中一个交往的话，三个人不在一起是不行的，结果就会变成四不像。?”

抱着头的一色

“干脆让他们搬到可以重婚的国家……对啊，让他们退学，把他们国家的国籍……还是地下社会吧……”

诸如此类的胡言乱语越来越多

一个劲地嘟囔着，一副鬼气逼人的样子，材木座觉得很可怕，不过，咳嗽了一下转换了心情。

“啊……方便吗?你认识户冢彩加吗?他是我们的好朋友，也是网球部的部长。”

“啊?知道啊，户冢前辈就是那个被称为‘王子’的人吧?在一年级学生中也很有人气，有人就是冲着户冢前辈才加入网球部的，这么说来，好像和前辈关系也很好，那个人是怎么回事?”

一色抬起头，看着材木座，他的表情非常可怕，材木座吓了一跳，但还是说了下去。

“我以前听说户冢大人爱上了由比浜大人。”

“真的吗?”

惊人的一色

“嗯，所以才会让户冢大人和由比浜大人成为情侣，八幡对户冢大人的喜欢达到了病态的地步，说实话，我也很喜欢他，如果和他交往的话，由比浜大人肯定也没有必要保持距离了。”不!反而会因为户冢效应经常在一起!这就是三方一两损!”

“我听到了一些意思不明且令人不安的台词……原来如此，我大致明白了。就按这条线走吧。”

嗯嗯点头的一套

“只是不知道如何交往，我的恋爱偏差值为0……”

这次是木材座抱着头。

“这方面就交给我吧，为了圣诞会的帮忙，我就强迫你作为兼职社员加入义工部吧!即使拒绝，也会用学生会的权限强行让他们协助，网球部在比赛中确实没有取得好成绩，如果这次帮忙的话就答应提高部费……”

对单一提案皱眉的木材座

“你也差不多吧。”

“没必要管他的样子。”

第二天

一色告诉户冢，和海滨高中的圣诞聚会的准备遇到了困难，比企谷他们很为难，再这样下去人手会严重不足，希望能帮忙。

“部费什么的无所谓!如果能成为八幡的力量我来帮忙!”

户冢满口答应，一色直接去服务部取得谅解

“什么?户冢?”

叫喊着的比企谷，不知所措的雪下的由比浜，在比企谷的强力推动下轻松地取得了同意。

放学后，比企谷、雪下、由比浜、户冢来到与海滨开会的约定地点。

“前辈，让您久等了。”

“……为什么没有你?”

从组合二出来的一色身后，有个人影像灵魂一样跟在后面，就是材木座。

“不，户冢大人说要帮助八幡!说到八幡就是我!说到户冢大人就是我!故我来!”

紧紧的木材座

“虽然说了些什么，但这个人身材魁梧，或许能牵制住海滨，所以才挖他过来的。”

和往常一样的笑容。

“星探……没问题吗?”

比企谷像往常一样从一色手中接过购物袋。

“啊，今后让后面的大的人来做就行了。”

于是把便利店的袋子塞到木材座上

“我不是说八幡会拿吗?为什么?”

小声抗议的木材座

“在这里让前辈做的话，雪乃前辈他们会不安吧!好了，拿着吧!”

一色小声地命令着，在一旁看着的雪下

“那个，一色?你没事吧?”

的声音。

“没关系的!大家一起去吧!前辈和雪乃前辈!结衣前辈和户冢前辈也不要迟到哦。”

故意推着比企谷和雪下的后背，让两人并排走。

“啊!好了，两位一起走吧!”

材木座也设法让户冢和由比浜带路，跟在一色身后。

在木材座的后面“一色是那样的角色吗?”

“嗯，有点奇怪，但更让我吃惊的是，中二竟然和伊吕波在一起。”

听到两人的对话。

“我也吓了一跳，你真的没事吗?”

木材座不安地说。

消失的未来 第5话

====================================

说到圣诞节活动和去迪丁尼乐园的话题。

一色不再向叶山告白，而是让户冢向由比浜告白。====================================

和海滨高中的会议，即使户冢在，还是和转世前一样毫无进展。

“八幡对不起，海滨的会长他们说的话我什么都不懂，没能帮上忙，对不起。”

“没关系，懂才奇怪，我也完全不懂，户冢的存在就是我的治愈!”

“嗯!不懂也没关系!”

“这个男人和那些家伙能不能想点办法……”

休息中，比企谷等人聚集在一起商量，材木座一个人坐在分开的长椅上。

一色也来了。

“当时虽然很辛苦，但现在看来，大家都是小孩子，难道你以为那种横着写的文字能蒙混过关吗?”

“反正你是高中生，到了可以把责任都推给大人的年龄，这次出了问题，最终低头的还是老师们，这样你掌握主导权就行了吧?”

“是啊，现在也不是做不到，不过大体都是一样的，下次雪乃前辈会决定的，否则就没有意义了。”

“嗯?我也不太清楚，原来如此，那么我今后该做什么呢?”

“不管怎么说，最终要做的事情应该是一样的。所以，事先悄悄地做好准备。请木材前辈帮忙。具体来说，就是订货、购买物品以及统计。和死前的工作比起来轻松多了吧?”

“工作的时候做报价接受订货什么的都很普通!交给我吧!”

“哇，什么?感觉我很帅很可靠吗?对不起，材木前辈我完全不是你喜欢的类型，绝对不行对不起。”

“嗯……太过分了……我觉得稍微表扬一下也不会有什么惩罚……”

“材木前辈的自尊心什么的根本不重要，再说了，周末大家应该会一起去迪尼斯乐园，在那里我应该会邀请叶山前辈告白，结果被拒绝。”

“你太残酷了，我的同学们都说得更严厉些……可是你也很为难啊。”

“嗯，这一切都是前辈的错吧?不过这次我不邀请叶山前辈，带户冢前辈来拉近和结衣前辈的距离吧。”

“真是个好主意啊，那你就加油吧，恋爱偏差值为0的我根本派不上用场，更何况知识无双状态下，我还得买我生前做过的股票、投资之类的……我还得去买预备买的东西。”

“你在说什么啊!你是傻瓜吗!这天前辈和雪乃前辈应该也会拉近距离的，我之前听人说过，两个人一起乘坐交通工具……嗯……算了!总之不想死的话，材木前辈也来吧，一起分担吧!”

之后和海滨的会议结束了，我们还是像生前一样去找平冢医生商量。

“你们好像不知道圣诞节是什么!”

又拿出四张迪尼兰的票。

“我在bingo大会中抽中了!他两次对我说，这样可以去两次!”

我无视同样泪目的平冢医生，抢了票。

“前辈们一起去吧?雪乃前辈有年票，不需要吧?”

“嗯?是啊，不过……你跟一色先生说过吗?对了，我一句都没说要去……”

在雪下拒绝，

“做了——先不说这个了，前辈、户冢前辈、结衣前辈和我正好四个人吧?”

一口气滔滔不绝

“啊、啊……你为什么这么有干劲?”

比企谷

“一色?我没有说要去……”

雪下

“嗯，想和结衣学长、雪乃学长一起去吧?学长也想给妹妹买礼物吧?”

一色点燃了由比浜和比企谷

“嗯?嗯，是啊!幸乃!我想和幸乃一起去。”

“诶?我说过妹妹的事吗?不过啊，是啊……让她选小町的礼物会很开心……”

“喂，两个人都……”

我转过身，望向困惑的雪下，在户冢耳边低语。

“户冢前辈，你知道《命运岛》里放烟花的时候是最适合告白的场景吗?”

“咦?是这样啊……”

一直沉默不语的户冢听了，也加入比企谷等人的行列。

“下雪了，大家一起去吧!我想知道更多关于大家的事情。”

“等等……连户冢先生都……没办法啊……”

看到那个握拳的一色

“为什么你这么有干劲?怎么回事?”

比企谷用诧异的眼神看着他。

“圣诞节的迪丁尼乐园，没有这样的机会怎么可能去呢?啊，5个人有点难以割舍，再带一个人去就好了!”

“什么叫不能整除啊···叫叶山吗?”

“那是当天的乐趣!”

一色眨了眨眼，走出教职员室，对蹲在门外听着事情经过的庞然大物说道。

“我听到了——那就拜托你当天不要迟到了吧?”

“请问，我的票价是多少?”

“你自己掏腰包吧。”

冷眼俯视木材座的一色

“什么这个JK好可怕，但是那种可怕会让人上瘾的……”

木材座颤抖着，

“哇，真是的!生理上真的不行，请不要这样，对不起。”

一色滔滔不绝地拉着木材座离开教职员室去商量当天的事情。

消失的未来 第6话

====================================

变成了desteland活动。

叶山没来，户冢参加，和材木座一色大奋斗。====================================

当日

“怎么又有你了?怎么是清一色的你的台灯?”

在一色身后像背后灵魂一样站立着的巨大身躯。

“胡文，你明白了吧!这就是学生会长大人的新手段!名字也是……”

材木座又要开口了，他打断他的嘴，

“这个人好大啊，在人群中很容易成为记号，也可以占地方，还可以拿行李，很有用呢。”

“有用……你和一色有什么交集?”

虽然比企谷还是不太认同，但看着渐渐决定站起来的木材座，他觉得再怎么想也没用，便不再说什么。

顺便说一下，其他人的反应

“是财津君吗?如果可以的话，能不能不要站在我面前?有可能看不到潘先生。”

“材木座你也来了，我很高兴!”

“初二……?”

只有由比滨歪着头，不知道想到了什么

“哗啦哗啦，大家走吧!”

意气风发地进入destinyland一色

一开始大家都在乐园里玩游乐设施，特别是比企谷，因为户冢在，大家都很高兴。

“前辈，你一直和户冢前辈在一起。”

“那倒也是，户冢大人已经把八幡交给了户冢大人，户冢大人也很喜欢八幡。”

“这个很难吃啊……完全不能缩短距离啊，得想办法啊。”

过了一会儿，雪下有些飘忽。

“幸乃，你没事吧?”

“没关系，我只是碰到人群而已。”

由比滨依偎在雪下，

“喂，学长!请帮我看看雪乃学长!”

一色拉着比企谷的手，使劲拉过来

“为什么会有我、由比浜呢?我和户冢……”

“不行!可以吗?如果只有雪乃前辈和结衣前辈的话，绝对会有以搭讪为目的的混蛋靠近，很危险!户冢前辈也会被误认为是女人，很危险!”因为我是最可爱的，所以尤其如此吧?所以前辈请避开搭讪，和雪乃前辈在一起吧!雪乃前辈也很好吧?”

“你为什么要若无其事地展示自己的可爱呢?”

令人吃惊的比企谷，雪下是什么?

“我没什么……没关系的……”

摇摇晃晃地坐在长椅上

“怎么看都没有问题啊!那就放这个大的吧?”

一色指了指身后仁王状的木材座。

“嗯，这个有点……”

在积雪下

“是吗?那就拜托前辈了。”

他摇摇晃晃地坐在长椅上，把比企谷推到雪下，

“嗯，我们先说了。”

“喂、喂……”

一色丢下两人，朝由比浜他们的方向走去

“这样前辈们就没问题了，应该和以前一样了，材木前辈就拜托结衣前辈他们了，我就回雪乃前辈那里去。”

一色轻轻地对着身后灵似的贴在身后的木材座说话

“我知道了。”

材木座这样回答后，就像被人群冲走了一样，慢慢地走向户冢。

“有点初二!看不清前方!”

“话虽如此，可这么多人啊……户冢大人!由比浜大人!千万不要离开!”

“咦?你这么说……”

困惑的户冢和由比滨

“牵手什么的有方法吗?嗯，那就和我牵手吧。”

当我把那只沾满汗水、滑腻腻的手伸出由比浜时，他的强烈拒绝反应

“啊!不行不行不行!阿彩求你了!”

“嗯……结衣，不要离开我!”

看着他们紧紧地牵着手，

“虽然知道，但这是怎么回事呢，胸口的痛，猛烈地痛……”

木材座让人热泪盈眶。

然后成功地让户冢他们逐渐离开一色。

一色是比企谷，在雪下

“百分之百!有什么东西走散了!”

“果然。”

“由比滨他们现在在哪里?”

在雪下拿出手机时，他狠狠地制止了。

“结衣学长他们去那边了!快走吧!我会联络你的，你一定要找雪乃学长，千万不要走散了，你明白这个意思吗?”

然后把他引向那个水上滑梯。

到了队伍的最后，当然，由比浜和户冢都不在

“好像没有，大概是先走了吧。”

“好像是啊，要不要联系一下?”

拿出手机联系木材座

“那边怎么样?”

“两个人手牵手，看起来都很开心，只有我不开心。”

“材木前辈开心不开心都无所谓。”

“伊吕波太残酷了，那八幡呢?”

一色回头一看，看见比企谷后面无助地排着队的雪下。

“唉，如果我硬要说这说那，反而会引起对方的反感，没关系，反正下次我说‘色吕波’，你就把他杀了吧?”

“好可怕!这个Jk好可怕!”

我无视木材座的呼喊，挂断了手机。

“结衣学长他们好像先上了车，结果刚下车，那辆大家伙就起了争执，我去吧?学长们请好好享受吧?”

从一色派的队伍中脱离，只剩下比企谷和雪下两个人。

“喂，你没事吧?”

“一色，你是什么时候成为那个人的监护人的?”

“没关系的，前辈们尽情享受吧，待会儿我们再会合吧?”

我把两人的声音移到后面，离开了那里。

烟花升起，欢呼声此起彼伏。

“材木学长、结衣学长他们呢?”

“你看，那里。”

人潮的对面是由比浜和户冢

“八幡他们呢?”

“为了不被打扰，我把他引导到适当的方向。可是，我想不起来什么。”

叹着气的一色

“总之累了，我已经受不了迪丁尼乐园了。”

“关于这点我有同感……”

看见户冢对由比浜说了些什么

而由比浜……

“怎么样了……?”

“那个样子……加丹姆!好像不行!嗯……”

用双手使劲挠头

“还是要在八幡摇好之后才行……”

不知为何，两人依偎在一起，好像在看游行。

“户冢大人是不是被甩了?”

“待会儿要接受调查……户冢前辈就拜托材木前辈了。”

之后全体人员会合踏上归途

一色在雪下悄悄耳语

“雪乃学长?照片拍得漂亮吗?”

“什、什么事?”

在红着脸变得形迹可疑的雪下，看来和转生前一样，他还是买了滑球时的照片。

“那我们在这里下车。”

destinyland的归来，户冢和材木座都下车了

“材木座君是这个吗?”

在只有两人的列车上，中户冢惊奇地问道

“户冢大人，我对恋爱很生疏，但因为是好朋友，所以想问问你，你和由比浜大人怎么样了?”

“咦?看到了吗?”

有些不好意思的户冢

“是不是被甩了?”

“喂，材木座君!偷听什么的，有点太狡猾了!···被拒绝是事实···有没有被甩?”

户冢断断续续地开始说

“我跟她告白了，她说我很高兴，但是由比浜还是喜欢八幡，雪下也很喜欢八幡，我绝对比不上那两个人，但是两个人都很喜欢。因为喜欢，所以把两个人搁在一边，只自己交往，感觉不一样，既然自己也喜欢上了，就要划清界限，等八幡明确地回答，解决了之后再回答，所以你再等等。”

“你的意思是保留?”

“是这样吗?八幡也很明确就好了，我也觉得雪下小姐和八幡很般配。”

“原来如此，不是被甩了吗?不过未来还不确定。”

“嗯?什么事?”

“不，这是我的事，明天还有个会议。”

“是啊，真郁闷。”

说着，户冢的表情比以前更高兴了

消失的未来 第7话

====================================

马拉松后保健室的那一集，只要是看动画片的人都会说:“八幡!雪下都行，去做!”谁都会这么想。不做的是八幡和雪乃。====================================

之后和海滨高中的会议和上次一样在雪下结束，圣诞活动顺利结束。

对一色来说这是第二次，因为他在背后扶着木材座，事情反而进展得很顺利。

问题是户冢和由比滨。

“若无其事地让八幡和雪下殿两个人做了各种各样的事，结果进展不大就结束了。”

“户冢前辈和结衣前辈怎么样?”

“很正常啊，就像你说的那样，八幡他们不来往的话，我们也不会有什么进展。”

“果然还是前辈不甩掉结衣前辈的话就没有进展啊……没有办法吗?”

“怎么说呢……嗯，比如说八幡不能清楚地告白的话，就会让人看到那样的状况，在爱情喜剧动画中，主人公和摩布只是在说话，女主角看了之后就会自动消沉。嗯……看着很难受。”

“哇哇……转世前的年龄也在看动画啊……恶心!大体上，让人觉得前辈和雪乃前辈在交往是不可能的吧，一直都是那两个人说相声，结衣前辈不也习惯了吗，更有像这样拥抱和接吻的地方……”

“对!通过邮购买药给前辈和雪乃学姐喝!对了!活动室里只有我们两个人!眼神交会的两个人无法抑制彼此的力比多!让结衣学姐看到这一点就一定会!”

他拿出手机，想打开某个可疑的网站。

“等一下等一下，你还正常吗?要是被老师发现了可就大事了，还不如像学生一样亲一下……”

“你觉得就算气氛很好，那两个人也会接吻吗?前辈，你太不喜欢了，绝对不行!这个时代网络法规还很落后啊!兴奋剂很容易搞到!”

“太吓人了……”

材木座也露出惊讶的表情

“啊?让联谊时感觉不错的帅哥若无其事地喝酒，制造既成事实，虽然效果很好，但不一会儿就会暴露。”

“肉食系女子好可怕……嗯?这么说来?”

材木座，想起生前和比企谷一起去喝酒时的话。

“确实……那是!好像是马拉松大会时的事，八幡在保健室让冰上女王治疗受伤时，气氛相当好，两人的脸偶然非常接近，那时绝对能接吻，眼睛一直对着，那个当时雪乃已经跟我唠叨了很久了，不过当时大概是由比浜在外面看到的，如果她做了什么，说不定由比浜就离开了。”

听了那个大吃一惊的一色

“就是这个!你要表现出你是真的在接吻!然后在你沮丧的时候，户冢前辈来了!”

“可是，你要怎么做?要让那两个人动心，可是比登天还难啊。”

他手托下巴，陷入沉思。

“从经验上看，我们一直对着对方的眼睛，只要有一丝一丁点，肯定就会就此打住。”

“经验上升……”

又是一脸无奈的木材座

“啊?是联谊时获得帅哥的技巧啊?实际上，这次你试了前辈几次了?”

“你?”

木材座投以诧异的目光

“我是乔丹，怎么可能这么做呢?首先，如果雪乃学长和结衣学长在未来都去世了，你怎么办?再说了，我要鼓励雪乃学长，你怎么办?”

“你真的在开玩笑?”

用怀疑的眼光看着的木材座，这时觉得只能相信了，于是开始考虑作战计划。

“嗯，八幡城也很扭曲，即使逼近雪下殿恐怕也不行。”

“是啊。”

“确实，那家伙有些地方出乎意料地差劲，我是他的盟友，所以很清楚，但说他差劲也改不了，必须站在第三者的角度，让对方觉得‘这家伙不行’。”

“怎么办?”

“然后是动画啊，好像现在这个时期有一部以这种烂片为主角的动画的DVDBOX，我买了那个给他看，让他觉得‘哇，如果是我的话就不会做这种事’，具体要怎么做呢?答案什么的一看就知道，不过……”

“不过?”

“如果连看都拒绝了，那就无能为力了。”

“那就简单了，用阿米就没问题了，只要是妹妹说的话，前辈几乎什么都听，说不定还会发生这样的事，所以在圣诞活动的时候，我们就交换了联系方式。”

就这样，作战计划得以实施。

事先一色联络小町说“哥哥交不到女朋友的原因是他太差生了，所以要让他看再教育动画。”休息日材木座一手拿着DVDBOX到比企谷的宅邸

“拜托了!”

“你还是那么烦，为什么非要和你一起看动画片呢?”

“不是挺好的嘛，八幡啊!好不容易买到的! ?当然想把他当成盟友了吧?”

“虽然我不喜欢，但是听了标题的小町说自己也想看，很喜欢原作……第一次听说。”

“这不是很好吗?妹妹也一起看吧!”

“如果你对小町动手，我就打死你吧?”

于是不情愿地把木材座搬回家。

然后放映开始

“喂，为什么主人公突然和女生独处?不奇怪吗?”

“喂，怎么看都是这个女生对主人公很有好感吧，为什么不交往呢?”

“喂，刚才的镜头怎么看都是以幸福的接吻结束的吧?这家伙也太软弱了吧?”

比企谷在每个场面都非常不满，主人公和美少女一起参加某个社团活动的故事，两个人都很差劲儿，怎么也传达不出自己的想法。

“大哥哥也不能说别人吧!那刚才的场景，如果是大哥哥怎么办?你和小町试试吧。”

“为什么要和你……好吧，看看吧?真正的男人是……”

和叫阿等的小町面对面对视

“……”

“……”

“……我喜欢……”

“……哥哥……我也……”

两人的脸慢慢靠近……

“等一下! ! !为什么兄妹之间的气氛这么好?禁断之爱之类的就不要说了吧!”

木材座在危险的时候撞了进来

“烦死了，我现在决定要活在和小町的爱里。”

“嗯，哥哥，你这句话对小町来说是点数最高，但对伦理来说是out了。”

小町扭动着身体，看起来非常开心，但作为木材座，却是非常困扰的状况。

“嗯，八幡!妹妹可不行啊!你还是拿这只猫来对付吧!我和妹妹给你评分。”

说着，他伸出在脚边徘徊的比企谷家的猫镰仓。

“对方是猫还是傻瓜?可是猫吗……猫……”

我抱起哼哼唧唧的镰仓，盯着他看，然后就僵住了

“嗯……好像想起来了……呵呵，好像很顺利。”

“莫非和哥哥在同一个社团?”

“嘘!不能这么说!”

不久，比企谷慢慢接近镰仓……镰仓逃走了。

“啊，小卡跑了! 0分，分数太低了。”

“八幡啊，让他跑了就是失职，一定要抓住他，不然等他跑了再后悔就晚了。”

“是啊!不能让他跑了!机会一定要抓住啊!”

“到底要对镰仓做什么……”

“好了，总之要好好抓住!好啊!”

“是啊!中二先生说得没错!那个时候要紧紧地抱紧她哦?啊!就像刚才的台词小町一样加分!”

“你到底在说什么?”

困惑的比企谷

“那我们继续看吧!妹妹!喝点饮料!”

“明白了!”

“什么?你们为什么关系这么好?”

结果直到最后，比企谷都在看那个糟糕的主人公出场的动画片，看的过程中，他的感想一直很不满。

几天后，一色请求叶山放学后找个合适的理由约她去玩，叶山虽然有些疑惑，但也没多问，就邀请由比浜放学后去玩，比企谷那边则是材木座。因为是用冢约出来玩的，现在服务部只有雪下一个人。

“你好——”

“欢迎光临一色小姐，有什么事吗?”

雪下一如往常地迎面而来。一色把坐在雪下附近的椅子靠过来，说道。

“雪乃学长，我有喜欢的人。”

雪下对这句话的反应是

“我在考虑下次要不要跟那个人告白。”

凝望雪下的眼睛的一色

“雪乃学长有这样的人吗?”

雪下视线突然向下

“就算有这样的人，也不会顺利的。”

“为什么?”

“因为我知道，喜欢那个人的人除了我以外还有，和我不一样，开朗，有活力，像太阳一样照耀着大家，和那个人相比，我……”

“真的可以吗?你真的想要那种虚假的感觉吗?你不是想要真正的东西吗?”

被“真的”这个词吓了一跳的雪下

“雪乃学长，我是真心要去取我喜欢的人的。我知道那个人现在并不朝向我，但我一定会花时间让他回头的，不管用什么手段。”

雪下低着头什么也不说

“好吗?机会是绝对不能错过的!想要的话就不要想太多，要好好抓住!否则就会失去一切，大家都会变得不幸……”

“你这么说我也不懂……”

雪下吐出似地说

“很简单!盯着对方的眼睛，告诉他自己的真实想法，但不移开眼睛，这才是正确的!抓住对方不让其离开，用行动来表现!”

一色站起身，把手放在房间的门上，

“选错了可不行，选错了到时候……”

说完，一色走出了活动室。

消失的未来 第8话

====================================

由比滨告白，然后被拒绝。这就和一色与叶山划清界限一样。

原作中，我也想过一定要坦白八幡，但因为不是最能坦白八幡的人，所以故事才会变得有趣，也正因为如此，才会有一句都没说喜欢的告白场景，续集中由比浜和一色都很不错啊。好像是出去的感觉。====================================

几天后，三浦来服务部咨询。

还是和生前一样，想知道叶山的去向。

同样举行了马拉松大赛，结果也完全一样，比企谷倒数第一，叶山夺冠。

不同的只是那里没有一色。

在哪里呢……

“前辈刚刚进保健室了。”

“这里是阿尔法，确认目标1、2。”

一色从走廊拐角监视保健室的门，在外面，一只手拿着望远镜，一只手拿着对讲机，一只手站在树荫下，从窗户监视保健室。

雪下现在正在保健室，比企谷正好进来。

“这里是阿尔法目标1、2在现场接触。”

“知道了，啊，结衣学长刚刚来了，他正在门缝里偷看呢。”

雪下为比企谷做护理时，由比滨来到保健室门前，悄悄观察里面的情况。

“那个……那个阿尔法啦目标啦太麻烦了，要不要放弃?”

“你说什么呢!这样很酷吧!”

“嗯，也请为交往的人着想啊……比起这个，里面的情况呢?”

“胡文，正如情报所示，目标1、2互相凝视着对方，身体僵硬。”

“结衣前辈也完全停了下来。”

保健室里，雪下和比企谷互相望着对方。

凝视着对方的两个人，不约而同地伸出双手，当那只手碰在一起的时候，就这样把手交缠在一起。

“……比企谷君……”

“…………幸乃……下……”

“目标1、2双手交缠……”

“教育好像有成果了。”

和前面的时间轴不同，根据木材座和一色教育的成果，在不能松开对方的想法支配下，两个人都想把双手伸到对方面前，但是却碰到了对方，然后就那样双手互相缠绕，慢慢地拉开。凑在一起，结果就是彼此的脸慢慢地靠近了……

夕阳照在保健室里，两个人的影子完全重合在一起

由比滨从保健室的门缝里一直看着，他后退了一步，

“…! !”

低着头慢慢地离开了那里

“结衣前辈要离开你怎么办?”

“知道了，跟踪目标3，传唤目标4。”

一色悄悄地跟在由比滨身后，刚好坐在自动售货机那里。

“结衣学长在自动售货机附近坐下了，周围一个人都没有。”

接到通知的材木座立刻联系户冢

“啊——喂?是我是我，对不起，能帮我去买果汁吗?钱以后再付，所以服务部的教室里现在没有人，拜托你帮我拿到教室里来。”

接电话的户冢

“嗯?嗯，可以吗?”

“慢慢来就行了，慢慢来。”

材木座说着，再次用望远镜观察保健室内。

“···咦?好像吻得很激烈了···再这样下去会有点糟糕的，快住手!现在马上!”

“真是太照顾人了……”

一色故意用力敲保健室的门，

“锡利莱斯，咦?前辈们在这里做什么?颁奖仪式都结束了啊。”

白闯一场，成功阻止了雪下和比企谷的好感进一步升级。

由比浜那边的话，受材木座的联络来买果汁的户冢理所当然地发现了由比浜。

“咦?结衣?你在那种地方怎么了……! !结衣你怎么了!你在哭吧!”

“阿彩……对不起，没什么……”

“总之换个地方吧!”

户冢拿出手机，

“不好意思，材木座，下次再喝果汁可以吗?我都抽不开身了。”

户冢说

“结衣，走吧，材木座说活动室现在没有人……”

我把他带到义工部的活动室。

一色躲在走廊的角落里看着我，

“哦，情况到此结束了吧?”

这样告诉材木座。

“要是能这样就好了……明天以后吧。”

是不安的木材座。

第二天的服务部

“由比滨呢?”

“还没来呢，好像和户冢去什么地方了。”

“终于被讨厌了吗?”

“不···本来什么都没做···昨天很普通···”

说“昨天”这个词的比企谷，想起昨天保健室的情形，吓了一跳。

雪下身体僵硬地凝视着比企谷

然后两人僵在一起，

“拜托了，八幡!”

“你好，雪乃小姐，我来喝茶了。”

木材座和一色进来了

“我每次都在想，你们之间有什么联系?”

“那不是很好吗?对了，结衣你呢?”

“还没来呢，和户冢去哪儿了。”

正在吵吵嚷嚷的时候，活动室的门砰的一声打开了

“希基，我有话跟你说，你过来一下。”

由比浜走到桌子下面，用认真的眼神说，户冢也认真地跟在后面。

“喔、喔……”

比企谷就那样吧嗒吧嗒地向雪的下方移动

顺便一提，一色和材木座嗖的一下移动到房间的一角，看着事态的发展。

“希基，我喜欢希基，请和我交往吧。”

“什么? !”

被突如其来的告白震惊的雪下与比企谷

“由·由比滨?”

雪下战战兢兢地望向由比浜

“什、你在说什么啊···”

眼神游移的比企谷

“希基，我是认真的。”

笔直望向比企谷的由比浜

“看来终于开始了。”

“是啊，事到如今，如果你还想敷衍了事，那我就揍你一顿。”

“我也同意……”

一色和木材座在房间的角落里嘀嘀咕咕地说话。

“哦，你这家伙太奇怪了……?稍微冷静一下……”

惊慌失措的比企谷

“比企谷?……”

雪下瞪着比企谷

“……”

比企谷沉默了一会儿，眼神飘忽不定。

“···斯曼··不能和你交往···”

发出挤出来的声音

“为什么?把理由告诉我啊希基。”

“我……喜欢……雪下的事……告白……所以……我和你……”

睁大眼睛的由比浜，这次要问雪下

“幸乃真的吗?”

“···对不起···由比滨···真的··对不起···”

雪下也低头不看

“太好了! ! !”

提高嗓门的由比浜

那个?两个人抬起头，露出这样的表情

“为什么两个人都道歉?两个人都传达了彼此的心意吧?太好了!两个人都坦诚相待!我真的很高兴!”

然后扑向他们，抱住他们的双手

“雪农和希基我都很喜欢!…但是…今天…要回去了…”

由比浜的声音越来越小

“喂，你没事吧?”

“好、没关系……我回去了……希基，谢谢你。”

由比滨离开两人，摇摇晃晃地走出活动室

“结衣，你气鼓鼓地说要划清界限，八幡，很有男人味。”

一直在身后默默注视的户冢说着，跟在由比滨身后走出活动室。

“我知道……果然是这样啊。”

一声叹息袭来的一色

“啊?怎么了?”

“没关系，我也失恋了，结衣你明天来吗?”

“啊?怎么回事?比起这个，八幡他们呢?”

仔细一看，雪下和比企谷两人都不发一语。

“把玛和交给两个年轻人就回去吗?”

“是啊，我觉得还是不要说多余的话比较好。”

说完，材木座和一色悄悄地走出了活动室。

第二天，我和清一色的木材座一起去看情况，打开房间的门，

“啊，伊吕波，你是初二学生吧!”

“结衣学长，我是罗。”

“什么?为什么要前后坐着木材座?是训熊师吗?”

和往常一样的比企谷，似乎完全消除了芥蒂。

户冢也哈哈大笑

“总之可以放心了吗?”

“嗯，接下来是户冢前辈的转弯，没问题吧?”

看着高兴地说着的4个人，两个人放心了。

几天后，有传言说户冢和由比滨开始交往了。户冢在女生中很受欢迎，在男生中也有相当高的人气，虽然也有一部分人表示嫉妒，但由比滨是最上层社会的一员，交友关系也很好。也流传得很广，两个人都没有什么不好的传闻，也没有人抱怨他们是很般配的一对。

消失的未来 第9话

====================================

谁都会想，如果能带着现在的知识回到过去的话。

例如，比特币最初以1比特1日元的价格在秋叶原免费发放。

我经常想，如果当时买了10000日元的东西，现在就好了。

我还想了很多其他的事情，大家觉得呢?

====================================

一天放学后，材木座把一色叫到校舍后面。

“为什么在这么没有人气的地方……怎么可能!终于想要用武力占有这个可爱的伊吕波···请制止我大声喊出来哟?告白什么的真的是不可能，材木前辈已经不可能存在了对不起!”

全身散发着拒绝的气息。

“为什么你总是这么刻薄?比起这个，你是不是忘了我们的目的?”

胆战心惊地说话的木材座

“啊?我没有忘记吧?一切都很顺利吧?这样下去不就没事了吗?我想好好享受花女高中生的乐趣，就告辞了吧?”

一副想赶紧结束回家的样子

“不，等一下，那家伙忘了说什么了吗?如果未来确定了就放回去，那我们为什么还在这个时代?”

“大概不久就会回来吧?”

一色又要离开，我抓住他的手臂，

“你不是说让我等着吗?那家伙不是说即使无法修正也要恢复吗?未来不是还没有决定吗?不是又和八幡他们毁灭我们死亡的同样的未来相连吗?”

“好痛啊!”

“啊，对不起。”

放手的木材座

“真是的，要是被人看见了怎么办?明天开始，材木学长就不在学校了。”

“哇!”

“如果不管的话，也许不久就能回到未来，这是事实……”

“我也是这么想的，但看了时间题材的动画后发现，动画会重做很多次，我们没有机会重做，是不是有点不好吃?”

“听你这么说，也许是吧!前辈跳过了交往的部分，直接从接吻开始了。也许是男女交往，两个人都不知道。”

“我的意思是，那两个人很重视效率，绝对不会因为有空就约你出去玩的。”

“啊，是啊，所以记得很辛苦……户冢前辈好像也很客气呢，就这样什么都没有的状态下毕业的话可能会自然消失……真难吃啊。”

“是吗?能不能想点办法让八幡他们表现得更自然、更亲密呢?”

“那就是尽量拉近前辈们之间的距离，具体来说就是一起玩，就像叶山前辈他们做的那样吧?”

“啊!你是说让我和八幡做现充?”

“充满了现实……”

一色把手放在额头上叹了口气

“总之，只要把气氛带成一起做什么是理所当然的，就不会觉得别扭了，还有，和材木前辈也没关系吧?”

来讨论具体的计划。

“首先，要拉近距离，我觉得还是约会吧。”

“方法”

“放学后一起喝茶吗?还是去玩游戏?”

“原来如此。”

“那么问题来了……”

一色用拇指和食指捏成圆圈

“钱。”

“啊，八幡他们没有那么多吧?雪下殿家里有钱……”

木材座说，

“你是傻瓜吗?为什么要让女孩子掏钱?”

“就算不愿意，大家都没钱吧，高中生又没打工。”

的木材座上

“啊?不是有材木前辈吗?”

一色指着木材座说

“知道啊，材木前辈，说赛马有有名的大洞，隐瞒年龄往马券里投……是什么来着?死前流行马娘吗?我的公司里也有人沉迷于此，说过去的赛马比赛如何如何?”

“呜呜!可是，这些都被父母发现了，全都被拿走了?手边……”

“那也是骗人的吧?比特币啦?股票啦?我知道你在教室里夸耀自己用父母的名义玩了各种各样的游戏，幸好大家都不知道是什么意思吧?要是知道就被揪了起来。”

“因为我死前被人对待得很过分!朋友也只有八幡，很想炫耀!”

“至于材木前辈悲惨的过去，我倒不去管他，但我会同时制造一个借口，说作为封口费，请你支付前辈们的约会费用，然后通过网上有奖抽奖，中了卡拉ok和咖啡店的券。”

“格努，虽然理解，但是在这种地方被剥削……”

“前辈们花钱一点都不大手大脚，对现在的材木前辈来说，约会的钱不是不少吗?那就请六个人的吧?”

“啊?为什么?八幡他们不是四个人吗?”

“为了不出什么意外，必须监视他们啊!材木前辈可是关键时刻的钱包。”

“结果不是被揪着不放了吗?今后的行情也不一定会一样。”

虽然木材座总是让人失望，但那天之后，放学后和放假的时候，六个人一起去玩的次数变多了。

最大的问题是八幡，因为已经把小町抱在了一起，所以找了各种各样的理由成功地把小町带了出来。

消失的未来 第10话

====================================

户冢是个很能干的孩子，他是体育会出身，这点能力应该绰绰有余====================================

“我一直在帮她约会，却从来没有送她去，她是个什么样的孩子呢?”

一天放学后，在服务部的活动室里，木材座小声地发牢骚。

比企谷他们四个人似乎聊得很开心。

材木座微妙地与4人分开坐着，一色也坐在能混在对话里的位置上。

“是啊，情人节快到了，可能得搞个活动了。”

“啊，情人节啊……好像是川崎大人的妹妹来了，好可爱啊……”

“啊?萝莉控也请随便对待，对那么小的孩子纵情犯罪就判死刑，真的很恶心，对不起。”

“谁都没说过这样的话吧……什么活动啊，什么毕业舞会啊?我都累坏了。”

“他说要快进，要走哪条路呢?”

“虽然比在公司工作轻松，但也太懒了。”

和阿等说话的时候，三浦来到了服务部

“我想亲手做巧克力……”

“不是说过优美子手工制作很重吗?”

“呃?不……是这样的……”

的时候川崎也同样登场了，但是三浦和川崎还是不合拍。

“啊?是我先说的。”

“啊?你只是在喝茶嘛!”

“对了，你也给谁送巧克力了?我接受——”

“那个，我不希望你和我在一起!”

“什么?”

“啊?”

三浦和川崎互相瞪着站了起来，却被强烈的声音打断了。

“你们两个!要吵架的话，你就出去吧!”

发出声音的是户冢

“喂，户冢……你是那种角色吗?”

吃惊的三浦

“你们两个不是想教我巧克力的做法吗?要是吵架我就不帮忙了。”

用强硬语气穷追猛打的户冢

“是啊，刚才挑衅的优美子不好。”

由比浜也用坚定的语气责备三浦

“到、结衣……”

一口气缩小的三浦和川崎

“对不起……”

“我也……对不起。”

“你们两个人都不能吵架啊。好，我听你说，好吧，结衣?”

“嗯，我希望优美子和川崎都能好好相处!”

又开始商量了。

“户冢前辈会说那种话吗?”

一色和材木座站在桌子边上，材木座盯着户冢看。

“……莫非这是神? !”

“神?那是什么?”

“你看，那两个人脸上带着信赖的表情，那是历经千锤百炼的战士的脸，也就是两个人已经登上了大人的台阶的证明!就是那个，那是什么?”

“是吗?真的吗?”

一色注意到自己正在往户冢和由比浜的方向看

“···普通地在长桌下面互相握着手呢，牵得很紧哟，光这一点就知道了。”

“比我们还早长大，真是颜面尽失啊。”

于是情人节的活动就开始了。

和上次不同的是，雪下认真地把巧克力递给了比企谷，而阳乃却什么都没有。

“是的!这就是我对大家的感情!”

由比浜制作了巨大的巧克力块。

“这是什么井盖?”

“这是怎么做出来的呢……”

“结衣是不是有点太大了?能吃吗?”

“没关系!如果有剩余的话初二的人会给你吃!”

是笑眯眯的由比浜。

我在比企谷的后面思考该怎么吃

“真的吗，血糖值没问题吧?”

“材木前辈，现在这个年龄吃什么都没问题，怎么也不会胖，真是太棒了。”

清一色的木材座。

消失的未来 第11话

====================================

水族园活动，这里不是水族馆而是公园。名字叫葛西临海水族园。

材木座和一色的作战成功了，再次遇到谜的存在快进到未来…====================================

今天是总武高中考试的休息日，所以材木座睡得很晚，就在他睡懒觉的时候，手机来了

“您好……我是〇〇商事的材木座……今天休息……”

我睡眼惺忪地接起电话，

“材木前辈，辛苦了!请快点去车站!”

来自一色的紧急联络

“嗯?我刚才在某论坛上做贴子战斗非常困所以来了···厨房一起回头看···mobile套装的性能的差别···”

“啊?你在干什么?傻吗?快起来!”

“真的很吵……到底发生了什么事?”

从床上爬起来的木材座，看了看手表

“不是才上午吗……”

我想睡回笼觉，

“我忘了!前辈们今天!说要互相委托!我死前听雪乃前辈和结衣前辈说的!这是雪乃前辈为了家里的事下定决心的日子!是超重要的日子!快来吧!”

又从一色发出相当焦急的声音

“娜娜娜娜!你还不快点说!”

扑通一声跳起来的木材座

“我很想睡觉，虽然很难过，但这是一场战争。”

说着某高达的名言换衣服的时候，当然不会忘记长外套。

啪的一声换衣服

“义辉一命!”

是在下雪的路上冲刺的木材座。

但是马上就累了回去走，这就是木材座品质

在车站

“为什么是你呢?”

碰头地点集中在比企谷、雪下、由比浜、户冢。

然后是稍晚到来的一色，当然，这背后是

“我来!”

和某骑士的台词做着决定姿势的木材座。

“不好意思，我跑着跑着就跟来了，是这样吗?”

依旧是笑容满面，

“好像吗?不是的，你可要小心，这都是跟踪狂。”

“应该只叫一色先生的……”

面对他们的疑惑，

“啊，八幡?材木座你也一起去不就好了吗?多的人会更开心!”

户冢一脸不情愿地跟在比企谷后面。

就这样大家一起移动，在队伍后面的对话

“我真的可以来吗?”

“要是有什么不正常的事，就得帮忙啊!你是想推给我一个人吗?”

“目的地是……临海水族园?但是去之前就是那个，有必要我们去吗?没有什么问题吧?”

木材座指着的地方

“阿彩喜欢吃什么样的鱼?”

“我喜欢鲨鱼吗?它看起来很强壮!”

“我喜欢三文鱼。”

“比企谷，那不是寿司吗?”

有四个人在和阿等说话。

“···是啊···能了解大家的关系不是很好吗?”

“……我可以回去了吗?”

“不行，现在回去不就太可疑了吗?还有入园费吗?木材前辈?我只能靠前辈了。”

如果这是学生时代的材木座的话，那简直就是我们这个世界的春天了，恨不得把钱包都给他，可惜里面装的是大叔。

“哎呀呀，性格这么好的直主……好了，这是零用钱，收下吧。”

材木座稍稍冷静地露出惊讶的表情。

在水族园内，四个人还是很兴奋的，在有企鹅的地方仔细地看解说。

“那些家伙为什么僵在那里?”

“我看到你的说明了……你说洪堡企鹅的伴侣会一直陪伴到死……”

“原来如此，我终于理解他们的行动了，看啊，我已经忍无可忍了。”

一色抬头一看，雪下的比企谷正幸福地依偎着由比浜和户冢握着双手亲热得不得了。

“我也想回去了……”

走到外面就是由比浜

“坐摩天轮吧!”

和大家一起前进，慢慢跟上的木材座和一色

“喂，再跟他们在一起不就已经是拷问了吗?年轻人的恋爱成分已经把三十岁的精神剜去了……”

木材座说，

“是啊……已经不可能有分手或者往坏的方向发展了……”

一色把手机放到耳边，

“啊——喂?哎!真的? !啊——这是我想要的东西——”

然后大声说，

“不好意思!我很想要一件衣服，朋友告诉我现在在限时打折，我就去买了。剩下的就请大家多多关照了。”

和脱离了。

“喂!”

材木座小声叫着，我不知道该怎么办才好，只好模仿。

“啊，我们什么人!面子不够? !那就交给我吧!”

假装打电话。

“我也被游戏中心的伙伴召唤了，我必须奔赴战斗之地!不要阻止我，八幡啊!我从此成为阿修罗……”

我想要热情地解释，

“那就木材座吧。”

“材木座，再见吧?”

比企谷和户冢爽快地说分手

“总觉得……心好疼!”

木材座上流着泪，逃也似的离开了那里。

去车站的途中有来电

“材木前辈?请您请客，我累了。”

一色，离开比企谷后，两人会合走在路上。

“说实话，我精神上也累了，总想要温暖我，从内心温暖我。”

“说得有点难听，就这家咖啡店吧!”

两人走进咖啡店。

正好那个时候比企谷他们从摩天轮下来，互相传达着委托。

“我的请求是……全部都想要!小彩、希基、幸乃!”

大家互相点头

“绝对没问题!这四个人什么事都可以!永远在一起!”

然后在雪下做最后的委托。

“谢谢，我的请求是……”

咖啡店里人还算多。

“真累啊。”

“是啊。”

两人趴在桌子上互相发牢骚。

过了一会儿，脑子里响起一个声音

“绝对没问题!这四个人什么事都可以!永远在一起!”

“你说什么了，主人?”

“不……好像听到结衣的声音了?”

两人面面相觑，同时

“咕咚。”

好像切换了什么大开关的声音，同时咖啡馆里没有了人，刚才还在吧台里的老板面无表情地站在旁边

“怎么可能!你这家伙!”

惊人的木材座

“恭喜你，未来已经朝着你们所希望的方向改变了，那么我就要付出代价了……”

感觉有什么东西从身上倏地溜走了

“……这么说来，我没听说代价是什么吗?”

老板露出瞧不起人的表情

“事到如今再问有什么用?而且迟早会知道的，那我就回到未来吧，时间快进，就在你们相遇的那个时间，放心吧，死的未来已经消失了。”

话音刚落，两个人就感觉脚边崩塌，坠入了深渊，顿时失去了知觉。

消失的未来 第12话

====================================

成功地改变了过去的材木座和一色，谜一样的存在让快进到原来的年龄发生了麻烦。

接下来是R18。

====================================

材木座醒了。

“陌生的天花板。”

说了约定好的台词，才发现自己在医院里

“回来了吗?八幡他们怎么样了?”

旁边站着一个护士，她一动不动地站着，周围的气氛也很奇怪。

“莫非!”

“对了，就是我，就是把你们送回过去的那个人。”

还是面不改色，只是嘴巴在动

“糟糕的是无法取得整合性，你们所期望的未来正在进行中，却出现了问题。”

“你是说代价吗?”

“不是的，我已经得到了，另外，我的愿望是否实现了，需要你们自己去确认，所以我才稍微加强了联系，以免彼此分离，这样一来，我们就完全无法整合未来，只推进了几年。没能做到。”

“真是多管闲事……”

“那是当然的，自己不看的话，就不知道自己的愿望是否实现了，如果不知道结局的话，那就不能算是实现了愿望，但是这是在计算之外的，到现在为止的时间里，你和那个女人的人生。发生了很大的变化。没想到会有这么大的变化。”

“那个女人?一色殿下?到底怎么了?”

“对不起，为了道歉，我让你生活上不那么困难了，你就随便吧，你好像做过投资吧?”

“嗯，确实做了很多事……不过，能告诉我发生了什么吗?”

“我已经帮你赚了不少钱，你就放心吧。那么，我们就对从那时到现在的记忆进行整合，强制重写记忆，只是不会马上改变，会慢慢回想，这样就不会产生混乱。”

有什么东西一下子钻进脑袋的感觉

“真的发生了什么?不，比起这个，高压的说话方式、美好的记忆和时间，真正的主人是谁?”

“虽然很难解释，但是你们都被人说成是神或者是恶魔，如果想感谢的话，去寺庙或者神社参拜就可以了，发生了什么马上就能明白，对一般的男性来说应该不会有什么损失……所以，剩下的加油吧。”

说完，护士保持着直立不动的姿势滑出病房。

紧接着，喧嚣和周围的人又恢复了气息，比企谷和户冢和自己的父母一起走进病房。

“能来探病，真是太感谢了。”

“不，义辉是我的好朋友，我还有一个朋友在这家医院，所以就顺道来了。”

因为事故的关系，记忆变得模糊，听了很多话，才知道自己和以前一样，是为了救冲到马路上的一色而被流行的车撞倒的。只是这次情况不同，车的刹车合了。没有那么严重的样子，好像只有住院检查的程度。

和比企谷他们说话的时候，一色出现在病房入口。

“我去借一下材木学长!”

“喂，一色，你没事吧?雪乃和结衣应该去过那里……”

一色不理会比企谷的话，拉着木材座走出病房，拉进同一层的患者专用谈话室

“对吧?那个奇怪的人来了，说了一堆乱七八糟的话，然后说要重写记忆，然后就醒了。”

“我这边也来了。”

“等我醒来，雪乃小姐和结衣小姐就来找我了。”

“是、是啊，刚才八幡……”

打断了木材座的话，

“然后呢?雪乃小姐带着花来探病，说了句‘我换花’，拿着花瓶就出去了，就剩下我和结衣小姐两个人了。”

“哈、哈。”

“只有我们两个人的时候，你觉得结衣说了什么?”

“什么?”

“听说‘伊吕波酱和中二在交往吧?’!”

“什么?”

“虽然不知道事情的原由，但是我们是秘密交往的吧?没关系，我不会告诉任何人的，我会支持你的。因为我们从高中开始就经常在一起，所以我知道的!”如果有困难的话就来找我商量吧?’被这么一说，至今为止的记忆一下子就苏醒了! ! !”

一色抱着头开始用头槌咚咚地撞墙。

“这段记忆是真的吗?材木前辈，你也回想一下吧!”

“话虽如此……他也说记忆是慢慢回想起来的感觉。”

“那就让我想起来吧!春假!旅行!旅馆!偷窥!”

听到这句话，当时的记忆开始在材木座的脑海中闪回。

“啊?哇，这是真的吗?真的吗? ? ?”

材木座也很头疼，当时他们到底干了什么

“毕业典礼已经顺利结束了，现在就要考试了，在那之前去旅行怎么样?两天一夜左右。”

春假前夕，服务部活动室的户冢这样提议

毕业舞会似乎最终举行了

“啊，也许不错!幸乃和希基怎么样?”

和由比浜

“旅行就叫毕业旅行吧。”

比企谷很麻烦，

“啊?我想去啊?我很想和比企谷一起去。”

雪乃的话

“好，走吧，地点在哪里?”

突然拿出干劲

“一色和材木座怎么办?”

一色是为了和雪乃、结衣聊天，材木座只是不想被吸引，所以才待在那里。

最后决定6个人一起去，是出远门观光，傍晚住温泉旅馆的两天一夜的旅行。

在观光的时候，比企谷的人非常热烈，相反一色和材木座一边看一边说。

“不能接受别人的恐吓，是新手段的拷问吗?”

“不要抱怨，这样本来就可以了。”

两人的情绪都很低落。

傍晚，在旅馆办理入住手续时发现了问题，没准备好饭菜。

“对不起，我马上准备。”

一个劲地道歉的老板娘

泡完温泉后，晚饭吃得很晚，但问题又被发现了，旅馆方面慌乱之下，把含酒精的饮料拿来了。

比企谷他们不习惯喝酒，所以完全没有注意到

“好好吃!这是我没喝过的味道!”

“是啊，味道很奇怪……”

当木材座和一色注意到的时候，已经喝光了。

“糟了，这是加了酒精的鸡尾酒，大家都喝了。”

“哎!只能让他们喝各种软饮料和饮料来蒙混过去了!···八幡!听说这个可以随便喝，不快点喝就亏了!”

“啊?真的吗?户冢你也快喝，我们再来一杯。”

“嗯!”

比企谷和户冢一口气喝完。

“可以吗?我们只点菜单上的饮料，这里不行。”

材木座递过菜单。

但难吃的是，这家旅馆的饮料大多是原汁原味的，一眼就看不出哪个是含酒精的。

因此，原本以为材木座指示的软饮料也掺有酒精。

本来，含有酒精的菜单是不会给未成年人的，但不幸的是，某个大学的社团也来住宿了，焦急的旅馆方面变得混乱了。

当然，大家都微醺了。

比企谷他们的身体接触特别多

“好像有点困了。”

“是啊，我好像也有点累了，要不要早点休息?”

“嗯，夜从现在开始啊……一起玩吧……”

“结衣你摇摇晃晃的，我可能也有点累了……”

房间是男女分开住的，隔壁有两个房间，只是用隔扇隔开，难得有机会，就像修学旅行一样挤在一起睡吧，在同一个房间里铺了所有人的被褥。

四个人拉开拉门，扑通扑通倒在隔壁房间的被子上。

虽然身体是高中生，但实际上是三十岁的材木座，当然不可能只喝点酒精就满足，对比企谷他们说再去洗一次澡，然后就离开了房间。

“不能喝这么多酒，我还能再喝一点吗?楼上好像有酒吧，我说我是大学生应该没问题吧，我又长了一张老脸。”

“……那就随你的便吧，我泡完温泉一个人喝。”

分开行动，这让我很不舒服。

回来的木材座发现铺着被褥的隔壁房间的拉门关着

“嗯，好像黑漆漆的，睡觉的时候要是有人踩到就糟了。”

在吃过饭的房间里，我从壁橱里拿出毛毯，没仔细看比企谷他们的情况就睡着了。

消失的未来 第13话

====================================

只有这次R18展开。

大家一起旅行，在那里无意中发生的R18展开。

被一色挑衅的男人没有不反应的吧。====================================

躺了一会儿，从隔扇隔开的隔壁传来什么声音，在一片漆黑中醒来，只见一色趴在枕边，从隔扇的缝隙里往旁边看。湿漉漉的头发和不知从哪里喝来的酒，微微泛红。做的样子格外娇媚

“你在干什么?”

的木材座上

“请安静!”

一色一边窥视着隔扇的另一边小声提醒道。

木材座在看什么呢?

“失礼了。”

我跨上一色，从头顶往里看。

一色似乎在拼命往旁边看，什么也没说。

由比浜和户冢赤身裸体地纠缠在一起，旁边比企谷和雪下也赤身裸体地纠缠在一起。

“啊?真的是这个?”

漆黑的房间里，户冢每次戳到由比浜结衣的胸部，月光下由比浜结衣的胸部就会剧烈晃动。

雪下的她依然长发飘飘，腰肢摆动，连我都能听见她的喘息声和呼吸声。

“哇!结衣小姐和雪乃小姐都好性感啊!”

四个人看了一会儿，开始交换位置，这次是比企谷由比浜和户冢在雪下纠缠在一起。

“啊?真的吗?那个叫互换的家伙?”

“他好像在说‘我被甩了，却这样和希基色情，真不可思议’，为什么会变成这样，一切都很不可思议，难道是酒的关系吗?”

“户冢前辈说‘雪乃小姐最近对八幡的语气有点严厉吧?有必要压一压吗?’户冢前辈是那种角色吗?”

“喝酒、不纯异性行为、滥交，你就out了，人生就要结束了，那个时候不喝酒的话……是我们的责任……”

木材座和一色的人在争论的时候，隔扇的另一边变得更加热闹了

“结衣前辈和雪乃前辈开始接吻了，大家好像都僵住了……好色情啊……怎么说呢，这不是很危险吗?”

“……”

材木座无法回答。

从位置上看，他跨坐在一色上，从隔扇的缝隙里窥视着，但眼前的景象让木材座的下半身也产生了反应，想动也动不了。

虽然弯下腰，但还是被一色发现了。

“那个木材前辈?我的屁股碰到硬硬的东西了。”

“那也没办法，啊，让你看那么色情的东西，你还能冷静吗?真是岂有此理!”

“是吗?”

一色转了一圈，仰面朝天地面对着横跨在上面的木材座。

“明明是三十岁的人，却因为看到高中生的色情而兴奋，这不是很可怜吗?”

一色坏心眼地说着，眼睛稍微抬了抬，尽量凑到材木座的耳边。

“义辉前辈?我记得那个年纪还是素人童贞吗?不害羞吗?真的是小杂鱼吧?呵呵，下面的也是小杂鱼吗?”

他开玩笑地说了一句挑衅的话，但这是不对的。

一直在一色上一起从隔扇的缝隙里窥视隔壁的木材座，隔壁的状况，再加上闻着从一色上飘出的洗完澡后的清香，使我的理性变得相当跳跃。

他那泛着红晕的表情，微微裸露的浴衣，年轻得几乎要打水的肌肤，这些都映入眼帘，再加上刚才的挑衅，在酒意未醒的木材座上，有什么东西咔嚓一声断了

“都是你的错，傲慢的JK，让你明白……”

就那样抱起一色离开拉门，堵住了胡闹的一色的嘴，就那样把她推倒在地，打开浴衣就那样开始强行侵犯

“等等!都是我不好!嗯!啊!等等!材木前辈，冷静点!要做的话就更温柔一点……”

无言地贪婪着一色的身体的材木座，从隔壁房间传来的喘息声和压抑着声音喘着气的一色的身影加速了材木座的行动。

十几分钟后

有跪在地上的木材座和盘着腿坐在桌子上俯视的一色。

“有什么借口吗?”

虽然声音很小，却散发出可怕的杀气。

“我知道是你的错，但挑衅的你也不对。”

“是啊，不过，为什么第一次遇到这样的男人呢?要是和前辈在一起就好了。”

“那你现在也要来吗?顺便我也想扑向由比浜大人的胸部，JK最棒!”

两个人都小声地说着话，所以隔壁传来的喘息声听得很清楚

“哇，恶心!真的想死吗?刚才还对我的身体肆意妄为的是谁?傻瓜吗?大体来说，如果怀孕了，你会怎么负责?”

“你也知道，我利用以前的经验，投资了股票之类的东西，在短时间内增值了，所以还算有钱，能用钱解决的事情我都会去做。”

“我也不太明白，用钱来解决问题，真是个奇怪的大人啊，这一点让我有点生气，不过没关系吧……隔壁还在做吗?”

一色又从拉门的缝隙向隔壁窥视……就那样僵住了。

“怎么了，你在做什么新的事情吗?”

我看了看木材座，那里

有个以户冢为背景的比企谷。

“太棒了!太舒服了!彩加!怀孕吧!”

“啊，八幡超舒服的!屁股好像要怀孕了……我可是男人啊……”

目瞪口呆的木材座和一色突然清醒过来，

“……我要睡了。”

“我也不想再听到他们的喘息声了，因为我已经做了一整夜了。”

然后放在壁橱里。

“喂!我盯上你了!在外面吵得人睡不着吧!”

“吵死了!谁快谁赢!”

“不行!材木前辈请在厕所睡觉!”

结果两个人走进了壁橱，两个人走进的壁橱里安静了一会儿，但最后还是传来了扭动的声音和粗重的呼吸声。

消失的未来 第14话

====================================

改变命运的代价很大···材木座和一色的命运也发生了很大的改变，不过，谜的存在为了谢罪那里请如何能做那样的调整。木材座和一色的明天是哪一个?

====================================

回忆结束

“想起来了吗?”

“想起来了……虽说是流动，但和主子发生了肉体关系……这就是那家伙说的对一般男性来说没有损失的意思吗?当然，如果是第一次接触一色殿这样的女子的话，也许是这样的……”

“啊?这不是理所当然的吗?这么可爱的孩子，我还是第一次体验呢?应该高兴才对吧?”

抱着胳膊发怒，材木座跪地跪地

“那一段没有结束，但是希望你能明白，像你这样的激川现役JK，在那种情况下不出手的男人是不存在的。不过，这可能是他说的，加强联系的结果。能力很高。”

“说得有点恶心，不过可能确实是那家伙的缘故吧，我完全不知道他为什么会在那里挑衅，实际上并没有什么不愉快的感觉……不过问题不在那里，是在那之后。”

“我知道，就是他说的‘代价’吧?”

旅行后，验孕试纸呈阴性，但为了慎重起见，还是在正规的地方进行了验孕，结果发现自己本来就无法怀孕。

不安的材木座也一起接受了检查，结果同样不能生孩子。

“这就是他说的‘代价’，一看到检查结果，我的脑海里就回响起来。”

“我也是，不过，我扭转了时间，改变了人生，或许应该庆幸这点代价。”

“这个我知道，但是很痛苦啊……”

眼眶泛泪，低着头，过了一会儿，

“是啊!除此之外问题也太多了!高中的时候以为这样就不会再见面了!上大学的时候呢!第二次的女大学生生活!这次一定要获得帅哥的计划!”为什么住在隔壁的是你!是跟踪狂吗?”

“明明住在前面，却被当成跟踪狂，这是怎么回事?不过，确实在之前的时间轴上，应该不是这样的。”

木材座一脸惊讶

“原来如此!他说的那个神就是这个意思吗?因为关系加强，所以就那样向未来推进，所以和原来的时间轴无法整合，是这个意思吗?”

“所以频繁地见面，结果就变成了融洽交往的地步……听说因为有不孕的事，所以对前辈们保密。”

叹息的一色

“这次的事故也是因为差点被同行的前辈们发现，所以冲刺逃跑，结果被车撞了，真是愚蠢透顶。”

“真是对不起，现在就分手吧。”

再次下跪的木材座。

但是看到跪在地上的木材座，一色笑了。

“不，不分手，绝对、绝对!”

“啊?不知不觉间我就有这样的魅力?世界上流行微胖吗?我的时代来了吗!”

和变得有精神的木材座吃惊的表情一色

“你是傻瓜吗?可以吗?你知道世界上的女性为了抓住高个子、高收入、还有帅哥这三种类型的男人要付出多大的努力吗?”

极力主张的一色

“原来如此，我确实个子很高，而且还是个帅哥啊!”

“···材木前辈的镜子烂了也是没办法的事···可以吗?材木前辈个子很高，而且不符合年龄，是个有钱人!有2/3的话算是合格的!”

“啊?有钱?我还是个学生?”

“我记得你之前说过，投资股票、比特币之类的，确实能涨的，给我看了!你看看自己的手机吧。”

木材座拿出手机一看，里面有很多股票和虚拟货币账户的应用程序。

“……想起来了……这确实是一个一个……”

试着登录了一个，那里显示了很多位数。而且还在一点点增加。股票账户上也显示了惊人的金额。

“这就是他说的让你生活困难的家伙吗?确实，我对死前的行情大致有个把握，但涨幅实在太高了，照这样运作下去，可能会有几倍，甚至几十倍的收益。这是一笔不小的数目，说实话，不用动也行，上亿日元也很宽裕啊。”

“所以我绝对不会离开你的。你能娶这么可爱的伊吕波做老婆吗?应该哭着跪地表示感谢吧?但是如果暴跌到一文不名，我就抛弃你了，请多多指教!”

这时比企谷他们出现了。

“你们在干什么啊?”

跪在地上的木材座和俯视着木材座的人，在旁人看来很奇怪

“前辈，其实……因为这个木材前辈要下跪，就吵着让这个可爱的伊吕波扮演护士看护他。”

“好久没这么嘲笑你了，不过材木座，这种令人羡慕的场合就去那种店吧?现实和妄想要区别对待。”

“真的是这样啊，前辈，现在已经是中午了，一起吃饭吧，这家医院的食堂被认为很难吃，一起吃吧，用前辈的钱。”

一色把自己的胳膊缠住比企谷的胳膊

“为什么这么难吃还要去吃?而且是用我的钱。”

“八幡医院的食堂因为控制卡路里的摄入，所以味道很淡，所以感觉不怎么好吃。比起这个，羡慕是什么呢?你是用那样的眼神看一色的吗?想要说明一下，还有一色先生?你不是有点习惯吗?本来想让我cosplay的话就跟我说……”

雪下飞快地瞪着比企谷，户冢一边安慰他，一边走出房间，只有由比滨最后回头看着材木座，伸出大拇指眨了眨眼。

“初二!加油!”

说了一句就出去了。

“从另一种意义上说，我的头开始疼了。”

之后继续进行检查，材木座和一色出院。

钱的事因为金额巨大瞒着父母，交往的事也像以前一样瞒着周围的人继续着大学生活。

消失的未来 第15话

====================================

木材座只要有钱什么都能做!的感觉。

还有一集就结束了。

====================================

大学毕业后，比企谷他们马上结婚了。

比企谷和户冢的结婚典礼是联合举行的，听说新婚旅行的地方也在一起

“比企谷家、雪之下家、户冢家、由比浜家的4位新郎、新娘都是非常要好的朋友，所以举行了这样的仪式。”

聚光灯下的主持人有些困惑地说。

对于仅仅是朋友关系的两对同时举行婚礼的婚礼会场来说是前所未闻的。

虽然家人和亲戚们都有些不知所措，但设置在正中间的朋友席上，清一色的木材座和人都一脸凝重地坐着。

“我们能这样结婚，多亏了这两个好朋友!”

雪下对着木材座们说话，聚光灯就会照过来。

“什么?这不是要晒我们吗?”

“各种乱七八糟的……上次人生的八幡仪式也还算华丽，不过我想还不至于到此为止……”

有些不知所措的两人，因为被委托了演讲，所以用比较简单的语言致辞，仪式就这样圆满落幕了。

回家的路

“嗯，回礼是两倍，贺礼是一次性送过去的，平时是3万，现在只需要5万就行了，真是太划算了，今后这样的事情要多做一些，这样钱包也省心。”

“又不是大减价……”

一脸惊讶和得益和性价比最高和心情愉快的木材座

“……不过我已经找工作了，老实说我不想工作，义辉前辈，请快点结婚，让我做家庭主妇，然后把财产给我。”

“又是这个话题啊……这方面以前就有了吧，结婚的话父母会催孩子，八幡们也会说很多话，那个时候如果被知道身体的事就会很不愉快哦。这方面还是慎重为好。”

不想工作是完全同意的材木座，但是因为投资增加了庞大的资产和不能生孩子的身体等，如果被周围的人知道的话，确实会变成各种各样的麻烦的事，因此还是隐瞒交往的事一般就做了。就职了。

而且住的地方也盖了房子同居，当然对周围的人是保密的。

为了让周围的人看起来是分开住的，他买了好几套公寓，然后装出住在其中一个房间里的样子。这也是庞大资产所做的事。

为了不被周围的人怀疑，两人先在工作的地方工作。

有一天

“我想到了一个好主意!”

一起吃晚饭的一色叫道

“前几天我们公司的人辞职了，说要开始做服装业。”

“原来如此，那么，我也要脱下身，成为neoneet，这是人类的梦想，不过现在的我是有可能实现的，嗯，这个炖菜真好吃，好像又有本事了。”

吃着一色做的晚饭的材木座，因为是同居关系，所以每次晚饭都是一色亲手做的。

“啊!是吗?是吗——做得很好——是傻瓜吗?是傻瓜吗?不是的!嗯——认真听我说!这样下去，不去前辈们那里就见不到面。”

“那个莫名其妙的家伙不是说过‘不亲自去看，就不知道自己的愿望是否实现’吗?所以他才会极力去看那些家伙，对吧?”

“听好了!对方是新婚燕尔! ?不要频繁地在那种地方纠缠!绝对不要!大概要持续多久才好呢?”

“是这样吗?对方也很高兴吧?”

“你说呢?新婚会有这样那样的事情啊!这样那样的!你也给义辉做了很多事情吧?那个时候如果有客人来，你会怎么想?很讨厌吧!”

“呜呜……”

回答不上来的材木座，材木座买了成堆的游戏角色和动画等充满趣味的cosplay服装，清一色地穿上，那已经是所有薄书的状况再现，是赚钱的技能。

“是吧?所以让对方来就没问题了。”

“怎么回事?”

“开一家前辈们专用的店，让他们来店里!”

“店?喜欢八幡的是max coffee和千叶……”

“是啊，那家卖粗甜咖啡的咖啡店怎么样?只有前辈们才会来!”

“原来如此……我觉得这是个好主意，可我对咖啡没什么知识。钱倒是可以，但开店总有各种各样的理由吧?”

“不是有像这样把咖啡豆打成各种各样的东西吗?买那种超高级的东西就行了!咖啡的技术只要工具好就很帅!理由什么的随便就行了吧?”

“哇……这不是对全国咖啡店老板的侮辱吗?我觉得这是要下跪谢罪的程度……”

于是，为了能和比企谷他们见面，有钱又不想工作的两人早早脱了身，开了家咖啡店。

周围的人都说，“开一家小咖啡店是我的梦想”，材木座和一色编造了一个很普通的理由，当然，父母和比企谷等人也都说“我没听说过”，但一色也是志同道合，为此积攒了资金。勉强说服了周围的人。

当然，实际上开咖啡店的费用对于现在的材木座来说是没有问题的，所以开店很顺利。

尾声

====================================

结束了，为了庆祝材木座的生日制作了作品。如果有兴趣的话，明年可能还会再做。

因为是最后，所以把阳乃也卷进来了。和避免了最坏未来的木材座一起干杯

====================================

“不过材木座是咖啡店，气氛倒是挺时髦的，这让我很生气。”

今天比企谷和户冢他们带着孩子来了。

刚进店就一如既往的比企谷八幡

“八幡!太过分了，那一带本来就是伊吕波的家伙……”

“就是那里!我觉得有点可疑!因为一直在一起，所以我们也有点小心翼翼。为什么不结婚呢?”

户冢

“不，还没下定决心……”

“是、是啊，义辉太靠不住了，必须让他随时都能被抛弃。”

两人露出微妙的笑容。

一色和材木座果然没有结婚，一旦被告知不能生孩子，父母就不用说了，比企谷他们也会为他们担心，所以在商量的结果中，他们以年龄的原因不能生孩子为借口，一直拖到结婚的年龄。

“我一直觉得这家伙适合吃拉面。”

比企谷喝用max咖啡制作的特制混合咖啡

“哼，能保持瓶装max咖啡的咖啡店，全世界也不过如此，感谢八幡。”

“所以你不是经常来吗?”

材木座把所有的咖啡都加入max咖啡，开发出比企谷喜欢的混合咖啡。

“店里又大又有儿童游乐场，帮了我很多忙!初二!”

“是啊，累了的时候正好。”

店内甚至还有儿童空间，可以说是专为比企谷他们而建的店。

然后又来了一个这里的常客

“哈哈哈!我来看孩子们了!和姐姐一起玩!”

“啊!是阿姨!”

“春姨，你好!”

“不是阿姨，是姐姐，是谁做的?是谁做的?是哪里的八幡君做的?待会儿要教训你哦。”

阳乃一边说着，一边抱起孩子们，一起在儿童空间里玩起来。

把孩子托付给阳乃的四个人围着桌子谈笑风生，不管怎么说都有很多身体接触，而且还传达出一种娇艳的感觉，感觉关系太好了。

材木座看到四个人过于亲密的关系，想起了高中春假旅行时看到的光景。

“喂，那个孩子真的是彼此伴侣的孩子吗?”

吓了一跳的四个人瞬间僵住了

“那当然了，材木座你在说什么?我已经做过DNA鉴定了，没有问题，是吧?雪乃?”

“当然了，已经做过DNA鉴定了，没有问题，是八幡的孩子啊。但是彩加……不是，彩加和结衣的孩子，就像我们的孩子一样。”

“运送啊，已经做了DNA鉴定，确认没有问题，没有问题吧?对吧?结衣?”

“嗯，做了DNA鉴定，肯定是我和阿彩的孩子。但是，不是希基··，希基和幸乃的孩子就像我们的孩子一样!”

“一般不会那么强调DNA鉴定。”

被这句话吓了一跳的四个人

“娜娜娜娜，你在说什么木材座?听好了，DNA鉴定是用来检验一个人是否有残疾的吧?”

虽然极力主张，但眼神完全游离的比企谷们

“虽然希望你能一一排队，但还是很不安，生日好像也在一起呢……”

突然看到阳乃抱着孩子们笑眯眯的样子，仔细看了看一起玩的孩子们，觉得两个孩子作为孩子来说都太可爱了，五官端正，中性的外表，本来两个孩子头上就有特征的蠢毛。像这样的东西……

我摇着头说，你想太多了。

“这就是你想要的未来吗?”

材木座更纳闷了。

“这就是你们想要的未来。”

突然传来一个声音，店内没有人了。

窗外的景色也停止了移动，眼前不知何时站着的是面无表情的阳乃。

“正好借这家伙的身体说话，对了，你还记得今天的日子吗?按照之前的时间轴，今天正好是这个时候，就是你们被摔在马路上浑身是血的时候。”

阳乃眼神呆滞，面不改色地继续说着

“‘想要看到八幡们做出幸福选择的世界，想要操纵们洋溢着幸福笑容的未来’你们不是这么说吗?现在不就是这样吗?”

“为什么要帮我们做到这种地步?”

“任性，我只是对你们有点兴趣。”

“因为一时兴起，竟然让你这么做……”

“所以你得到了补偿吧，应该明白是什么样的补偿了。听好了吗?你要感谢我啊?多亏了钱，生活才没有困难吧，最多把余生都用在了他们的幸福上……那我就消失了，活着的时候不会再见面了，死的时候再见面吧?”

话音刚落，店里的气氛就恢复了，喧嚣也回来了

眼前的阳乃一脸惊讶地想了想，然后就那样坐在木材座前的吧台上，支起胳膊肘

“哎……我是为了你们这些雪乃才和神做的交易……神竟然会缠着我，也太迂阔了吧?”

对那句话大吃一惊

“真的是这个人吗?”

但是，下面这句话让木材座的所有人都僵住了

“拜托你们帮忙是正确的吗?”

“什么?”

“到底怎么回事……?”

“我死了，刚才这个时间，你们回去后，我在离开店里的时候被捅了一刀，当时公司也发生了很大的事情，所以很多人都恨我。”

“被刺了……”

“然后我就倒下了，啊，我想我也该结束了，这时有个奇怪的人问我‘有没有愿望’，我说希望雪乃能幸福，她说‘妹妹啊，这是很普通的愿望……和刚才那几个人一样。是吧?哈哈哈，如果顺利的话，也许会有办法的，如果顺利的话，就向刚才那两个人行礼吧?’听到这句话，我眼前一黑……”

“难道回到了过去?”

材木座问道，阳乃摇了摇头。

“到这里就结束了，现在才想起这里，不过对不起。”

突然低下头的阳乃

“‘代价’的事我现在明白了，原因是我吧……”

“啊，什么都没问就答应下来的我们也有问题啊……”

“是啊，前辈们能那样面带笑容，我们就很满足了。这家店也是为了这个才开的……”

一脸尴尬的木材座和一色

“这样啊，以后我一定会好好感谢你的，也许真的要感谢你一辈子……那么，我想听听你们的故事，看看你们帮了雪乃她们什么忙?”

清一色点头

“首先被车撞的我们……”

一色想把事情经过告诉他，比企谷他们在后面兴奋地说要不要一起去旅行。

听了那个的木材座

“八幡啊，旅行倒是可以，但是同父异母的兄弟，看动画片就够了吧?”

四个人又被吓了一跳，难道非要把说这些话的原委告诉眼前的阳乃吗，确实会很麻烦。

“比消失的未来要好得多吗?”

说着仰望天花板

“可是，对那家伙来说，无论过去和未来如何改变，说不定都是‘神在天，世间万物皆无事’。”

木材座喃喃地说着某eva里的台词，摇着头，觉得这是理所当然，但又觉得自己听错了，正在擦咖啡杯。